京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二一－一四　長岡京跡・淀城跡

長 岡 京 跡 ・ 淀 城 跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

長 岡 京 跡 ・ 淀 城 跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物増築工事に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

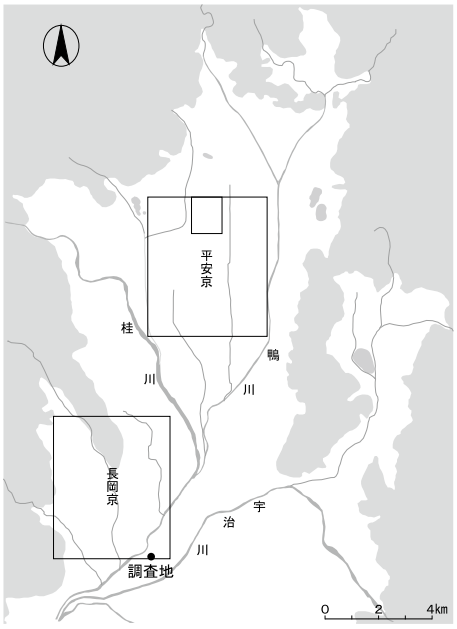
令和４年11月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　言

1	遺跡名	長岡京跡・淀城跡　（京都市番号　21 S 037） 長岡京跡左京第657次調査（7 AN-YIM-12）
2	調査所在地	京都市伏見区淀池上町128
3	委託者	日本中央競馬会　京都競馬場　場長　松田恵作
4	調査期間	2021年11月22日～2022年2月28日
5	調査面積	433.5㎡
6	調査担当者	中谷俊哉・小檜山一良
7	使用地図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「納所」・「淀」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使用標高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺構番号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺物番号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、土製品は「土」、金属製品は「金」、石製品は「石」、ガラス製品は「ガ」をそれぞれ頭に付した。
13	本書作成	中谷俊哉
14	備考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協力者	調査ならびに本書作成には、下記の方々のご協力を得た。 來本雅之、小林大祐、鍬柄俊夫、髙田　徹、塚原十三雄、常松隆嗣、中井　均、能芝　勉、橋本清一、福島克彦、三好孝一、母利美和、矢ヶ崎善太郎、山口誠司 （五十音順／敬称略）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）歴史的環境と立地 …… 3
（２）既往の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 11
（１）基本層序 …… 11
（２）第３面（江戸時代中期以前）の遺構 …… 11
（３）第２面（江戸時代中期から後期）の遺構 …… 12
（４）第１面（江戸時代後期から末期）の遺構 …… 15
４．遺　　物 …… 18
（１）土器類 …… 18
（２）瓦類 …… 20
（３）土製品 …… 20
（４）その他の遺物 …… 20
５．ま と め …… 22
（１）遺構の変遷 …… 22
（２）遺構の検討 …… 26
（３）屋敷地の復元 …… 29

図　版　目　次

図版１　遺構　第３面平面図、確認調査区断面図（１：30）
図版２　遺構　第２面平面図（１：150）
図版３　遺構　第１面平面図（１：150）
図版４　遺構　調査区南壁断面図（１：60）
図版５　遺構　調査区西壁断面図（１：60）
図版６　遺構　調査区北壁断面図（１：60）
図版７　遺構　建物１平面図（１：80）
図版８　遺構　建物１断面図１（１：60）

図版９　遺構　建物１断面図２（１：60）
図版10　遺構　建物２平面図（１：80）
図版11　遺構　建物２断面図（１：60）
図版12　遺構　建物３平面図（１：80）・断面図（１：60）
図版13　遺構　建物４実測図（１：40）
図版14　遺構　溝427・488・503・511平面図（１：80）・断面図（１：40）
図版15　遺構　瓦組遺構485・512・515、土坑92・96・97・120実測図（１：30）
図版16　遺構　瓦列126・421、溝128、地業562平面図（１：80）
図版17　遺構　瓦列126・421、溝128、地業562断面図（１：40）
図版18　遺構　建物５平面図・立面図１（１：60）
図版19　遺構　建物５平面図・立面図２（１：60）
図版20　遺構　建物５断面図（１：60）
図版21　遺構　建物６平面図（１：80）
図版22　遺構　建物６断面図１（１：60）
図版23　遺構　建物６断面図２（１：60）
図版24　遺構　建物７平面図（１：80）・断面図（１：60）
図版25　遺構　瓦組遺構40・蹲踞356・踏石357実測図（１：30）、土坑510実測図（１：60）
図版26　遺物　土坑510出土土器実測図１（１：４）
図版27　遺物　土坑510出土土器実測図２（１：４）
図版28　遺物　整地層Ⅴ・整地層Ⅲ・その他遺構出土土器実測図（１：４）
図版29　遺物　土坑510出土瓦拓影及び実測図１（１：４）
図版30　遺物　土坑510出土瓦拓影及び実測図２（１：４）
図版31　遺物　その他遺構出土瓦拓影及び実測図１（１：４）
図版32　遺物　その他遺構出土瓦拓影及び実測図２（１：４）
図版33　遺物　土製品・金属製品実測図及び拓影（１：２）
図版34　遺物　石製品実測図及び拓影（１：２、石４のみ１：６）
図版35　遺構　１　第２面東半全景（西から）
　　２　第２面西半全景（西から）
図版36　遺構　１　建物１北部　溝128・瓦列126・石列132（南西から）
　　２　溝128断割（南から）
図版37　遺構　１　建物１東部　石列203（南東から）
　　２　建物１南部　瓦敷124・石列216（北西から）
　　３　建物１南西部　瓦敷124（北から）
図版38　遺構　１　建物２（東から）
　　２　建物２南部　南辺礎石列断割（北西から）

3　建物２南部　礎石382断割（西から）

4　礎石382上面加工痕（西から）

図版39　遺構　1　建物２南部　三和土502及び補修痕跡（北西から）

2　三和土502上面　柱痕の列（北東から）

3　三和土502上面　礎石549直上の柱痕（北東から）

4　三和土502　柱痕と下層の礎石551（北から）

図版40　遺構　1　建物３（西から）

2　建物３東部　断割（南東から）

図版41　遺構　1　建物３西部　瓦列421（北西から）

2　瓦列421下層　地業562（北西から）

図版42　遺構　1　建物４（西から）

2　建物４南部　石垣501南面（南西から）

3　石垣501南面細部（南から）

図版43　遺構　1　建物４西部　石垣501西面（西から）

2　石垣501西面　検出時（西から）

3　石垣501西面　断割（南から）

図版44　遺構　1　溝503・511（北西から）

2　溝511東部（北から）

3　溝511南東部　改修後（西から）

図版45　遺構　1　溝427・488・503・511（東から）

2　溝503（南から）

3　瓦組遺構515（南から）

4　土坑96半裁（北西から）

図版46　遺構　1　第１面東半全景（西から）

2　第１面西半全景（西から）

図版47　遺構　1　建物５西部　石垣43・88（北西から）

2　建物５南西部　石垣43（北西から）

図版48　遺構　1　建物５北西部　石垣88（北西から）

2　石垣88細部（北から）

図版49　遺構　1　建物５南部　蠟燭基礎列（西から）

2　蠟燭基礎列（北から）

3　蠟燭石61（西から）

図版50　遺構　1　建物６（西から）

2　建物６南東部　布掘り基礎328（南から）

図版51　遺構　1　建物６西部　蠟燭基礎列（北西から）

２　建物６　礎石263（西から）
３　建物６　礎石268被熱痕（北から）
４　礎石268断割（西から）
図版52　遺構　１　建物７（東から）
２　建物７　漆喰溝246（北から）
３　漆喰溝246半裁（南から）
４　建物７　ピット295半裁（西から）
図版53　遺構　１　土坑510半裁（北西から）
２　蹲踞356（南から）
３　蹲踞356細部（南西から）
４　瓦組遺構40（東から）
５　踏石357（南西から）
図版54　遺構　１　土壁検出時（西から）
２　土壁剝ぎ取り直後細部（西から）
３　第３面全景（北から）
図版55　遺物　出土土器
図版56　遺物　出土瓦

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）　…… 1
図２　調査区配置図（１：1,000）…… 2
図３　調査前全景（東から）　…… 2
図４　作業状況（南東から）　…… 2
図５　現地公開風景（北から）　…… 2
図６　調査後状況（東から）　…… 2
図７　周辺調査位置図（１：7,500）…… 4
図８　調査区南壁　地業560断面（北から）　…… 14
図９　土壁断面図（１：２）…… 16
図10　炉壇上面の煤痕　…… 21
図11　遺構変遷図（１：300）　…… 23
図12　各時期の淀城絵図（東曲輪部分を拡大加筆、いずれも右が北、縮尺不同）　…… 25

図13　基準格子による建物の配置（１：250）　…… 27
図14　第Ⅱ期建物群の周囲に施される地業（１：200）　…… 28
図15　東曲輪復元図と今回調査地（１：1,000）　…… 30
図16　屋敷地空間の復元（左）と関連絵図（右）　…… 31

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　…… 5
表２　遺構概要表　…… 11
表３　遺物概要表　…… 18

付　表　目　次

付表１　土器観察表　…… 34
付表２　瓦観察表　…… 36
付表３　土製品観察表　…… 38
付表４　金属製品観察表　…… 38
付表５　石製品観察表　…… 38

長岡京跡・淀城跡

1．調査経過

本調査は京都競馬場淀寮増築工事に伴う発掘調査である。調査地は長岡京跡および淀城跡に該当する（図１）。今回の調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により調査地内で試掘調査が実施された。その結果、江戸時代の遺構面が良好に遺存していることが確認されたため、原因者に発掘調査の指導がなされた。発掘調査は原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査は、文化財保護課の指導により南北14.5ｍ、東西29ｍの計420.5㎡が対象となり、2021年11月22日から開始した。土置き場の関係から東西別々に調査をすることとして、各々２面の調査を行った。なお、調査の過程で土坑510・建物１・建物４・落込497の規模を確定するため、かつ下層を確認するため13.0㎡の拡張を行った。その結果、江戸時代の建物・石垣・溝などの遺構を検出した。図面作成・写真撮影などによる記録作業を行い、2022年２月28日に調査を終了した。

調査中は適宜、文化財保護課による臨検および、検証委員である近畿大学の網 伸也教授、同志社大学の浜中邦弘准教授の視察を受けた。また、調査期間中の2022年２月24日に地元住民向けの現地説明会、および記者発表を行った。

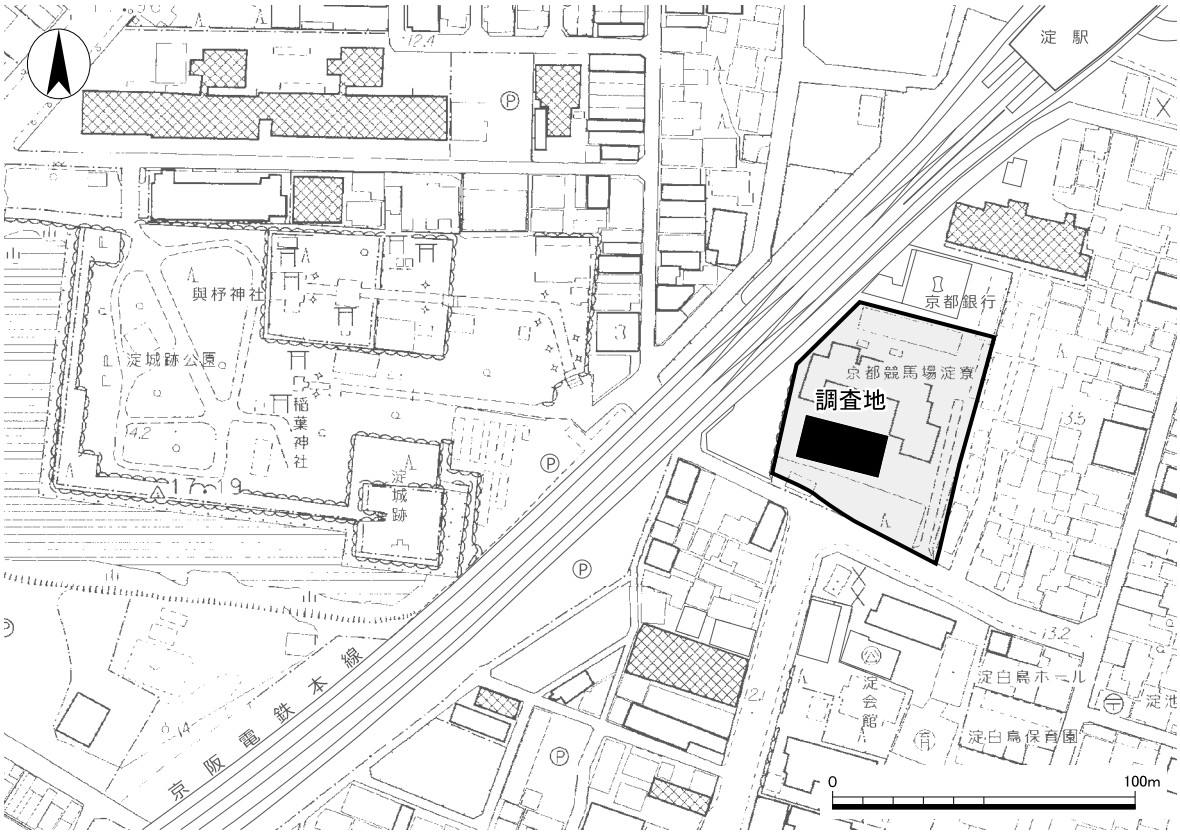


図１　調査位置図（１：2,500）

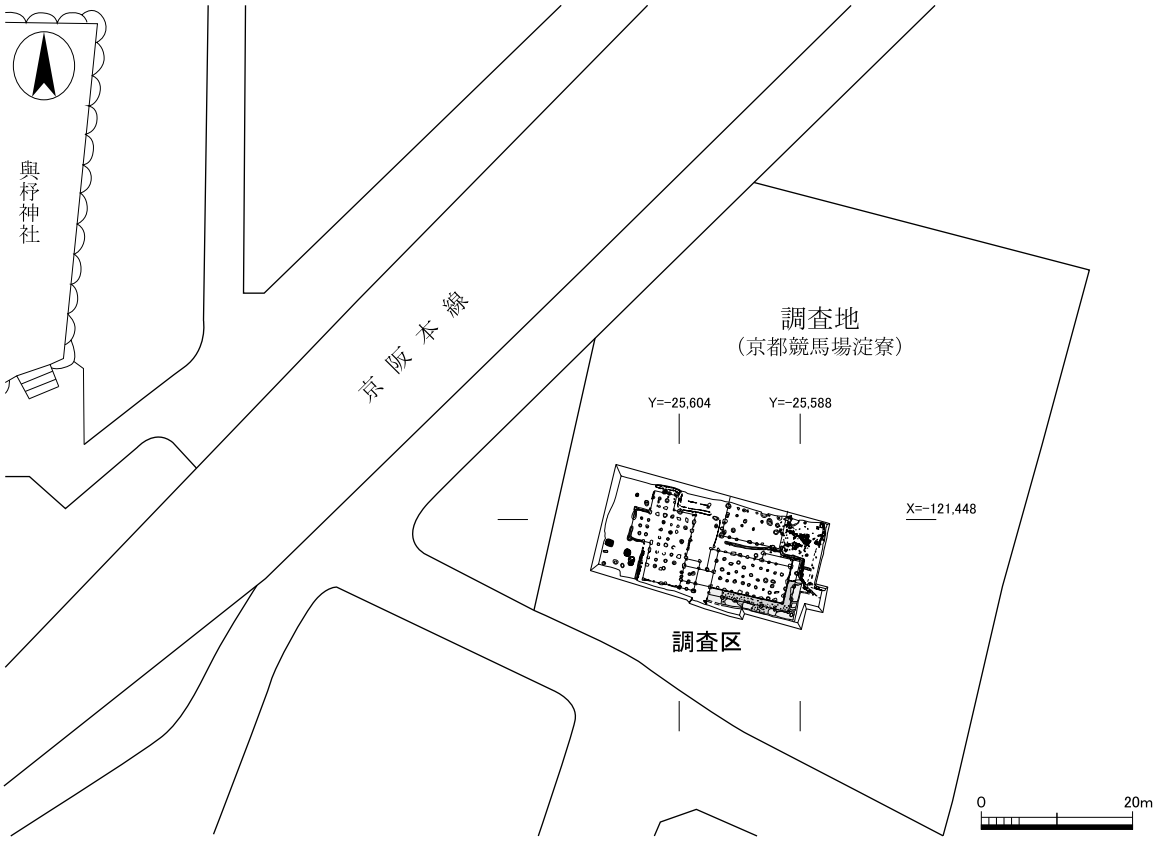


図２　調査区配置図（１：1,000）

図３　調査前全景（東から）

図４　作業状況（南東から）

図５　現地公開風景（北から）

図６　調査後状況（東から）

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

本調査地は、京都盆地南西部の桂川・宇治川・木津川が合流する場所に位置する。この場所は、花崗岩などからなる木津川流域の山地や、更新世の段階に京都盆地に堆積した大阪層群に由来する砂礫が、３つの河川の開析によって運ばれ形成された氾濫原性低地である。そのため、大雨時には増水しやすく河川氾濫の影響を非常に受けやすい立地となっている[1)]。特に近世以降は、河川の天井川化の進行によって毎年のように洪水被害に悩まされた[2)]。

調査地周辺は、長岡京左京の南側に位置する[3)]。平安時代以降は、平安京の外港としての「淀津」が発達し、淀津は問丸の活躍などによって港湾機能が複雑化、拡大していく[4)]。その一方で、当地域は守護所や淀古城が置かれて政治的にも重要視された[5)]。しかし、文禄元年（1592）の伏見城築城と港湾機能の伏見移転を機に大きく衰退した[6)]。

江戸時代に入ると、元和９年（1623）の伏見城の廃城に伴い、淀古城の南側の場所に新たに淀城が築かれた。築城にあたっては東曲輪予定地を縦断する大坂街道（京街道）および街道沿いの町屋を迂回・移転させるなど大工事が行われ[7)]、寛永３年（1626）までに完成した。また、淀藩が立藩され、歴代藩主には譜代大名が任ぜられた。当藩には、大坂街道と淀川交通の中継点という立地から淀宿が置かれ、朝鮮通信使が往来するなどした。

しかし、慶応４年（1868）、鳥羽・伏見の戦いで戦場となり、城下町の大半と城の一部が焼失する甚大な被害を受けた。

（２）既往の調査

周辺では、これまでに多数の調査を実施している。そのうち遺構が検出された調査について図７・表１にまとめた。以下では淀城期以前および淀城期の遺構を検出した主要な調査を取り上げ、地点ごとに概要を述べる。

淀城期以前の遺構　東曲輪で、旧大坂街道路面を最大10面（調査38・40～43・45・51）、また街道沿いで町屋建物とそれに関連する建物、土間、柱穴列、礎石、地業、土坑群、井戸、溝、石列、瓦列、小径などを検出した（調査38・43・45～47・51）。また、標高8.2～8.5ｍで平安時代末期から鎌倉時代にかけての包含層、標高9.0～9.5ｍで室町時代の包含層を確認した（調査44）。

淀城期の遺構　淀城各所で石垣、路面、建物を検出しているほか、堀推定地で堀内堆積層を確認している。

本丸では、天守台、北東隅櫓を検出した（調査２～５）。

二ノ丸では、北端石垣（調査７・８・10）、西端石垣（調査11・12）、東端石垣（調査13）、内桝形虎口北東隅と推定される石垣（調査６）を検出した。

三ノ丸では、近世の包含層を確認した（調査20）。

図７　周辺調査位置図（１：7,500）

表1　周辺調査一覧表

No.	調査年度	調査方法	調査機関	調査地点	主な遺構	文献
1	1881	発見	―	本丸	現在の輿杼神社本殿付近で不時発見された地鎮具(輪宝2、賢瓶1、独鈷杵1)で、遺構は不明(輿杼神社が現在地に移転する1902年より以前の出来事)。	1
2	1977 1978	試掘	伏見研		天守台北東隅に犬走。	2・3
3	1987	発掘	伏見研		天守で石蔵(地下室)、礎石。天守台外周では石製U字状溝を用いた排水溝。 火災痕跡(1756年の落雷火災によるものと推定)。	2～5
4	1987	測量	伏見研		天守台石垣全面の石材を計測・図化。刻印・墨書あり。	2～5
5	2006	試掘	保護課		GL約-0.6mで淀城期焼土面(鳥羽・伏見の戦い時のものか)。 輿杼神社境内の石垣が、本丸北辺・東辺石垣、本丸北東隅の隅櫓西面・南面石垣であることを確認、隅櫓の石垣は3～4段分検出。また隅櫓西面石垣西側に取り付く階段3段分を検出、階段は南に下がる。さらに隅櫓の南西隅で礎石1基。	6
6	1996	試掘	保護課	本丸～二ノ丸	本丸と二ノ丸の境界となる石垣で、逆「L」字状に屈曲。北列石垣は南面、東列石垣は西面し、石垣の面する内側の空間は一段低くなる。江戸時代の絵図では内枡形虎口の北東隅付近。	7
7	1984	立会	埋文研	二ノ丸	【地点1】二ノ丸北端石垣と旧宇治川南肩。	8
8					【地点2】GL-2.00mで二ノ丸北端石垣裏込めと旧宇治川南肩。	
9					【地点3】整地層。	
10	2020	詳細	保護課		GL-2mで二ノ丸北端石垣。	9
11	1976	試掘	保護課	二ノ丸～内堀	GL-2.5～3.0mで二ノ丸西側の石垣。花崗岩の石垣が3段、刻印あり。	10
12	2017	発掘	埋文研		GL-1.3mで二ノ丸東端石垣と西側内堀の東肩を検出。さらにその西側(二ノ丸中枢部)で、東面する東西方向の石列を検出。	11・12
13	2019	詳細	保護課		二ノ丸東端石垣と西側内堀の東肩を検出。	13
14	1977 1978	試掘	伏見研	内堀	【試掘A】南側内堀内。	2・3
15	1984	立会	埋文研		東側内堀内。GL-3.2mで灰色土層を確認するも湧水が著しく作業中止。当地はもと池(あるいは沼)だったという。	14
16	1986	立会	埋文研		東側内堀内。GL-0.46mで堀内堆積土層。	15
17	1989	立会	埋文研		東側内堀内。GL-0.7mで流路堆積。	16
18	1999	立会	保護課		西側内堀内。GL-0.4mで堀内埋土。	17
19	2003	試掘	保護課		東側内堀内。湧水が著しく作業中止。観察できず。	18
20	1985	立会	埋文研	三ノ丸	GL-1.0mで近世層。	15
21	2006 2010 2011	発掘	埋文研	内堀～曲輪	【B4区】標高約10.85～11.0m(GL-1.0～1.1m)で曲輪西端石垣2～3段分と西側内堀東肩を検出するも、底は確認できず。曲輪内の路面状整地層上で柱列、雨落ち、瓦溜り。また曲輪西端付近で淀城造成時の南北にのびる堤状盛土。	19～21
22	2006 2010 2011	発掘	埋文研	曲輪～中堀	【B5区】標高11.3m前後(GL-0.4m)で曲輪東端石垣2段分と西側中堀西肩。また中堀に架かる土橋の南端石垣3段分を検出。石垣・堀はともに底が確認できず。曲輪内で検出された集水枡には石製U字状溝が取り付き、この溝は中堀に続く。また曲輪内で根石をもつ柱穴。	19～21
23	1977 1978	試掘	伏見研	内堀～南曲輪	【試掘B～F】南曲輪北端石垣と南側内堀南肩。	2・3
24	2006 2010 2011	発掘	埋文研		【B3区】標高10.7m前後(GL-0.6m)で南曲輪北端石垣2～3段分と南側内堀南肩。南曲輪内で淀城築城期の遺構面。南曲輪北端付近のGL-2.2mで淀城造成時の堤状盛土。	19～21
25	1990	立会	埋文研	南曲輪	GL-1.5mで淀城期整地層。	22
26	2003	試掘	保護課		【1区】標高10.3m付近で土坑。	23
27					【2区】標高10.7m(GL-0.35m)付近で、南面する東西方向の石垣2段。江戸時代の絵図から枇杷木御門内側の内枡形虎口の北側石垣と推定される。	
28	2003	立会 試掘	保護課		【4区】GL-1.6mで南曲輪北端石垣裏込め。	23・24
29	2006 2010 2011	発掘	埋文研		【B2区】標高10.0m前後(GL-0.2～0.4m)で布掘基礎を有する2間×6間の建物。また建物北辺に接して、北面する東西方向の石垣。建物東側には東面する南北方向の石列。建物西側には井戸1基。建物は江戸時代の絵図から米蔵と推定される。	19～21
30	2006 2010 2011	発掘	埋文研	南曲輪～中堀	【B1区】標高11.2m前後(GL-0.2m)で南曲輪南端石垣を1段分と南側中堀北肩。石垣は18世紀中頃に拡幅。またこの石垣に直交する西面石垣を検出。中堀に向かって突出しており、江戸時代の絵図にみえる橋の台部にあたると推定される。また南曲輪南端付近で東西にのびる淀城造成時の堤状盛土。	19～21
31	1990	試掘	埋文研		【1区】GL-2.1mで南曲輪南端石垣2段分、南側内堀北肩。ともに底は確認できず。	22
32	1982	立会	埋文研	中堀	東側中堀内。GL-0.0mで堀内堆積。堀内堆積は少なくとも-0.96mまで下がる。	25
33	1985	立会	埋文研		東側中堀内。GL-0.4mで堀内堆積。堀内堆積は少なくとも-1.4mまで下がる。	26
34	1987	立会	埋文研		東側中堀内。GL-0.55mで堀内堆積。堀内堆積は少なくとも-1.35mまで下がる。	27
35	1987	立会	埋文研		東側中堀内。GL-0.5mで堀内堆積。堀内堆積は少なくとも-1.2mまで下がる。	27
36	1990	試掘	埋文研		【2区】南側中堀南肩付近。底面は北に向かって下がる。	22

No.	調査年度	調査方法	調査機関	調査地点	主な遺構	文献
37	1993	立会	埋文研	中堀	東側中堀内。GL-0.8mで堀内堆積。堀内堆積は少なくとも-0.96mまで下がる。また中堀に直交する柱列を検出、橋脚の可能性あり。江戸時代の絵図には、検出柱列西延長線上の曲輪東肩に開口部あり。	28
38	2010 2011	発掘	埋文研	中堀～東曲輪	【C1区】淀城期(第1・2面、標高10.7～11.4m前後、GL-0.3～1.0m)で東曲輪西端の階段、東側中堀東肩、東側中堀に架かる土橋の北端石垣1段分。 淀城期以前(第3面、標高10.6～10.7m前後、GL-1.0～1.1m)で地業、土坑など。(第4面、標高10.3～10.5m前後、GL-1.2～1.4m)で旧大坂街道路面、柱穴、礎石。(第5面、標高9.9～10.6m前後、GL-1.1～1.8m)で旧大坂街道路面、礎石、柱穴。(第6面、標高9.7～10.1m前後、GL-1.6～2.0m)で建物、土間など。	20・21
39	1984	立会	埋文研	東曲輪	GL-0.3mで比較的固く締まった面、-0.4mで時期不明の包含層、-0.6mから少なくとも-1.2mまで氾濫による堆積層。	14
40	2003	発掘	埋文研		淀城期(第5面、標高12.5m程度、GL-1.0m程度)で東曲輪北側の外堀南肩。その南側で布掘基礎を有する2間×10間の建物。江戸時代の絵図から米蔵と推定される。 淀城期以前(第6面、標高11.0～11.3m程度、GL-2.2～2.5m程度)の整地層。	29
41	2003	発掘	埋文研			30
42	2004	発掘	埋文研			
43	2004	発掘	埋文研		【2区】淀城期(第1～3面、18世紀以降)で特殊遺構(番所と推定)、石組溝、石組、路面。(第4面、17世紀後半頃)で小礎石、柱穴、石組、路面。(第5面、17世紀中頃)で柱穴列(板塀か築地の控柱か)、路面。 淀城期以前(第6・7面、17世紀前半)で土坑群(塀基礎か)、柱穴列(板塀か)。(第8面、16世紀末～17世紀初頭)で町屋遺構。	30
44	2006	発掘	埋文研		【1区】淀城期(第1面、標高11.7m、GL-0.5m)で路面8層分、石列、井戸など。(第2面、江戸時代前期、標高11.1m前後、GL-1.1m前後)で石列。 淀城期以前(第3面、標高10.5m、GL-1.7m)で石垣。標高9.4～9.6mで江戸時代前期の包含層。標高9.5mで湿地状堆積(桃山時代～江戸時代初期)、少なくとも8.4mまで下がる。標高9.0～9.5mで室町時代の包含層。標高8.5mで平安時代末期～鎌倉時代の包含層、少なくとも8.2mまで下がる。 また東曲輪北端付近で東西にのびる淀城造成時の堤状盛土。	31
45	2006	発掘	埋文研		淀城期(第1面、江戸時代初頭、標高約10.6m、GL-1.6m)で火災整地層。 淀城期以前(第2面、標高約10.5m、GL-1.7m)で旧大坂街道路面1面、瓦列、石列、柱穴。(第3面、標高約10.1m、GL-2.1m)で旧大坂街道路面4面、石列。第3面以下(標高9.2～10.1m、GL-2.1～3.0m)では旧大坂街道路面5面。標高約8.2m(GL-4.0m)まで遺物包含層。	32
46	2010	発掘	埋文研		【C2区】淀城期(第1面、江戸時代後半、標高11.3～11.5m前後、GL-0.7～0.9m)で路面、石垣などを検出。(第2面、江戸時代前半、標高10.9～11.0m前後、GL-0.9～1.4m)で路面、石垣などを検出。火災整地層。 淀城期以前(第3～5面、江戸時代初頭、標高10.0～10.9m前後、GL-1.3～2.2m)で旧大阪街道路面、路面東側溝、町屋、柱列、縁石などを検出。(第6面、桃山時代末期、標高9.8m前後、GL-2.4m)で溝、路面、小径、空閑地を検出。	20
47	2010	発掘	埋文研		【Cs2区】淀城期(第2面、江戸時代前期、標高10.8m、GL-1.7m)で礎石、火災整地層。 淀城期以前(第3面、標高9.9～10.5m、GL-2.0～-2.6m)で整地層を3面、最上面で井戸。	20
48	2017	発掘	埋文研		淀城期(Ⅰ・Ⅱ層、江戸時代後期、GL-1.1～1.2m)で土坑、瓦の帯状堆積。(江戸時代前期、標高11.7～11.9m)でピット、土坑。 淀城期以前(標高10.5m)の遺構面。	33
49	1984	立会	埋文研	東曲輪～外堀	【地点4】東曲輪北側GL-1.6m(標高10.9m前後)で、東曲輪北端石垣、外堀両肩、池上町南端石垣。東曲輪北側石垣は2段分、池上町南端石垣は3段分。両石垣間の幅は検出面(GL-1.6m)で3.8mと狭く、江戸時代の絵図から橋台部分の石垣であると推定される。	8
50	2010	発掘	埋文研		【C3区】淀城期(GL-1.1m、標高11.3m)で東曲輪北側の外堀南肩。また東曲輪北端石垣の裏込めの可能性のある礫層。	20
51	2010	発掘	埋文研		淀城期(第1面、明治以降、標高11.3～11.6m前後)では路面1面。(第2・3面、江戸時代前期・後期、標高11.0～11.5m前後)では路面2面、石垣(櫓基礎と推定)、土坑(京口門と推定)、また東曲輪北端石垣、東曲輪北側外堀南肩とその間の土手。 淀城期以前(第4面、標高10.4m以下～10.9m前後)で旧大坂街道路面5面、その最上面(桃山時代末期～江戸時代初頭)で敷地境界石列、集石列など。	34
52	1990	立会	埋文研	中堀～内高嶋	GL-0.55mで北東部へ下がる落込あり。底面は少なくともGL-1.30mまで下がる。西側中堀西肩か。 またGL-0.64～0.87mで近世包含層、-1.03～1.08mで時期不明の整地層。	22
53	2003	試掘	保護課		【3区】標高9.1m付近で内高嶋北端石垣3段分、南側中堀南肩。	23
54	1985	立会	埋文研	内高嶋	GL-0.8mから少なくとも-2.6mまで流水堆積。	26
55	2006 2010 2011	発掘	埋文研		【A2区】淀城期(第1面、標高11.2～11.5m、GL-0.6～0.9m)で淀城期の礎石列、柱列など。(第2面、標高11.0～11.2m、GL-0.9～1.1m)で石垣、礎石建物、柱列。石垣は武家屋敷南端基礎と推定され、石垣の北側では石垣に直交する複数の柱穴列(建物となる可能性がある)および礎石建物。また内高嶋中央部で東西方向にのびる淀城造成時の堤状盛土。堤状盛土南前端で土留めと考えられる石塁。	19～21
56	2015	発掘	保護課		標高11.0m前後で池、石組枡、木樋、木製枡、瓦組遺構、集石遺構(内高嶋の護岸)。標高10.0m前後で河川流路(旧桂川分流か)。	35
57	2017	詳細	保護課		工事業者がボーリング調査で淀城石垣石材を採取、内高嶋東端あるいは橋台の石垣か。	36
58	2020	詳細	保護課		GL-1.01mで近世包含層、-1.53～1.77mで河川堆積。	37
59	2006 2010 2011	発掘	埋文研	内高嶋～外堀	【A1区】淀城期(標高10.9～11.3m、GL-0.7～1.1m)で内高嶋南端土手、南側外堀北肩。	19～21
60	2015	試掘	保護課		GL-2.8m付近で土坑と溝、内高嶋の護岸。	38

No.	調査年度	調査方法	調査機関	調査地点	主な遺構	文献
61	1992	立会	埋文研	外堀	GL-0.8mで東側外堀西肩。石垣は検出されず。	39
62	2003	立会	保護課		南側外堀内。GL-0.7mから-3.65mまで湿地状堆積。	24
63	2008	立会	保護課		南側外堀内。GL-0.95mで氾濫状堆積。	40
64	2017	試掘	保護課		南側外堀内。少なくともGL-3.69mまで現代盛土。周辺住民によると当該地は昭和40年代まで池で、昭和40年代から50年代にかけて埋め立てられた。	11
65	2020	試掘	保護課		南側外堀内。GL-1.4mで湿地状堆積(堀内堆積)。 GL-1.8mで河川堆積(旧木津川流路)。	41
66	1984	立会	保護課	外高嶋	GL-0.65m、-0.81mで江戸時代包含層、-1.03mで時期不明包含層、-1.34mで室町時代？包含層、-1.83mで地山。	14
67	2018	試掘	保護課		GL-0.75～1.00mで淀城造成土と近世後半の遺構。	42
68	2019	詳細	保護課		GL-0.75mで近世の土坑(円筒状に瓦を据える)。GL-1.09～1.42mで地山。	43
69	2004	試掘	保護課	外堀～池上町	【1区】L字状の石垣を検出。北側の北面する東西石垣は、GL-0.3～0.6mで石垣2～5段分を検出。西側の西面する南北石垣はGL-0.3mで石垣3段分を検出しており、池上町西端石垣である。	44
70					【2区】コ字状の石垣を検出。東側の石垣は、東面する南北石垣で1段分を検出。南側の石垣は、南面する東西石垣で2～3段分を検出。西側の石垣は、西面する南北石垣で4～5段分を検出しており、池上町西端石垣である。	
71	2006	発掘	埋文研		【2区】東曲輪北側の外堀北肩と池上町南端石垣(標高10.9m)を検出。	31
72	2011	発掘	埋文研		【C3区】淀城期(標高11.9m、GL-0.7m前後)で東曲輪北側の外堀北肩と池上町南端を検出。	21
73	1984	立会	埋文研	池上町	池上町北端石垣と旧宇治川南肩を検出。 GL-0.25mで北面する東西石垣を3段分検出。花崗岩を主体にチャート質の石を使用。	14
74	1990	立会	埋文研		GL-0.1mで(東面する南北方向の？)石垣を検出。GL-0.27mで焼土層、-0.45mで整地層(上面に炭層)。GL-0.82mで南北方向の溝を検出。淀城期池上町内を南北に走る道路の西側溝の可能性がある。GL-1.00mで地山。	45
75	2000	立会	埋文研		GL-0.1mで焼土層、-0.35mで整地層、-1.05mで炭混じりの層、-1.25mで焼土混じりの層、-1.34mで炭層、-1.35mで整地層、-1.45mで江戸時代の整地層(調査地は隣接する道路面より1.25m高い)。	17
76	2016	詳細	保護課		GL-0.4m、0.6m、0.92m、1.11～1.17mで近世の造成土層。	46
77	2018	詳細	保護課		GL-0.4mで焼土、炭を多量に含む層。GL-0.47mで被熱により上面が硬化した層。GL-0.6mで胞衣壷埋納土坑を検出。	47
78	2020	詳細	保護課		GL-1.33～1.39mで近世の整地層(炭混じり)。	37
79	1991	立会	埋文研	下津町	GL-0.15mで焼土層。	45
80	2019	試掘	保護課	魚之市	GL-0.75mで淀城造成土、-1.75mで基盤層か。	48
81	2017	試掘	保護課	弁天島	弁天島とそれを取り囲む池。弁天島は両汀線とも攪乱を受けており具体的な規模は不明であるが、小さく見積もっても直径30m。池は北東側で幅約18m分、南西側で幅約5m分を検出、肩は調査区外までのびる。	11
82	1982	試掘	埋文研	旧宇治川	【1区】GL-0.4mで北に向かって下がる、茶灰色泥砂と茶色泥砂の互層。旧宇治川堆積土か。GL-2.1m以下粘質土。	25
83					【2区】GL-0.3mで南に向かって下がる、茶灰色泥砂と茶色泥砂の互層。旧宇治川堆積土か。	
84	1984	立会	埋文研		GL-0.3mで河川堆積(旧宇治川堆積土)。	14
85	1988	立会	埋文研		GL-0.75mで河川堆積(旧宇治川堆積土)。	49
86	2003	試掘	保護課		旧宇治川河川敷。	50
87	2011	試掘	保護課		GL-1.2mで河川堆積(旧宇治川堆積土)。	51

※ GL-○.○mは、現地表面の高さから○.○m掘り下げた高さ(標高)のことをいう。
※ 京都市文化財保護課は保護課、京都市埋蔵文化財研究所は埋文研、伏見城研究会は伏見研と略した。

本丸東側の曲輪では、西端石垣（調査21）、東端石垣、土橋（調査22）、柱列、雨落、瓦溜、溝、集水桝（調査21・22）を検出した。

南曲輪では、北端石垣（調査23・24）、南端石垣、橋台と推定される石垣（調査30・31）、枇杷木御門内側の内桝形虎口北側と推定される石垣（調査27）、米蔵と推定される布掘基礎（調査29）、土坑（調査26）を検出した。

東曲輪では、北端石垣、橋台と推定される石垣（調査49）、米蔵と推定される布掘基礎（調査40～42）、番所と推定される石垣（調査43）、隅櫓と推定される石垣、京口門と推定される土坑列（調査51）、階段状遺構（調査38）、路面、礎石、柱穴、石組溝、井戸など（調査43・44・46～48）を

検出した。また江戸時代前期の火災整地層を検出した（調査45・47）。

内高嶋では、北端石垣（調査53）、桂川護岸（調査56・60）、武家屋敷基礎と推定される石垣、礎石建物、柱穴列（調査55）、池、石組枡、木樋、木製枡、瓦組遺構（調査56）を検出した。

外高嶋では、円筒状に瓦を据えた土坑を検出した（調査67）。

池上町では、南端石垣（調査49・71）、西端石垣（調査69・70）、北端石垣（調査73）、京街道西側溝の可能性がある溝（調査74）、胞衣壺埋納土坑（調査77）を検出した。また被熱硬化面、焼土層、炭層を検出した（調査74・75・77・78）。

下津町では、焼土層を検出した（調査79）。

弁天島では、島本体とそれを取り囲む池を検出した（調査81）。

中堀では、橋脚の可能性がある柱列を検出した（調査37）。

なお、本丸東側の曲輪、南曲輪、東曲輪、内高嶋で淀城築城に伴う堤状盛土を検出した（調査21・24・30・44・55）。いずれも曲輪の縁辺に沿って構築されており、その内側を砂で充填して造成している。内高嶋の堤状盛土では、前端部で土留めと考えられる石塁を検出した。

註

1） 石田志朗「京都盆地北部の扇状地　－平安京遷都時の京都の地勢－」『古代文化』第34巻第12号　1982年
足利健亮「京都盆地の地形」『京都歴史アトラス』 中央公論社　1994年
国土交通省 近畿地方整備局 独立行政法人 水資源機構「２．流域及び河川の概要について」『川上ダム建設事業の検証に係る検討報告書』2014年
水谷武司「12. 京都盆地－断層盆地内の扇状地に展開する古都」『防災基礎講座：地域災害環境編』国立研究開発法人 防災科学技術研究所 自然災害情報室　2016年

2） 『日本庶民生活史料集成』第８巻　見聞記　三一書房　1969年　p.806
「山城一番地ひく成る故に水難年事に有る。」『淀古今真佐子』
また淀地域では、江戸時代で記録に残っているだけでも、1630年、1658年、1701年、1712年、1717年、1721年、1723年、1725年、1728年７月、同８月、1729年、1731年、1732年、1735年、1738年、1740年、1756年、1771年、1774年、1775年、1802年、1811年、1836年、1844年、1862年 の 計25回、洪水が発生している。

3） 現在では、条坊の見直しによって京外とされている。
「長岡京条坊復元図」『(財）向日市埋蔵文化財センター年報　都城』10（1999） 財団法人向日市埋蔵文化財センター　1999年

4） 木村　宏「淀津の盛衰と港湾機能の変遷」『人文地理』８号６巻　柳原書店　1957年
小野博司「室町後期における三條西家領の伝領と支配」『法政史学』第35巻　法政大学史学会　1983年

5） 今谷　明「中世淀付近」『淀の歴史と文化』 淀観光協会　1994年

6） 前掲註４

7）『日本都市生活史料集成』四　城下町篇Ⅱ　学習研究所　1976年　p.382
「淀御城無之以前河村与惣右衛門先祖被致住居候、下津町池上町共に大坂口より小橋江街並直に有之。裏行弐拾七八間の御座候由、淀嶋之内高百五石三斗、下津町池上町魚市三ヶ所に相継、東西に畑共有之、右三ヶ町之者共作り申候由、御城地形御築被遊候に付右の畑共御用地に成り高潰申候。下津町池上町銘々間口に裏行拾三間に被成替地被下、只今之町並江罷出申候。」『山城淀下津町記録』

文献一覧表（表１　周辺調査一覧表）

1　時枝　務「淀城跡出土の地鎮具－発見記録の紹介－」『史迹と美術』第70輯の９　史迹美術同攷会　2000年
2　星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の三　淀城』　伏見城研究会　2007年
3　江谷　寛・三木善則・西野浩二『伏見城研究会発掘調査報告書2017　淀城跡（天守台跡）』　伏見城研究会　2017年
4　星野猷二『淀城跡調査概要Ⅰ』　京都市建設局公園管理課・淀城跡調査団　1987年
5　『淀城跡公園石垣改修工事報告書』　京都市建設局公園緑地部　1990年
6　『京都市内遺跡試掘調査報告　平成18年度』　京都市文化市民局　2007年
7　『京都市内遺跡試掘調査概報　平成８年度』　京都市文化市民局　1997年
8　久世康博「長岡京左京九条四坊，淀城跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年
9　鈴木久史「Ｖ－13　長岡京左京九条三坊十二町跡、淀城跡（17NG294）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和２年度』　京都市文化市民局　2021年
10　「淀城跡試掘調査」『京都市埋蔵文化財研究所概報集　1978－Ⅰ』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1978年
11　『京都市内遺跡試掘調査報告　平成29年度』　京都市文化市民局　2018年
12　松永修平『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－14　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2018年
13　黒須亜希子「Ｖ－５　長岡京左京九条三坊五・十二町跡、淀城跡（17NG294）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』　京都市文化市民局　2020年
14　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』　京都市文化観光局　1985年
15　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』　京都市文化観光局　1987年
16　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』　京都市文化観光局　1990年
17　『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』　京都市文化市民局　2001年
18　『京都市内遺跡立会調査概報　平成15年度』　京都市文化市民局　2004年
19　尾藤徳行・丸川義広・能芝　勉「淀城跡（６次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－23　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年
20　尾藤徳行・長戸満男・南出俊彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010－７　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年
21　高橋　潔・菅田　薫・竜子正彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011－７　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年
22　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』　京都市文化市民局　1991年

23 馬瀬智光「Ⅳ－７　長岡京跡・淀城跡　No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』 京都市文化市民局　2004年
24 『京都市内遺跡立会調査概報　平成16年度』 京都市文化市民局　2005年
25 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』 京都市文化観光局　1983年
26 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』 京都市文化観光局　1986年
27 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』 京都市文化観光局　1988年
28 『京都市内遺跡立会調査概報　平成５年度』 京都市文化観光局　1994年
29 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2003－13　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年
30 内田好昭・能芝妙子『長岡京跡・淀城跡（２次・３次調査)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－３　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年
31 尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡（４次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－３　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年
32 尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡（５次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－23　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年
33 松吉祐希『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－４　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2017年
34 尾藤徳行『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010－17　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年
35 鈴木久史「Ｘ　長岡京跡第583次・淀城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』 京都市文化市民局　2016年
36 『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』 京都市文化市民局　2018年
37 『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和２年度』 京都市文化市民局　2021年
38 『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』 京都市文化市民局　2016年
39 『京都市内遺跡立会調査概報　平成４年度』 京都市文化観光局　1993年
40 『京都市内遺跡立会調査報告　平成20年度』 京都市文化市民局　2009年
41 『京都市内遺跡試掘調査報告　令和２年度』 京都市文化市民局　2021年
42 『京都市内遺跡試掘調査報告　平成30年度』 京都市文化市民局　2019年
43 『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』 京都市文化市民局　2020年
44 馬瀬智光「Ⅲ－７　長岡京跡・淀城跡　No.102」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成16年度』 京都市文化市民局　2005年
45 『京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度』 京都市文化観光局　1992年
46 『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成28年度』 京都市文化市民局　2017年
47 『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成30年度』 京都市文化市民局　2019年
48 『京都市内遺跡試掘調査報告　令和元年度』 京都市文化市民局　2020年
49 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』 京都市文化観光局　1989年
50 『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』 京都市文化市民局　2004年
51 『京都市内遺跡試掘調査報告　平成23年度』 京都市文化市民局　2012年

3．遺　　構

（1）基本層序

本調査では、南壁を基本層序とする。ただし、建物周辺に施される整地層Ⅳは南壁では確認できないので、建物５・６の断面図を参照されたい（図版20－９層、図版22－22層、図版23－18層）。

層序は、現地表から順に近現代盛土、整地層Ⅰ、整地層Ⅱ、整地層Ⅲ、整地層Ⅳ、整地層Ⅴ、整地層Ⅵ、整地層Ⅶ、整地層Ⅷである。整地層Ⅰは鳥羽・伏見の戦いに伴う火災後の整地層である。整地層Ⅱ～Ⅳは第１面造成に伴う整地層である。整地層Ⅱは化粧土、整地層Ⅲは敷地の嵩上げに伴う砂層である。整地層Ⅳは地ならし、あるいは地下水湧出を防ぐための止水層とみられる。整地層Ⅴ・Ⅵは第２面造成に伴う整地層である。整地層Ⅴは化粧土、整地層Ⅵは敷地の嵩上げに伴う砂層である。なお、整地層ⅤについてはⅤａ・Ⅴｂ・Ⅴｃに細分できるが、これについては本章第３節で述べる。整地層Ⅶは第３面造成に伴う整地層で、化粧土である。整地層Ⅷは整地層Ⅵと同質の砂層である。ボーリングステッキによる調査で標高10.6ｍ以下に確認できた。

各遺構面の標高は、第１面（整地層Ⅱ上面）が13.0ｍ前後、第２面（整地層Ⅴ上面）が12.2ｍ前後、第３面（整地層Ⅶ上面）が11.3ｍ前後である。

（2）第３面（江戸時代中期以前）の遺構（図版１・54）

調査区北東部の攪乱を一部拡張して、下層遺構確認のため東西約2.8ｍ、南北約2.3ｍの第３面調査区を設定した。第３面は西から東へ下がる地形である。その変化点は段差をなしており、西側と東側は約0.2ｍの比高がある。遺構は整地層Ⅵで埋まる。

ピット列１　調査区東半で検出した南北方向のピット列である。北と南は調査区外に続く。ピットは２基分を検出したが、いずれも部分的な検出のため平面形は不明である。規模は直径0.2ｍ以上、深さ約0.1ｍある。

ピット553　調査区西半で検出した。平面形は隅丸方形である。規模は直径0.3～0.4ｍ、深さ約0.1ｍある。

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
江戸時代中期 以前(第3面)	ピット列１、ピット553	
江戸時代中期 ～後期(第2面)	建物１～４、三和土502、瓦列126・421、瓦敷124、 溝128・488・511・427・503・533、瓦組遺構485・512・515、 土坑92・96・97・120、落込497、地業560～562	
江戸時代後期 ～末期(第1面)	建物５～７、漆喰溝246、漆喰桝37、石垣43・88、 通路状遺構559、蹲踞356、踏石357、瓦組遺構40、土坑510、 土壁	建物５～７は慶応４年 (1868)の鳥羽・伏見の 戦いで焼失

（３）第２面（江戸時代中期から後期）の遺構（図版２・35）

整地層Ⅳ上で地業560～562を、整地層Ⅴ上で建物１～４、瓦列126・421、瓦敷124、溝128・427・488・503・511・533、瓦組遺構485・512・515、土坑92・96・97・120、落込497を検出した。整地層Ⅴについては、冒頭で触れたとおりⅤａ・Ⅴｂ・Ⅴｃに細分できる。整地層Ⅴｃは建物周辺にのみ施す。建物の礎石や瓦組遺構は、基本的に整地層Ⅴｃ上から掘形を掘りこみ、礎石や瓦を据え付ける。この整地層Ⅴｃ上に、次は瓦列（溝128を含む）の瓦を立て並べつつ、整地層Ⅴｂを建物周辺にのみ施す。最後に、整地層Ⅴｃ・Ⅴｂによって基壇状に盛り上がった建物周辺、およびその外側の一段落ち込んだ範囲を整地層Ⅴａで化粧し、第２面を形成している。溝は、基本的に整地層Ⅴａを施した後に構築される。

建物１（図版７～９・36・37） 調査区西部で検出した南北棟の礎石建物である。北辺・西辺・東辺に長方形の張出を有する。規模は全体で東西約9.8ｍ（京間[1)]５間）、南北約11.8ｍ（京間６間）ある。張出を除くと東西約5.0ｍ（京間２間半）、南北約8.8ｍ（京間４間半）ある。方位は北に対し約13度西に振る。柱間は約1.0ｍ（京間半間）の等間隔を基本とする。建物外縁の礎石は一辺40～60㎝、厚さ20～40㎝、掘形は直径約0.6ｍ、深さ0.2～0.4ｍである。建物内部の礎石抜取穴は掘形の深さ約0.1ｍである。礎石の石材はホルンフェルス・頁岩ないし粘板岩・砂岩・花崗岩がある。

また建物外縁の石列132・203・216、瓦列205は建物の基礎である。溝133・134はその位置から、葛石の抜取溝と考えられる。

建物２（図版10・11・38・39） 調査区南東部で検出した東西棟の礎石建物である。北辺に長方形の張出を、西辺に建物１と接続する廊を、東辺から南辺にかけてＬ字状の濡縁を有する。濡縁の下部には三和土502を有する。三和土502については後述する。

規模は全体で東西約11.8ｍ（京間６間）、南北約6.8ｍ（京間３間半）ある。張出・廊・濡縁を除くと東西約9.8ｍ（京間５間）、南北約4.9ｍ（京間２間半）ある。方位は北に対し約13度西に振る。柱間は約1.0ｍ（京間半間）の等間隔を基本とする。建物外縁の礎石は一辺40～60㎝、厚さ40～60㎝、掘形は深さ0.4～0.6ｍである。建物内部の礎石抜取穴は掘形の深さ0.1～0.3ｍである。建物外縁の礎石（図版10　断面Ａ－Ａ’、Ｂ－Ｂ’、Ｃ－Ｃ’、Ｄ－Ｄ’）は比較的大きな石材と小ぶりな石材を交互に配置している。これは通し柱と間柱に用いられる礎石の差であるとみられる。礎石の石材はホルンフェルス・頁岩ないし粘板岩・砂岩がある。

濡縁は、規模が東西長約10.8ｍ（京間５間半）、南北長約6.9ｍ（京間３間半）、幅は各々約1.0ｍ（京間半間）である。柱間は東辺が約2.7ｍの等間、南辺が約2.8ｍの等間であり各辺の長さを偶数で等分する。建物２の東辺・南辺通し柱の間には、縁根太掛けないし縁板掛けの礎石とみられる礎石383・546～552を配置する。これに通し柱の礎石の張出部分を共用することで柱間は基本的に約1.0ｍ（３尺３寸）の等間となる。礎石383・546～552には一辺10～15㎝の石材を用いる。建物２と濡縁の柱が礎石を共用することから、建物２と濡縁は同一時期に構築されたとみられる。

建物３（図版12・40） 調査区北東部で検出した礎石建物である。北側は調査区外に続く。規模

は東西約7.8ｍ（京間４間）、南北約4.6ｍ以上（京間２間以上）である。方位は北に対し約13度西に振る。柱間は南北が約1.0ｍ（京間半間）の等間隔となるが、東西は1.0～1.3ｍと等間隔にならない。礎石は一辺15～40㎝、厚さ５～30㎝、掘形は深さ0.1～0.2ｍである。礎石の石材は頁岩ないし粘板岩・砂岩がある。

建物４（図版13・42・43） 調査区北東部で検出した石垣501を基礎とする建物である。石垣は西面北端がクランク状に折れ曲がり、西面北側と南面東側が調査区外に続く。規模は石垣下端で南北8.8ｍ以上、東西2.7ｍ以上である。石垣は南面で最上段まで残存しており、その高さは約1.0ｍで４段積みである。方位は北に対し約13度西に振る。石垣の石材は脆い砂岩である。

三和土502（図版10・11・39） 建物２の東辺から南辺にかけてＬ字状に敷設される。規模は東西長約11.7ｍ（京間６間）、南北長約5.0ｍ（京間２間半）、幅は各々約1.9ｍ（京間１間）である。西辺と北辺は石列428・495を設けて区画する。南側の三和土には直径３～10㎝の赤・黒・白色の小石を散りばめる。小石の石材は赤色と黒色がチャート[2)]、白色が脈石英である。

なお三和土は、縁根太掛けあるいは縁板掛けの柱材および礎石を覆う。柱の根元部分への雨水の流入・滞留を招き、柱を腐朽させやすくする施工であるため、改修時に付け足された可能性が高い。また、濡縁に覆われない範囲に顕著な補修痕跡がある。

瓦列126（図版16・17・36） 建物１北側で検出した東西方向の瓦列である。規模は東西約2.6ｍである。瓦組上端部は遺構面から約１㎝上に突出する。

瓦列421（図版16・17・41） 建物３西側で検出した南北方向の瓦列である。規模は南北約3.4ｍである。瓦組上端部は遺構面から約１㎝上に突出する。この瓦列を境にして建物３の位置する東側床面が、西側の地盤よりも高い。このことから、瓦列421には建物３の区画と土留めの機能があるとみられる。

瓦敷124（図版７・９・37） 建物１南西側で検出した南北方向の雨落ちである。規模は東西約0.5ｍ、南北約3.0ｍである。北側は上層遺構により失われ、南側は調査区外へ続く。方位は北に対し約13度西に振る。構築方法は断続的な南北方向の溝状の掘形に土留めとなる瓦を立て並べ、その東側に瓦片を敷く。敷き詰めた部分の標高は西から東へかけて緩やかに高くなり、建物１西辺礎石と同じ高さに近づく。

溝128（図版16・17・36） 建物１の北側で検出した雨落ちである。建物１北辺に沿ってクランク状に曲がる。規模は東西約8.2ｍ、南北約2.6ｍである。瓦組上端部は遺構面から約１㎝上に突出する。

溝488（図版14・45） 調査区東半で検出した素掘りの雨落ちである。建物２・３の間を東西方向に延びる。規模は東西長約7.3ｍ、幅約0.3ｍ、深さ約0.1ｍである。

溝511（図版14・44・45） 調査区東半で検出した瓦組の排水溝である。建物２・４の間を延びる。規模は東西長約6.0ｍ、南北長約4.5ｍ、幅約0.4ｍ、深さ約0.2ｍである。側面および底面の瓦は橙色と青黒色のものを交互に配置するという意匠を凝らす。南側南肩は上面に丸瓦を伏せ並べた土堤を構築し、補強・改修する。

図８　調査区南壁　地業560断面（北から）

溝427（図版14・45）　建物４西側で検出した東西方向の石製Ｕ字溝である。規模は長さ約0.9ｍ、幅約0.3ｍである。溝511と連接する。建物４に伴う排水溝である。

溝503（図版14・44・45）　建物３東側で検出した南北方向の石製Ｕ字溝である。規模は長さ約0.7ｍ、幅約0.3ｍ、深さ約0.1ｍである。溝511と連接する。建物３に伴う排水溝である。

溝533（図版10・11）　三和土502の南西隅で検出した。規模は長さ約0.4ｍ、幅約0.2ｍ、深さ約0.1ｍである。構築方法は北肩に瓦を立て並べて護岸とし、底面には瓦片や石材を敷き詰める。雨水を落込497に排出するための溝とみられる。

瓦組遺構485（図版15）　建物４の西側で検出した。平面形は方形を呈する。規模は一辺約0.3ｍである。瓦組上端部は遺構面から約0.1ｍ上に突出する。

瓦組遺構512（図版15）　建物４の西側で検出した。平面形は方形を呈する。規模は一辺約0.3ｍである。瓦組上端部は遺構面から約0.1ｍ上に突出する。桟瓦を用いていることや、掘形が整地層Ｖａを掘り込んでいることから、改修時に付け足されたと考えられる。

瓦組遺構515（図版15・45）　建物３の東側で検出した。平面形は方形を呈する。規模は一辺約0.3ｍである。瓦組上端部は遺構面から約0.1ｍ上に突出する。

土坑92（図版15）　建物１の北西側で検出した円形の土坑である。規模は南北約0.5ｍ、東西約0.4ｍ、深さ約0.2ｍである。遺物は桟瓦を主体とし、ごくわずかながら塀瓦が出土した。

土坑96（図版15・45）　建物１の南西側で検出した円形の土坑である。規模は直径約1.0ｍ、深さ約0.4ｍである。遺物は桟瓦を主体としているが、他の土坑と比較して塀瓦が多い。また被熱した瓦片がわずかに確認できる。このほか磁器・土師器が出土した。

土坑97（図版15）　建物１の南西側で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約0.9ｍ、東西約1.2ｍ、深さ約0.3ｍである。遺物は桟瓦を主体とし、谷瓦や丸瓦が出土した。また被熱した瓦片を確認した。

土坑120（図版15）　建物１の南西側で検出した隅丸方形の土坑である。規模は南北約0.9ｍ、東西約1.0ｍ、深さ約0.3ｍである。遺物は桟瓦を主体として丸瓦を含む。このほか陶器・磁器が出土した。

落込497（図版10・11）　三和土502の東側から南側にかけて検出した。調査区端での検出であるため具体的な規模は不明であるが、幅1.4ｍ以上、深さ約0.1ｍである。

地業560（図版４・８・９、図８・14）　建物１の西側から南側にかけて検出した（図版４－41～49層、図版８－17層、図版９－19～22層）。建物周囲を溝状に巡るとみられる。規模は建物西側で長さ3.4ｍ以上、幅約2.2ｍ、深さ約0.8ｍ、建物南側で長さ7.2ｍ以上、幅1.9ｍ以上、深さ約0.3ｍである。

地業561（図版11、図14） 建物２の南側から東側にかけて検出した（図版４－50層、図版11－22～25層）。建物周囲を溝状に巡るとみられる。規模は東西長10.8ｍ以上、南北長3.1ｍ以上、幅約2.2ｍ、深さ0.2～0.3ｍである。

地業562（図版16・17、図14） 建物１・３の間で検出した。平面不定形を呈する。断割による部分的な検出のため具体的な規模は不明である。東西長2.2～4.6ｍ程度、南北長6.4ｍ以上、深さ0.1～0.5ｍである。なお上面で土留めとみられる溝520と集石542・543、仮設建物に伴うとみられる礎石221～223・225・229・541を検出した。これら遺構は整地層Ｖａで埋まる。

（４）第１面（江戸時代後期から末期）の遺構（図版３・46）

整地層Ⅱ上で建物５～７、漆喰溝246、漆喰桝37、石垣43・88、通路状遺構559、蹲踞356、踏石357、瓦組遺構40、土坑510、土壁を検出した。このうち建物５～７、漆喰溝246、漆喰桝37、蹲踞356、踏石357、瓦組遺構40は整地層Ⅲ上で構築する。このほか、整地層Ⅲの中位や上面で複数の土坑を確認できた（図版４－25～32層、図版６－14～25層）。いずれも瓦片などを含んでおり、整地中の塵芥処理に伴う土坑群と考えられる。平面的な調査は行わなかった。

なお、整地層Ⅲは建物５～７の周辺のみ施される。建物５の基礎である石垣43・88の外側、および通路状遺構559の外側に整地層Ⅲはなく、厚さ約0.2ｍの整地を施して第１面とする。そのため、この範囲は建物５～７の周辺よりも遺構面が約0.6ｍ低く、前庭部を形成している。

建物５（図版18～20・47～49） 調査区西部で検出した南北棟の礎石建物である。石垣43・88の形態から、西部に長方形の張出を有するとみられる。礎石の大半が近現代攪乱によって失われる。全体の規模は東西約8.9ｍ（京間４間半）、南北約9.8ｍ以上（京間５間以上）である。方位は北に対し約13度西に振る。柱間は約1.0ｍ（京間半間）の等間隔を基本とする。礎石は一辺30～40㎝、厚さ10㎝、掘形は深さ約0.1ｍである。

礎石の下部構造に蠟燭基礎を確認した。掘形の規模は一辺0.4～0.7ｍ、深さ0.6～0.7ｍである。蠟燭石は竜山石の角柱状石材である[3)]。

建物６（図版21～23・50・51） 調査区南東部で検出した東西棟の礎石建物である。北辺・西辺に長方形の張出を、東辺から南辺にかけてＬ字状の濡縁を有する。規模は全体で東西約11.9ｍ（京間６間）、南北約7.9ｍ（京間４間）である。張出・濡縁を除くと東西約10.8ｍ（京間５間半）、南北約5.9ｍ（京間３間）である。方位は北に対し約13度西に振る。柱間は約1.0ｍ（京間半間）の等間隔を基本とする。建物外縁の礎石は一辺10～30ｃｍ、厚さ約10㎝、掘形は深さ約0.1ｍである。礎石の石材は頁岩ないし粘板岩・砂岩・花崗岩である。なお、礎石と建物周辺の遺構面は被熱する。礎石には４寸角の柱材の痕跡がみられる。

礎石の下部構造に蠟燭基礎を確認した。掘形の規模は一辺0.4～0.8ｍ、深さ0.7～0.9ｍである。蠟燭石は竜山石の角柱状石材である。なお建物６の礎石346に用いられた蠟燭石と、建物５の礎石59に用いられた蠟燭石が接合した。このことから建物５・６は同時期に建てられたと判断できる。

濡縁は、礎石が残存せず下部構造とみられるＬ字状の布掘り基礎328のみを検出した。規模は東

西長約12.4ｍ、南北長約5.6ｍ、幅0.4～0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。底面に0.2～1.0ｍの不均等な間隔で石材を配置する。濡縁の礎石が全く残存しないのに対し、建物６の礎石が比較的良好に残存することから、濡縁は改修を受けて取り払われた可能性がある。

建物７（図版24・52） 調査区北東部で検出した礎石建物である。建物北部は調査区外に続く。規模は東西約7.9ｍ（京間４間）、南北3.0ｍ以上（京間１間半以上）である。方位は北に対し約13度西に振る。柱間は約1.0ｍ（京間半間）の等間隔となる。礎石は一辺約30㎝、厚さ約15～20㎝、掘形は深さ0.1～0.4ｍで、埋土に直径４～15㎝の円礫を充填する。なお、礎石の抜取穴は火災後の整地土で埋まり、建物周辺の遺構面は被熱する。

漆喰溝246（図版24・52） 建物７内部で検出したＬ字状の溝である。規模は南北約2.9ｍ以上、東西約5.0ｍ以上で、深さ約0.1ｍである。内部は火災後の整地土で埋まる。

漆喰桝37（図版24） 建物７西側で検出した方形の土坑である。規模は一辺約0.2ｍ、高さ約0.3ｍである。内部には泥が溜まる。漆喰溝246の西端と連接することから、会所と考えられる。

石垣43・88（図版18・19・47・48） 調査区西半で検出した。西面する南北方向の石垣で、北側と南側は調査区外に続く。調査区中央部で西へ約4.0ｍ張り出しており、平面形は凸字状を呈する。全体の規模は東西約4.5ｍ、南北13.2ｍ以上である。方位は北に対し約13度西に振る。下２段分が遺存し、高さは約0.65ｍである。本来は３段であったと考えられる。目地には漆喰が施される。石材は京都山科産と推定される石英斑岩・ホルンフェルス・頁岩ないし粘板岩・砂岩のほか、建物４で用いられる脆い砂岩がある。建物４の石材を転用している可能性がある。

通路状遺構559（図版５・18・19） 調査区西半で検出した。平面形は東西に主軸をもつ長方形である。西側は調査区外に続き、東側は石垣43・88に取り付く。規模は東西2.4ｍ以上、南北約3.6ｍ、高さ0.6～0.7ｍである。方位は北に対し約13度西に振る。北側面で石垣、両側面で石垣の石材抜取溝を検出した。本来は両側面に石垣が構築されていたと考えられる。通路上面の標高は第１面よりも約0.3ｍ低い。

蹲踞356（図版25・53） 建物６北東部で検出した。中央に位置する円形の土坑、土坑北側に位置する上面が平坦な石材、土坑西側に位置する円形のピットから構成される。全体の規模は東西約0.8ｍ、南北約1.0ｍある。中央の土坑は、規模が直径約0.7ｍ、深さ約0.1ｍである。底面に漆喰を施す（図版25－４層）。内部中央には集石がある。集石は、直径約10㎝の円礫を角錐状に積み上げる。規模は一辺約0.3ｍ、高さ約0.1ｍである。土坑北側の石材は、規模が東西約0.5ｍ、南北約0.3ｍである。石材掘形の規模は東西約0.5ｍ、南北約0.4ｍある（図版25－５層）。土坑西側のピットは、規模が直径約0.3ｍ、深さ約0.1ｍである（図版25－３層）。この構造物は蹲踞と考えられる。蹲踞とした場合、土坑は水門、集石は水門石、石材は役石、ピットは役石の抜取穴とみることができる。なお、集石は上面が被熱しており、土坑は炭と火災後の整地土（図版25－１・２層）で埋まる。

踏石357（図版25・53） 建物７の東側で検出した楕円形の扁平な石材である。規模は東西約1.0ｍ、南北約1.4ｍ、厚さ0.1～0.3ｍである。石材上面の標高は西側が東側に比べて約0.2ｍ低い。

瓦組遺構40（図版25・53） 建物５の西側で検出した。平面形は方形を呈する。規模は一辺約0.3ｍである。

土坑510（図版25・53） 建物６の東側で検出した火災後の塵芥を処理した土坑である。東側が調査区外に続くため平面形は不明である。規模は東西2.4ｍ以上、南北5.5ｍ以上、深さ0.6ｍ以上である。土坑内はほぼ遺物のみで充填される。遺物は多量の焼けた壁土・瓦・陶磁器のほか、溶解したガラス製品、石製品、金属製品、炭化物などがある。瓦は確認できたすべての破片が被熱する。土坑は整地層Ⅰに覆われる。

土壁（図版54、図９） 調査区北東隅と土坑510で出土した。

調査区北東隅の土壁は、残存する規模が東西約0.8ｍ、南北約0.6ｍである。整地層Ⅰより出土したことから、火災後の塵芥処理あるいは整地の過程で投棄されたものとみられる。両面が遺存しており表面は被熱により赤変する。壁内部は、貫・間渡し竹・木舞竹・縄が遺存しておりいずれも炭化した状態である。貫は幅８㎝前後、木舞竹は幅1.5㎝前後、間渡し竹は幅2.0㎝前後、縄は太さ0.5㎝前後である。

土坑510の壁土は、両面が遺存する破片である。その厚さは4.2㎝（約１寸４分）である。このうち荒壁が1.6㎝（約５分）、斑直しが0.6㎝（約２分）、中塗りが0.6㎝（約２分）、上塗りが0.1㎝（約３厘）である。

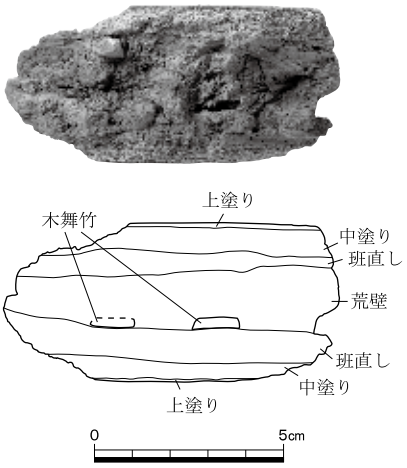


図９　土壁断面図（１：２）

註

１） ここでいう京間は、柱間を基準とする尺度のことを指しており、京間１間は六尺五寸（約1.97ｍ）となる。以下、建物の柱間を京間で表現する場合にはこの尺度を用いている。

２） 橋本清一氏より、丹波帯の放散虫・海綿の骨針からなる石材であるとのご教示を得た。

３） 竜山石は兵庫県高砂市で産出する石材である。江戸時代の史料には長さ３～８尺、幅・厚さ５～７寸の竜山石が、建築土木用の石材として広く使用されていたとあり、実際に淀城下町では、現在でも建物の葛石、京街道・町屋の縁石としてこの種の石材が用いられている。

「龍山石」『日本山海名産図会』 名著刊行会　1969年（初版1799年）

「（前略）色は五採を混ず、切て形を成す事、皆方條にのみあり、溝渠、河川の涯岸、或界壁の敷石、敷居の土居庭砌等の用に抵て、、他の器物に製することなし、大さは三四尺より七八尺にも、及び方五寸に六寸の物を、五六といひ、五寸に七寸を、五七といひて、尚大なる品數あり（後略）」

「第四節　竜山石の生産と流通」『高砂市史』第五巻　史料編　近世　高砂市史編さん専門委員会　2005年

「第三節　竜山石の生産と流通」『高砂市史』第二巻　通史編　近世　高砂市史編さん専門委員会　2010年

4．遺　　物

整理コンテナにして92箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・金属製品・石製品・ガラス製品がある（表３）。全体の半数以上を瓦類が占める。時代別では江戸時代の遺物が大半を占め、鎌倉時代の遺物がわずかに含まれていた。各遺物の詳細については付表１～５にまとめた。

なお、鎌倉時代の遺物として土師器皿片や瓦器椀片があるが、嵩上げ時の砂層に混入していたものであるため、当地に砂が搬入された段階に持ち込まれた可能性が高い。いずれも細片のため図化はできなかった。

（１）土器類（図版26～28・55、付表１）

土坑510出土土器（図版26・27・55）　施釉陶器・焼締陶器・磁器が出土した。遺物の大半が二次的に被熱しており、火ぶくれを起こしたものや、表面の釉薬が溶けて泥や砂粒が付着したものがある。器形の比率は、最小個体数[1)]で全155点のうち、植木鉢が29点（18.7％）と多い傾向にある。なお椀・皿類は84点（54.2％）、鉢・香炉・火入は16点（10.3％）、その他26点（16.8％）である。

１～26は磁器である。１・２は椀蓋、３～９は椀である。１は３、２は４とそれぞれ同文を体部内外面に施しており、セットとみられる。５は底部外面に「さ」と漆書する。ほかに同形・同文の椀が５個体出土しており、いずれも器表面に銅・鉛が溶着する。火災時に銅・鉛製品が溶解して器表面に付着したと考えられることから、これら椀はセットで保管されていたと推定する。６は高台に砂粒が付着し、底部外面は露胎する。10～12は型打ちの小皿である。10は角皿である。11は底部内面に「壽」字を配する。12は底部内面に呉須で色付けをし、口縁に錆釉を施す。同一の形式のものが少なくとも20点出土した。13は皿である。底部内面中央に五弁花を手描きする。14は合子の身である。底部外面に「八太□／□」と漆書する。白玉粉による焼き継ぎがなされる。15～18は段重である。15は蓋、16・17は２段目より上、18は最下段である。15と16、17と18はそれぞれ

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
江戸時代中期～後期	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、土製品、金属製品、石製品		土師器６点、施釉陶器７点、焼締陶器１点、磁器１点、瓦11点、土製品９点、金属製品３点、石製品３点		
江戸時代後期～末期	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、土製品、金属製品、石製品、ガラス製品		土師器１点、施釉陶器13点、焼締陶器１点、磁器32点、瓦28点、土製品４点、金属製品６点、石製品１点、ガラス製品１点		
その他	施釉陶器、瓦、金属製品		施釉陶器２点、瓦６点、金属製品１点		
合　計		103箱	137点（11箱）	０箱	92箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より11箱多くなっている。

外面に同文を施しており、セットとみられる。19は徳利である。頸部は断面方形、体部は断面八角形である。20は香炉である。平面形は六角形で、脚台は透かし彫りを施す。21～25は植木鉢である。21は高台の三方を木瓜形に切り取り、脚をつくる。22は無釉の磁器である。平面形は六角形である。体部外面の図像は型成形で、体部内面には型成形に伴う指頭圧痕や刷毛目がみられる。23・24は平底の三方に脚が取り付き、体部外面から体部内面上半にかけて施釉する。25は体部外面には養老の滝の孝子伝説を図案化して描く。26は鉢である。平面形は方形で、平底の四隅に脚が取り付く。体部下半に直径約1.2㎝の穴を穿つ。

27～36は施釉陶器である。27は鍋蓋で、口縁端部を釉剝ぎする。28・29は火入で、体部外面から内面にかけて施釉する。29は底部外面右側中央付近に「帯山」の刻印銘がある。30は徳利で、いわゆる三角徳利である。31は茶壷である。体部外面下半に白色釉を施したあと、体部外面上半に褐色釉を施す。体部外面上半には３方向に耳を貼り付ける。32～34は植木鉢である。32・33は体部外面下半から体部内面上半にかけて施釉する。33は同一の形式のものが少なくとも12点出土した。34は底部糸切りで、体部外面上半から内面にかけて施釉する。もと鉢であったものを底部に穿孔して植木鉢に転用する。35は土瓶である。口縁部外面から体部外面下半にかけて施釉する。36は鉢である。体部外面・底部外面・体部内面上半に鉄泥を刷毛塗りしたあと、体部外面に施釉する。底部２ヶ所に直径約0.3㎝の穿孔があり、一方を棒状の鉄製品で塞ぐ。

37は焼締陶器である。大型の植木鉢で、体部外面に円形浮文や突帯を施す。平底の三方には脚が取り付く。

これらは19世紀初頭頃に属する土器群と考えられる。

整地層Ⅴ出土土器（図版28・55）　土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器が出土した。器種の比率は、磁器よりも土師器・施釉陶器の出土が多い。

38～43は土師器である。38は皿Sbで体部外面中央に墨書がある。39は皿Ｓである。40は椀で体部外面にケズリを施し、底部内面に布目圧痕が残る。内外面には施釉する。41は涼炉である。高台の三方を半円形に切り取り脚をつくる。体部外面には丁寧なヘラミガキを施す。42は焜炉である。平底の三方に円柱状の脚が取り付く。体部外面には横方向のヘラミガキを施す。43は焙烙である。底部外面に煤が、底部内面にコゲが付着する。

44は小型の磁器椀である。内外面に菊の文様を施す。

45～51は施釉陶器である。45～47、49～51は椀である。45は体部外面に青色と緑色の顔料で笹の文様を施す。50はいわゆる小杉椀である。51は体部外面に刷毛目を１条施す。47は体部外面に稲葉家の家紋「折敷に三」を描く。48は蓋である。

52は焼締陶器の擂鉢である。体部外面に「□右衛門」と墨書する。

整地層Ⅲ出土土器（図版28）　土師器・施釉陶器・磁器が出土した。器種の比率は、土師器・施釉陶器よりも磁器の出土が多い。

53は土師器である。皿Ｓで、口縁部に煤が付着する。

54～56は施釉陶器である。54は椀でいわゆる小杉椀である。55は火入で体部外面から口縁部内

面にかけて施釉する。56は鍋蓋である。

57～62は磁器である。57は紅皿で体部外面に紅が付着する。58～60は椀である。61は段重の蓋である。天井部外面に帯状のツマミを貼り付ける。62は皿である。口縁部は輪花となっており底部外面には角福文を施す。高台付近に砂粒が付着する。

その他遺構出土土器（図版28） 63は施釉陶器椀である。底部外面に「いよ」と墨書する。第１面清掃時出土。64は施釉陶器滑車である。第１面検出時出土。

（２）瓦類（図版29～32・56、付表２）

土坑510出土瓦（図版29・30・56） 軒丸瓦・滴水桟瓦・軒桟瓦・道具瓦が出土した。確認できたものはほぼ桟瓦であった。

瓦１は軒丸瓦である。右下珠文に笵傷がある。瓦２～４は滴水桟瓦である。瓦３・４は同文で、瓦３の唐草文には複数の笵傷がある。瓦５～13は軒桟瓦である。瓦５は立浪文で、瓦７～11・13・14は橘状の中心飾りをもつ。瓦７は中心飾り左側に笵傷がある。瓦12は「○に十」の中心飾りをもつ。瓦14は袖角瓦で、袖垂れの先端に切り込みがある。橘状の中心飾りをもつ。瓦15～22は道具瓦である。瓦15・16は袖瓦、瓦17～19は谷瓦である。瓦20～22は飾り瓦の一部と見られる。

その他遺構出土瓦（図版31・32・56） 軒平瓦・軒桟瓦・菊丸瓦・道具瓦が出土した。

瓦23～27は軒桟瓦の丸瓦部である。いずれも巴文で、瓦26・27は外区に珠文がめぐる。瓦23・24は同文か。瓦28～30は菊丸瓦である。瓦28は周縁をもたない。瓦31～34は軒平瓦である。いずれも葉形の中心飾りをもつ。瓦35～41は軒桟瓦である。瓦35～40は橘状の中心飾り、瓦41は「○に十」の中心飾りをもつ。瓦42～45は道具瓦である。瓦42は鳥衾、瓦43は鬼瓦の裾部分、瓦44は塀瓦、瓦45は鰹面戸である。

（３）土製品（図版33、付表３）

土１～３は箱庭道具、土４～13は土人形である。土４・７・８・13は手づくね成形、土３・５・６・10～12は型成形である。土１・４・６・７は整地層Ⅲ、それ以外は整地層Ⅴより出土。

（４）その他の遺物（図版33・34、図10、付表４・５）

金属製品・石製品・ガラス製品がある。

金属製品 鉛玉・釘隠し・火箸・引手・小刀柄・釘・煙管・銭貨がある。

金１は鉛玉である。散弾銃の玉と考えられる。金２は釘隠しである。橘の実を意匠としたもので、表面に毛彫を施す。金３は火箸である。上端意匠の上部に１条、上端意匠と本体との境界に毛彫で２条の沈線を巡らす。下端は途中で欠損する。金４は引手金具である。形状は蕨手で、端部は球形をなす。金５は小刀柄である。金属板を一枚張とし、刀背側で蠟付けする。金６は平折釘である。金７は煙管の雁首である。側面に銀蝋が残存し、内部には羅宇が一部遺存する。金８は煙管の吸口である。表面を鑢地とする。内部には羅宇が一部遺存する。金９は紹聖元寶である。いわゆる

北宋銭で、書体は篆書、1094年初鋳である。金10は寛永通寶である。背面に「文」字を配するいわゆる亀戸銭で、1668年初鋳である。

石製品　碁石・ミニチュア硯・炉壇がある。

石１・２は碁石である。石１は黒色、石２は白色である。石３はミニチュア硯である。硯頭は欠損する。両側面と硯尻には外堤が取り付く。外側面には加工時の鋸痕が残る。石４は炉壇である。形状は箱形で、水平にのびる口縁をもつ。法量は、口縁外法45.8㎝（約１尺５寸）、口縁内法40.2㎝（約９寸８分）、口縁上面幅8.1㎝（約２寸６分）、口縁高4.9㎝（約１寸６分）、口縁部上面から底部内面までの深さ33.3㎝（約１寸１分）、全高38.7㎝（約１寸３分）、側面と底面の厚さは5.4㎝（約１寸８分）である。調整は、口縁の上面・外側面・外側裏面および内面上半部には丁寧な研磨を行うが、それ以外の部分は鑿の加工痕を明瞭に残す。全体的に被熱しており、口縁上面の四方と底部外面には煤痕が残る。ともに各辺に平行して線状に煤痕が残り、煤痕は炉壇内側に向かってグラデーションを持って薄くなる。口縁上面の煤痕については、両側の口縁に残る煤痕間の幅が42.1㎝（約１尺４寸）である。なお『茶式湖月抄』（1851年）によれば、炉壇口縁上面に乗せる炉縁という木枠の外法は１尺４寸と定められおり[2)]、今回出土した炉壇の口縁上部に残る煤痕の幅と一致する。煤痕は炉縁が火災により炭化した痕跡であるとみられる。また、炉縁内側の炉壇口縁上面にあたる部分には土塗りをして土壇と呼ばれるものを形成するが、この土壇内法は９寸６分と定められている[3)]。これは炉壇の口縁内法に基づく数値であるが、今回出土した炉縁の口縁内法９寸８分とほぼ一致する。

図10　炉壇上面の煤痕

ガラス製品　ガ１は方形板状のソーダ石灰ガラスである。遺存状態が悪いため図・写真の掲載はできないが、資料の重要性から文章でのみ報告する。被熱により少なくとも４個体が溶着し変形する。最上部の１個体は縦幅5.3㎝前後、横幅6.3㎝前後、厚さ0.2～0.3㎝である。残りの個体は平面規模が不明、厚さは0.2～0.3㎝である。土坑510出土。

註

１）　点数は、口縁部計測法で算出した（宇野1992）。ただし、口縁も高台も残存しない器種については、明らかに別個体と判定できる体部片のみを１点として計数対象とした。
宇野隆夫「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　1992年　pp.215-232

２）『茶式湖月抄』巻１　尚書堂　1884年
「利休炉縁大さ一尺四寸（後略）」

３）『茶式湖月抄』巻５　尚書堂　1884年
「囲炉裏（前略）箱の口より五分下にて巾二寸二分つ、四方に土をぬり出す、炉中九寸六分になるなり」

5．まとめ

淀城の東曲輪北半で行った本調査では、２面２時期の調査を行った。その結果、江戸時代中期から末期にかけての武家屋敷を構成する遺構群を検出した。武家屋敷は、敷地の嵩上げや建て替えを経て、最後は火災で焼失したことが明らかとなった。

以下ではその調査成果について、（１）遺構の変遷、（２）建物の検討、（３）屋敷地の復元の３項目に分けて述べる。

（１）遺構の変遷

第Ⅰ期（18世紀半ば以前）

第３面の遺構群が該当する（図11上段）。南北方向の段差、ピット列１などを検出した。段差は東側の標高が約0.2ｍ低く（11.2ｍ前後）、段差下端には、ほぼ主軸方位を揃えたピット列１が位置する。これらの時期は、埋土（整地層Ⅵ）から遺物の出土が無かったため不明である。しかし、遺構面の標高（11.2～11.4ｍ）と、築城直後の淀城内および城下町の平均的な標高（11.0ｍ前後）[1)]がほぼ同じであることから、17世紀前半頃と想定している。また、同時期に描かれた『城州淀之城図』（1630年代製作）を調査区に重ねると、段差とピット列１の付近で、これらとほぼ主軸方向を揃える敷地境界線が認められる（図11上段）。段差とピット列１は、17世紀前半頃の敷地境界に関連する遺構と想定している[2)]。

なお、調査終了後に第３面（図版１－12層）下の土質の確認を目的として、ボーリングステッキによる簡易的な調査を行った。その結果、標高10.7ｍ以下で砂層を確認した。砂層は、第２面の造成に伴う整地層Ⅵと土質が似ていることから、第３面の造成に際しても、砂による整地が行われた可能性がある。

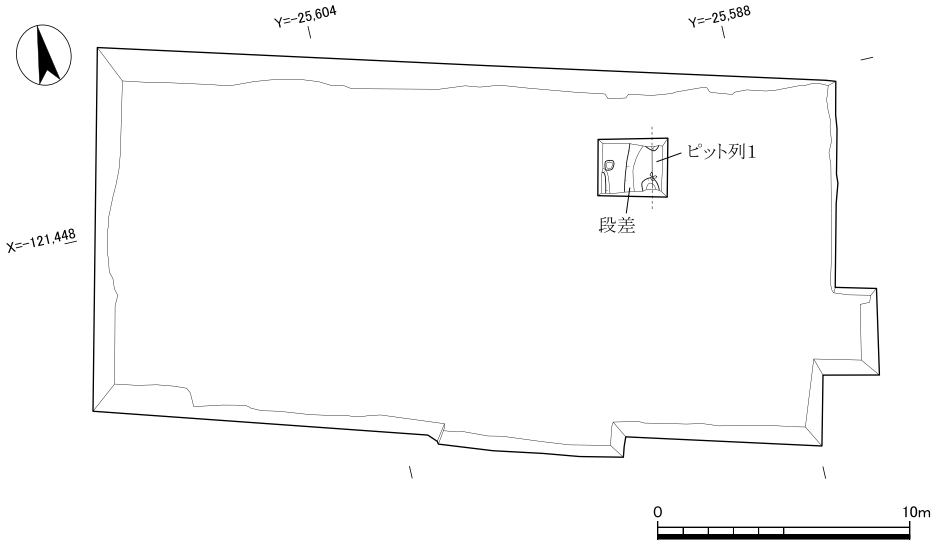
第Ⅱ期（18世紀半ば～後半）

第２面の遺構群が該当する（図11中段）。建物１～４（石垣501）と三和土502、溝128・427・488・503・511・533、瓦組遺構485・512・515、瓦列421、地業560～562などを検出した。

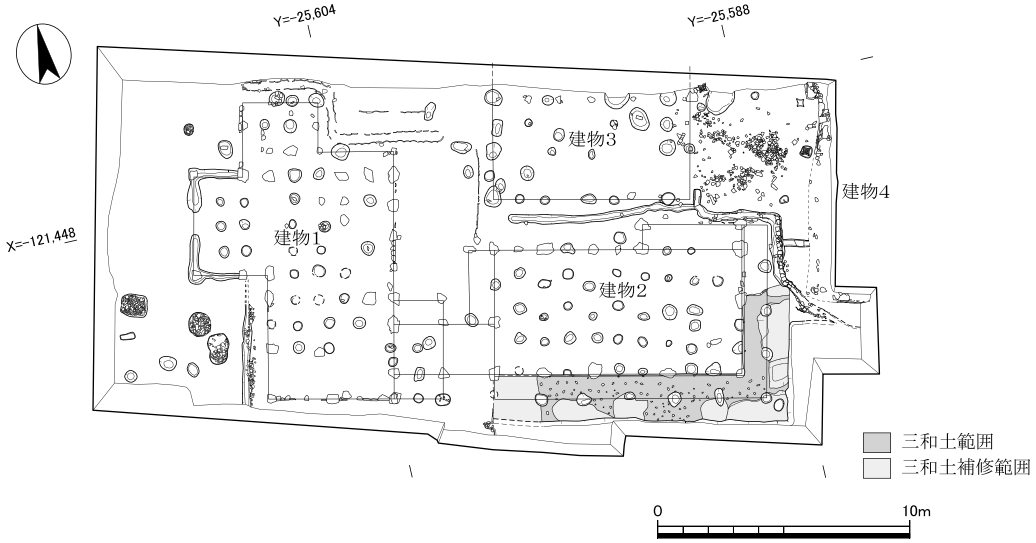
建物は、最大幅約60㎝の礎石を用いる建物１・２と、前者よりも小ぶりな礎石を用いる建物３、石垣501を基礎とする建物４がある。いずれの建物も主軸方位は、北に対し約13度西に振る。南北棟の建物１と東西棟の建物２は廊で連接しており、建物１の西側には張出が、建物２の東側から南側にかけてはＬ字状の濡縁と三和土502が付属する。各建物の周囲には、雨落ち溝と推定する溝128・488・511・533や溝427・503が配置されており、集められた雨水などは、敷地の北西から南東へ下がるわずかな傾斜を利用して調査区南東部の落込497へと排水される仕組みとなっている。建物や廊、雨落ち溝などが計画的に配置された状況が明らかとなった。

また、当該遺構群の構築面（整地層Ⅴ）直下で、地盤の嵩上げに伴う厚さ約0.6ｍの砂層（整地層Ⅵ）を検出した。各建物周縁を溝状にめぐると想定する地業560～562は、砂層上面から掘りこまれており、建物荷重による砂層の傾動防止を目的に構築されたと考えられる（図14）。また建物

第Ⅰ期（第３面）



第Ⅱ期（第２面）



第Ⅲ期（第１面）

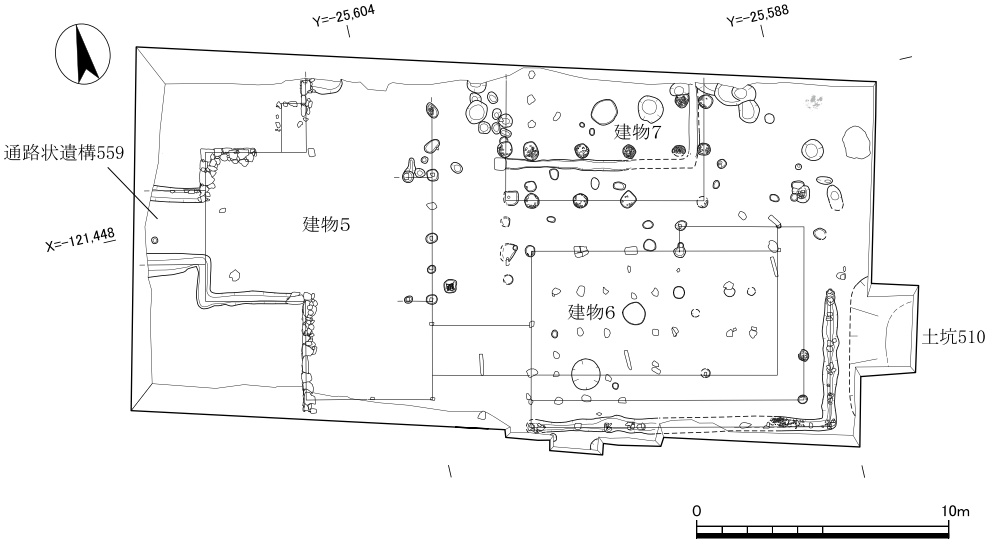


図11　遺構変遷図（１：300）

周縁部で検出した瓦列421は、当該遺構を境に建物側の地盤（整地層Ⅴ）がやや高くなる傾向にあるため、この高まりの土留めとして機能したことが想定できる。このように、砂による造成層の上面に建物を建てるために、建築前に地盤強化を目的とした工夫が施された状況も明らかとなった。

遺構群の成立時期は、整地層Ⅴから京都Ⅻ期古～中段階の土師器皿や、同時期の陶磁器類が出土したことから、18世紀半ばから後半に位置付けることができる。

第２面遺構群の性格は、当該期の調査区周辺の状況を描いた『朝鮮聘礼使淀城下着来図』（1748年）や『山州淀御城府内之図』（1750年）等の絵図から、淀藩家老八太三左衛門の屋敷を構成する諸施設と考えられる（図12下段）。

第Ⅲ期（18世紀後半～19世紀後半）

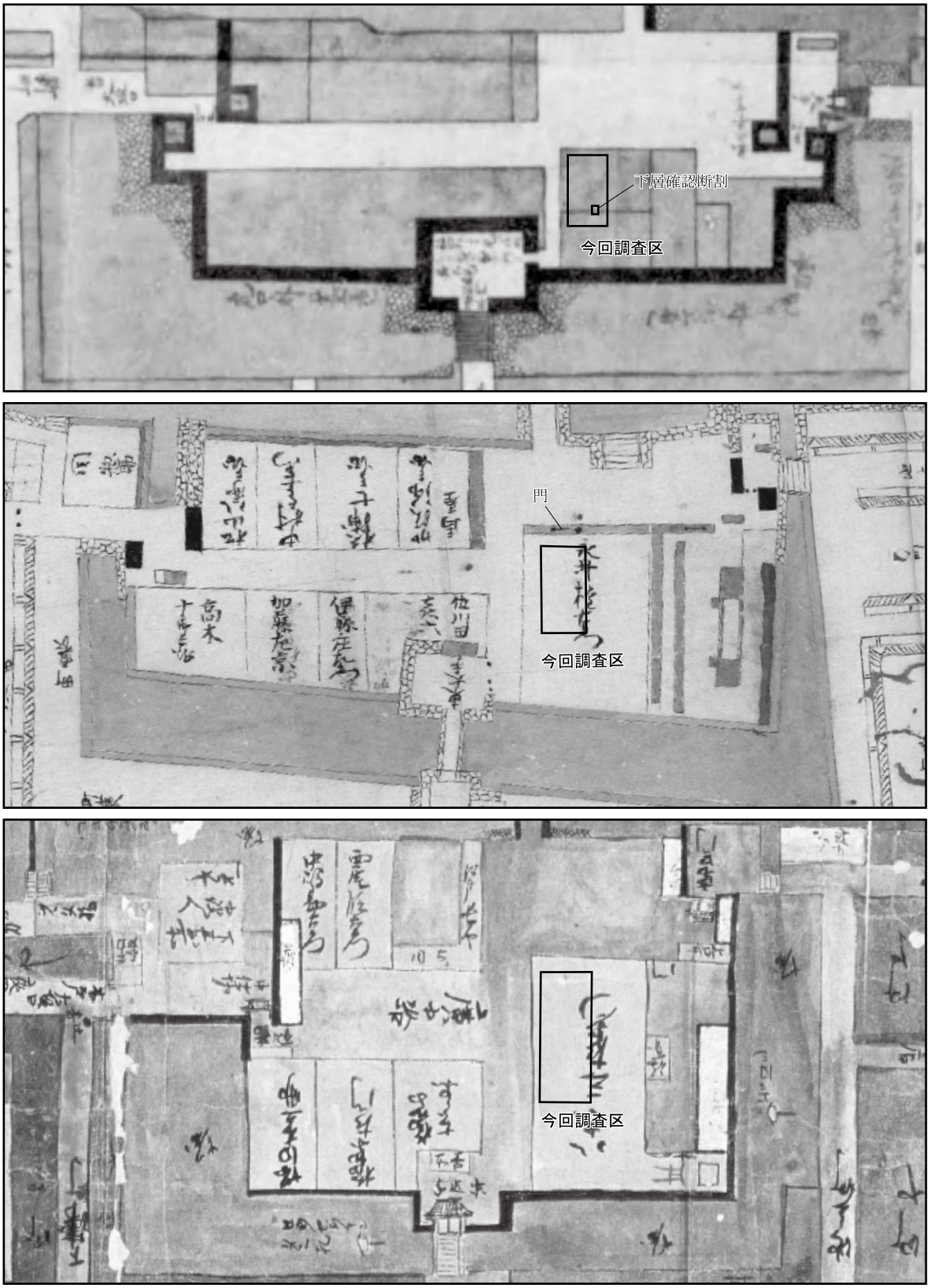
第１面の遺構群が該当する（図11下段）。当該期の地盤は、調査区西側で検出した南北方向の石垣43・88を境にして東側が約0.8ｍ高くなり、雛壇状を呈している。標高は、石垣43・88より西側の前庭で12.4ｍ前後、東側造成面で13.0ｍ前後を測る。建物５～７、漆喰溝246、漆喰桝37、蹲踞356、踏石357、瓦組遺構40、土坑510、土壁を東側造成面上で検出した。通路状遺構559、土坑92・96・97・120は前庭で検出した。

建物は、第２面で確認した建物の規模・構造・配置を基本的に踏襲する。蠟燭基礎を基礎とする建物５・６と、栗石を充填した土坑を基礎構造とする簡素な建物７がある。これらの主軸方位は、北に対し約13度西に振る。南北棟の建物５と東西棟の建物６は廊で連接しており、建物５の西側には通路状遺構559が取り付く張出が、建物６の東側から南側にかけては布掘り基礎328を下部構造とするＬ字状の濡縁が付属する。建物７は建物内部に漆喰桝37を伴う漆喰溝246を備える。調査区北東部の空閑地には、蹲踞356と踏石357がある。蹲踞356は建物６北東隅に位置することから建物６に付属すると考えられ、踏石357は空閑地東側に位置することから当該遺構の東側に想定される建物に伴うと考えられる。空閑地については、蹲踞や踏石の存在から坪庭的な空間利用が想定できる。なお、建物６東側にある土坑510は建物群廃絶後の塵芥処理土坑であり、埋土から「八太」銘磁器が出土した。前庭にある土坑92・96・97・120も塵芥処理土坑であり、埋土からは塀瓦が出土した。

また、東側造成面（整地層Ⅱ）の直下で、地盤の嵩上げに伴う厚さ約0.8ｍの砂層（整地層Ⅲ）を検出した。建物５・６の礎石の基礎となる蠟燭基礎は、砂層上面から掘り込まれており、建物荷重による砂層の傾動防止、および建物の不等沈下防止を目的に構築されたと考えられる。このように砂による造成層の上面に建物を建てるために、建築前に地盤強化を目的とした工夫が施された状況も明らかとなった。

遺構群の成立時期は、整地層Ⅲから京都Ⅻ期中～新段階の土師器皿や、同時期の陶磁器類が出土したことから、18世紀後半から末に位置付けることができる。

遺構群の性格は、当該期の調査区周辺の状況を記した「御家中名順帳」（1867）、「京地変動淀大軍実録」（1908）、また慶応期絵図を基に作成された「淀城下町図」といった史料の記載内容と、土坑510出土の「八太」銘磁器の存在から、淀藩家老八太監物の屋敷を構成する諸施設と考えられる。



［上段］「城州淀之城図」（1631～1637年の間に製作か）（田辺密蔵1934「巻頭に掲けし貳葉の地圖に就て」『濮城温故會第九回報告』所収、国立国会図書館デジタルコレクションより転載）を一部拡大、加筆

［中段］「淀惣絵図」（1649～1669年の間に製作か）（西尾市岩瀬文庫所蔵）を一部拡大、加筆　画像提供：西尾市岩瀬文庫

［下段］「山州淀御城府内之図」（1750年に製作）（京都市歴史資料館寄託、渡辺辰江氏所蔵）を一部拡大、加筆
画像提供：京都市歴史資料館

図12　各時期の淀城絵図（東曲輪部分を拡大加筆、いずれも右が北、縮尺不同）

なお、建物６・７の礎石や周辺の遺構面は赤く変色しており、建物火災に伴う被熱痕と考えられる。また土坑510からは、被熱した陶磁器や瓦類、石製品、ガラス片、土壁片が出土しており、一部の遺物は高温のため溶解していた。被熱した陶磁器類の時期が18世紀後半から19世紀後半頃である。「京地変動淀大軍実録」には、鳥羽・伏見の戦いによって1868年１月５日に八太監物屋敷が焼失したと記載があり、今回確認した被熱痕はこの火災に伴うものと考えられる。

（２）遺構の検討

敷地の造成について

今回の調査の結果、調査地では少なくとも２回にわたって大規模な造成工事が行われたことが判明した。第２面造成時（第Ⅱ期：18世紀半ば～後半）と第１面造成時（第Ⅲ期：18世紀後半～末）である。今回確認した造成工事がどの範囲まで施工されたのかは現在のところ不明である。しかし、調査地北東側の既往調査（図７、表１－調査43）では淀城期の東曲輪内路面が確認されており、この標高と比較すると、第Ⅰ期（17世紀前半頃）は路面約11.2ｍに対して屋敷地内11.2～11.4ｍと想定され、第Ⅱ期（18世紀後半頃）は路面約11.5ｍに対して屋敷地内約12.2ｍ、第Ⅲ期（18世紀後半～19世紀後半頃）は路面約11.6ｍに対して屋敷地内約13.0ｍである。このことから、第Ⅰ期では路面と屋敷地の比高がほぼなかったと想定されるが、第Ⅱ期では屋敷地が約0.7ｍ高くなり、さらに第Ⅲ期では屋敷地が約1.4ｍも高くなることが指摘できる。つまり今回確認した造成は、東曲輪内道路にまでは及んでおらず、調査地である家老屋敷内で行われたものであると考えられる[3)]。

なお、現在の地形においても、調査区を含む京都競馬場淀寮の敷地一帯（図１）が標高13.6～13.8ｍであるのに対して敷地南側道路が12.4ｍ前後、東側道路が12.1ｍ前後であり、周辺よりも1.2～1.7ｍ程度高台となっている。鳥羽・伏見の戦い以降の当地の土地利用に大きな開発はなく、淀町長長田桃蔵宅（1891年以前～1953年頃）、料亭小常盤[4)]（20世紀半ば頃）、日本中央競馬会京都競馬場淀寮（20世紀後半～現在）と推移している。上記の点をふまえると、現在の敷地と道路の比高は江戸時代の地形をおおよそ反映しているものと考えられる。つまり、造成工事は調査区周辺だけではなく、京都競馬場淀寮の敷地一帯（おおよそ淀藩家老屋敷の敷地全体に相当）に及ぶ可能性が高い。

さて、淀城下における敷地造成について記した史料としては、天明５年（1785）の淀藩主稲葉正謎の申請書などがある[5)]。これは、「私在所淀城地水難凌、（中略）依之家中地低之場所難捨置ケ所、（中略）地揚普請取掛申度奉存候之處、」という文面に表れているように、洪水対策として、家臣の屋敷で地盤が低い場所、捨て置きがたい箇所の嵩上げを普請したいという淀藩主から幕府への申請書である[6)]。また「地揚相延置洪水御座候而者、大破之程難斗奉存候。」とあるように、早急に工事に取り掛かりたい様子も窺える。この「家中地低之場所難捨置ケ所」が示す具体的な場所は史料からは明らかでない。しかし、上記申請の時期（1875年）が今回調査地の第Ⅲ期造成（18世紀後半～末頃）にほぼ重なることから、造成工事は上記申請を契機として行われた可能性を指摘できる。この仮説が正しければ、「家中地低之場所難捨置ケ所」のひとつに家老の八太三左衛門屋敷があったことになる。第Ⅲ期造成は洪水対策を目的として行われたことになる。

建物の配置・設計計画について

第１節で述べたとおり、第Ⅱ期の建物１～４は、主軸方位がすべて北に対し約13度西に振る。また礎石は整然と並んでいる。このことから、建物を配置・設計するにあたり何らかの計画があったとみられる。計画の存在は、建物に伴う礎石やピット（礎石の抜取穴）の分布を検討することで推測することができる。

まず、建物配置の検討を行う。図13は、建物１～３の礎石・ピットを交点とした場合に想定される６尺５寸（京間）間隔の基準格子を、第Ⅱ期建物群に重ね合わせた図面である。この図面から、側柱に伴うとみられる礎石はすべて基準格子の交点に配置され、また束石の抜取穴と想定する礎

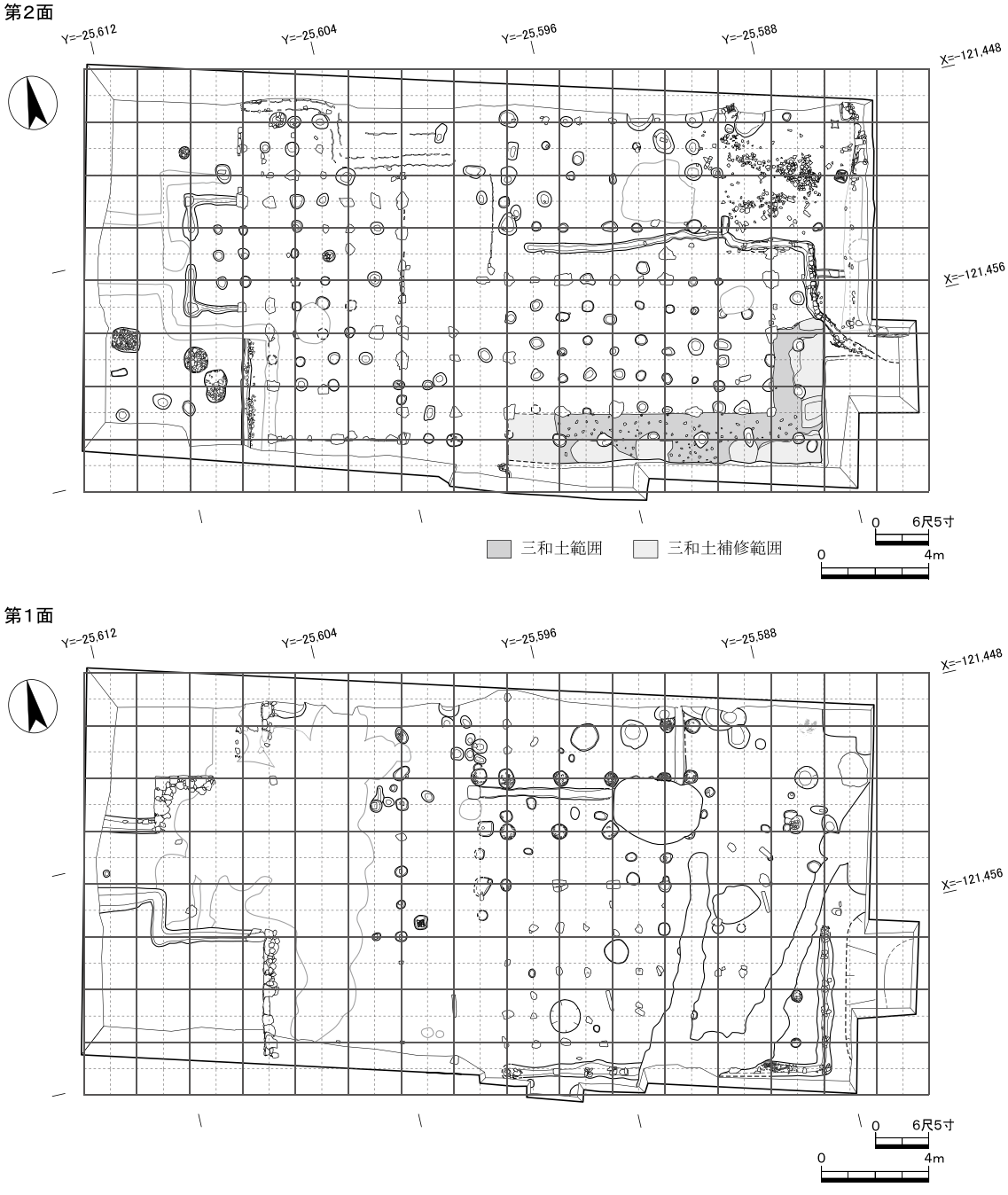


図13　基準格子による建物の配置（１：250）

石やピットも、すべて基準格子の線上に配置されていることがわかる。このほか、建物４に伴う石垣501や、各建物周辺に位置する三和土、瓦敷、瓦列、溝、落込などの遺構も基準格子に規制を受けて配置されている可能性が高い。つまり第Ⅱ期建物群は、６尺５寸（京間）間隔の基準格子を用い、配置がなされたと考えられる。なお第１節で述べたとおり、第Ⅱ期建物群の施工前段階に、溝状と想定される地業560～562を建設予定地の周縁にめぐらせている（図14）。この地業の存在は、建物施工に先行して基準格子が存在したことを裏付けるものであり、建設計画の流れを知るうえで特筆すべき事実である。

次に、建物設計の検討を行う。近世における住宅遺構の柱間寸法と柱配置方法を検討した内藤昌は、畳割（畳の長さを基準に建物の柱を配置する方法）が一般化するのは元和から寛永年間（1615～1644年）頃と考えた[7)]。また宮上茂隆は、柱間真々６尺５寸の八畳間で４寸角の柱を用いた部屋に、畳を敷き始めたことから畳割が成立すると考えた[8)]。６尺５寸を柱間真々に設定したとき、４寸角の柱を用いることで、柱間の内法を６尺３寸に調整することができ、京畳（長さ６尺３寸）を建物内に隙間なく敷くことができるためである。ここで今回調査の第Ⅱ期建物群を観察すると、建築時期は18世紀半ばから後半であるので、当建物群は畳割によって設計され、柱間内法は６尺３寸が基本であることが考えられる。また当建物群の基準格子の一単位である６尺５寸を、柱間の真々とした場合、柱には４寸角を基本的に用いたことが想定される。建物６礎石268などに残る柱痕跡から、第Ⅲ期の建物が４寸角の柱を用いた可能性が高く、第Ⅲ期建物群が第Ⅱ期建物群を踏襲したという点を考慮すれば、第Ⅱ期建物群にも４寸角の柱が用いられたことが考えられる。つまり第Ⅱ期建物群は、６尺５寸間隔の基準格子をもとにして畳割によって設計がなされたと想定できる。

蝋燭基礎について

第Ⅲ期の建物５・６では、側柱の礎石の下に、第２面の礎石を根石とした角柱状石材（蝋燭石）を配置する、蠟燭基礎という工法を採用していた[9)]。

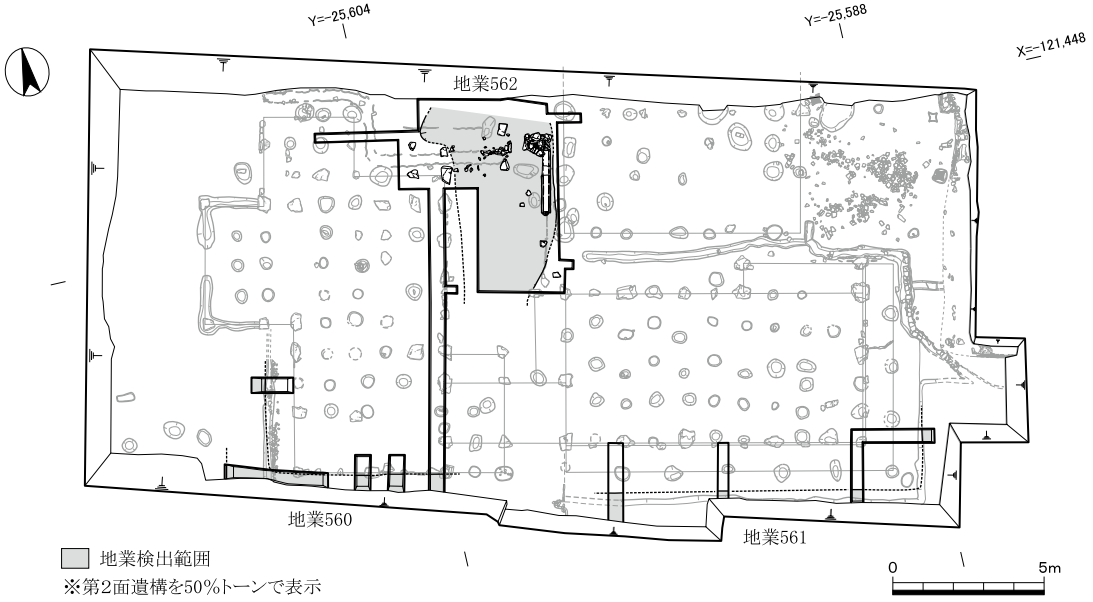


図14　第Ⅱ期建物群の周囲に施される地業（１：250）

蠟燭基礎は、軟弱地盤上に建物を築造する際、軟弱地盤下にある固い地盤と建物土台との間を角柱状石材で支える工法である。今回の場合、整地層Ⅲ（砂層）が軟弱地盤であるので、比較的固い整地層Ⅳ上面（第２面）まで壷掘りを行い、第１面礎石と整地層Ⅳを蠟燭石でつないでいる。

蝋燭基礎は、これまでの発掘調査で茨城県２地点、千葉県１地点、埼玉県１地点、東京都19地点、神奈川県１地点で確認をしている。江戸を中心とした関東地方に分布しており、それ以外の地域での発見は、管見の限り今回の事例が唯一となる[10)]。『守貞謾稿』（1853年刊）にも、「江戸ニモ此京坂ト同」工法があるが、「蝋燭ト云」工法が「専ラ」であるとあり、江戸で使用される工法であると記載されている[11)]。分布状況や文献史料の内容をふまえると、今回淀城で確認した蝋燭基礎は、江戸周辺から局所的にもたらされたと考えられる。

蝋燭基礎が淀城下へもたらされた契機として考えられるのは、稲葉家の山城国淀藩への転封がある。稲葉家は、享保８年（1723）に下総国佐倉藩から淀藩に転封し、以後幕末まで藩主を務めた。その転封の際、それまで支配していた下総・常陸国の５郡58ヶ村が淀藩領となり、下総国には陣屋も設置されている[12)]。蝋燭基礎は、下総・常陸国の淀藩領周辺にも分布しており、藩領や陣屋を介してもたらされたことが想定できる。

なお、第Ⅲ期建物群は、第Ⅱ期建物群と同様に６尺５寸を一単位とする基準格子上に礎石やピットが配置され、基準格子は第Ⅱ期建物群の位置を踏襲する。これは第Ⅲ期建物群の蠟燭基礎が、第Ⅱ期建物群の礎石を根石として転用していることが要因にある。しかし、第Ⅲ期建物群は、第Ⅱ期建物群の規模・構造・配置も踏襲する。この点は根石転用とは異なる要因、つまり第Ⅲ期建物群が、第Ⅱ期建物群の建築部材を利用して建て直されたことが要因にあると想定できる。

（３）屋敷地の復元

今回、第Ⅰ期については部分的な調査であるため復元を行わず、第Ⅱ・Ⅲ期のみ復元を行った[13)]（図15）。なお、前述のとおり第Ⅲ期建物群は、第Ⅱ期建物群の基準格子だけでなく、規模・構造・配置までも踏襲していることから、性格についても踏襲していた可能性が高い。以下ではそれを前提として、建物１・５、建物２・６、建物３・７は同一の性格の建物であるとみなし、各建物の性格を明らかにしたうえで屋敷地の復元を試みる。

さて、近世武家屋敷の典型的な建物配置については、平井聖にる指摘がある[14)]。これをまとめると、①門は表通りに開く、②門に相対して式台・玄関がある、③式台・玄関と門の間には前庭がある、④式台・玄関は書院への入口として設ける、⑤書院は東西棟で２～３部屋が並列する、⑥書院は北側や南側に広縁・濡縁がある、⑦書院の南側に庭がある、⑧表向きの建物群（式台・玄関、書院など）の北側に裏向きの建物群（居間、使用人の労働空間など）を配置するなどの典型がある。これを今回検出した各建物と対応させると、以下のようになる。

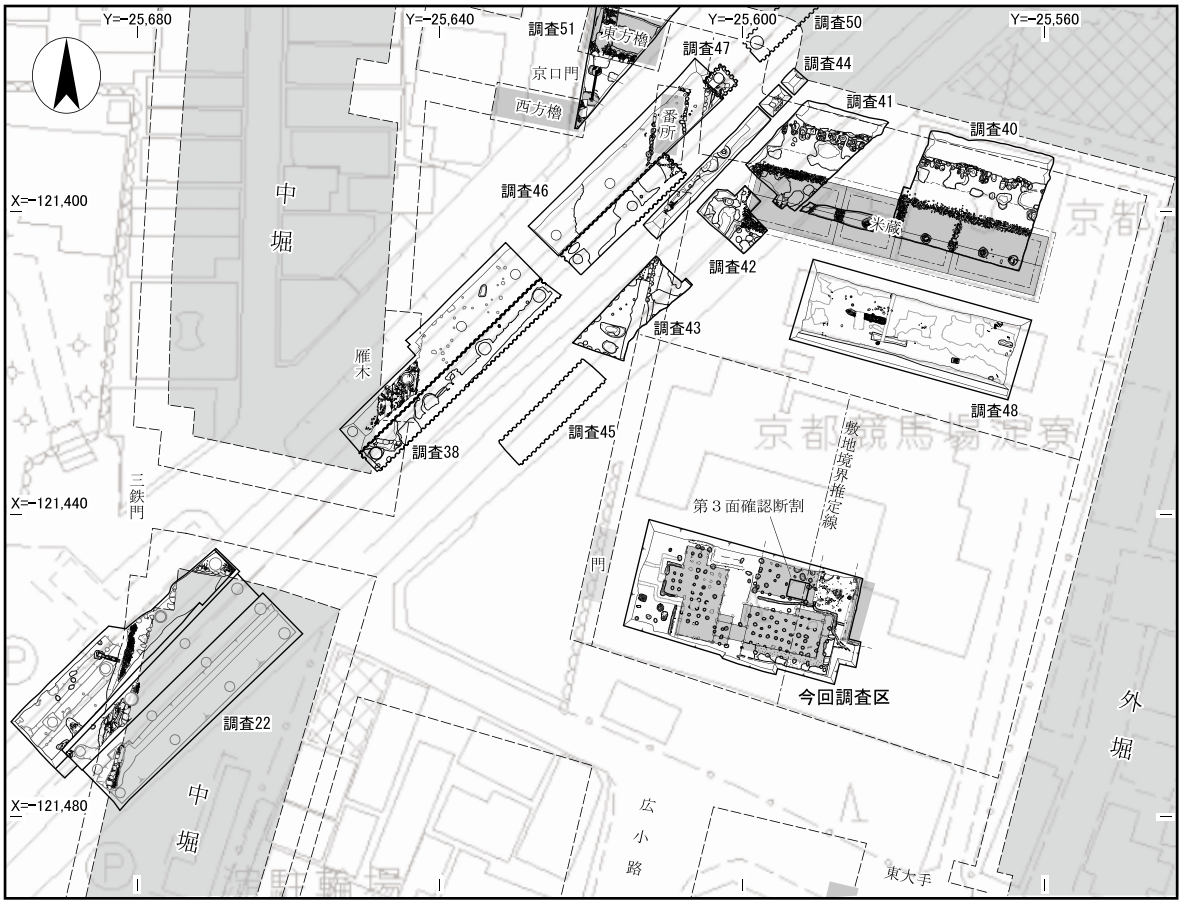
建物１・５：ともに西側に張出がある。張出は、現在の稲葉神社参道方面（当時の本丸入口である三鉄門付近）に向かって張り出す。また建物５の張出には、西側に通路状遺構559が延びる。このことから、張出は本丸への出入りを意識した屋敷の出入口、つまり表向きの式台が考えられる。

これは、「淀古今真佐子」(18世紀半ば) に、三鉄門と家老屋敷の正門が向かい合うとする内容とも矛盾しない[15)]。建物１・５は、式台・玄関を備えた建物と考えられ、建物西側には表通りに開口する正門の存在が想定できる。この要素は、近世武家屋敷の建物配置の典型①・②に対応する。また③より、建物１の西側から敷地西辺の範囲には、前庭が広がっていたことが想定できる。

なお式台の規模は、発掘調査成果より間口２間の式台に復元できる。間口２間の式台は、庄内藩家老屋敷、高遠藩家老屋敷、備中松山藩家老屋敷、足守藩家老屋敷など、上級武士の屋敷地に多く類例がみられる。このことから、式台は家老屋敷に相応しい規模を備えていたと考えられる。

建物２・６：建物１・５と廊で連接する東西棟である。建物南辺・東辺に濡縁をもち、南辺は５間半～６間と幅広い。建物２の濡縁の下には三和土が付属するが、南辺の三和土にのみ小石を散りばめる意匠を施す。当建物は、明らかに南側を意識した造りとなっている。この要素は、近世武家屋敷の建物配置の典型④～⑥に対応することから、建物２・６は書院と考えられる。また⑦より、建物２・６の南側には庭が展開していたことが想定できる。

建物３・７：建物１・２・５・６の北側に位置する建物である。建物構造はこれらと比較して相対的に簡素である。近世武家屋敷の建物配置の典型⑧に対応させれば、裏向きの建物と考えることもできる。なお、建物７には内部に漆喰溝が通っていることから、排水を必要とした施設の可能



・調査番号は図7、表1に対応する。
・破線は「淀惣絵図」(図12中段) より推定される江戸時代の敷地境界線を示す。
・一点鎖線は「城州淀之城図」(図12上段) と調査成果をふまえたうえで推定される、17世紀前半頃の敷地境界線を示す。

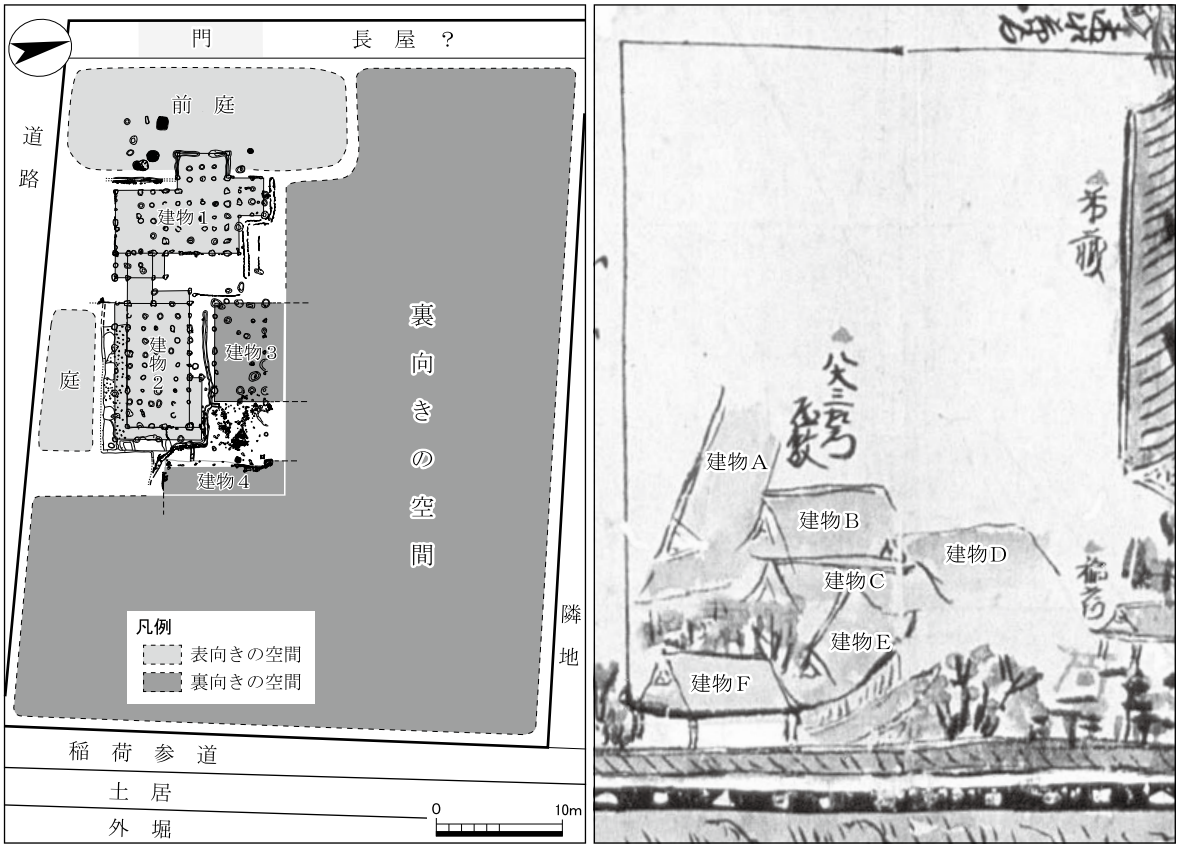
図15　東曲輪復元図と今回調査地（１：1,000）

性がある。書院（建物２・６）の北側という立地を重視すれば、台所のような性格も想定できる。

建物４：今回の調査では礎石を検出していない。そのため、蔵や櫓のほかに土塁基礎などの構造物の基礎である可能性も考えられた。しかし、建物４は敷地の中央部に位置するため土塁基礎とは考えにくい。また、櫓は当時の文献資料や絵図に一切記載がない。建物４は蔵のような施設が想定できる。蔵は裏手に建てられることが多いため、建物４は裏向きの建物である可能性が高い。

屋敷地の復元　今回の調査区は、家老屋敷の南西部４分の１の範囲にほぼ相当する。このうち、南側で式台・玄関を伴う建物（建物１・５）、書院（建物２・６）を検出し、正門、前庭、庭の存在を想定できた。一方、北側から東側にかけて裏向きの建物（建物３・４・７）を検出した。表向きの空間は屋敷南西部を中心に、裏向きの空間は屋敷北西部・北東部・南東部を中心に広がっていると考えられる（図16左）。

なお、朝鮮通信使が淀城下を通過した時の様子を描いた『朝鮮聘礼使淀城下着来図』（1748年製作）に、家老屋敷内に広がる建物の様子が描かれている（図16）。この絵図では、京街道側から見えた屋敷東半分の建物だけが描かれているようで、西半は空白となっている。絵図を見ると、屋敷地南端中央部に東西棟の建物Ａがあり、その周辺に複数の建物が広がる。これを今回の調査成果と対比させると、建物２は建物Ａとその位置や構造が似る。当史料は、今回検出した家老屋敷内の空間復元を行っていくにあたり参考になるとみている。



第Ⅱ期建物群（18世紀半ば～後半頃）の敷地内における位置（1:600）　『朝鮮聘礼使淀城着来図』（1748年に製作）（京都市歴史資料館寄託、渡辺辰江氏所蔵）を一部拡大、加筆　画像提供：京都市歴史資料館

図16　屋敷地空間の復元（左）と関連絵図（右）

註

1） 鈴木久史「X　長岡京跡第583次・淀城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』 京都市文化市民局　2016年

2） 1650年代後半に製作された「淀城大絵図」の段階では、敷地はすでに１筆となっている。

3） 調査43では、東曲輪内道路に西接する敷地（家老屋敷の北側敷地）の一部も検出している。これによると北側敷地内の標高は、第Ⅰ期（17世紀前半頃）が約11.2ｍ、第Ⅱ期（18世紀後半頃）が約11.8ｍ、第Ⅲ期（18世紀後半～19世紀後半頃）が約12.0ｍである。つまり第Ⅰ・Ⅱ期の北側敷地は、家老屋敷と標高がほぼ同じであるため、同様の造成過程が想定できる。ただし第Ⅲ期では、北側敷地よりも家老屋敷が高くなるため、家老屋敷内の地盤だけがさらに造成されたことが想定できる。

4） 淀連合自治会の方々のご教示による。

5） 『諸例集』「滞府中之部」（国立公文書館デジタルアーカイブより）

「一　天明五巳年四月廿七日、御用番水野出羽守様へ御先手長谷川太郎兵衛様を以左之御願書被差出、五月十日御留守居之者御呼出被成、御用人を以御附札并御書付御渡被成候。付艮刻、出羽守様江御直勤被仰、述之井伊掃部頭様　両御丸御老若様方御側様方へ御口上書壱通宛平使者被指出之。

私在所淀城地水難凌、持崩ニ不相成様可仕旨、御割を以去秋越後国領分村替被　仰付難有仕合奉存候。依之家中地低之場所難捨置ケ所、其砌地揚普請仕候。城内地揚者第一之儀、彼是手配仕候付、地揚普請取掛申度奉存候之處、當年御暇年ニ付右地揚取掛候得者、帰城仕住居差支申候。地揚相延置洪水御座候而者、大破之程難斗奉存候。格別之御訳合を以持脈之手當仕度奉存候。不苦儀ニ思召候者當年滞府被　仰付候様、仕度奉存候以上。

四月廿七日　　稲葉丹後守

御書付差上　稲葉丹後守江

稲葉丹後守

居城地揚普請ニ付、願之通當年滞府被　仰付候間、京都火消之儀家来斗差出申合可被相勤候。

五月十三日御滞府中御勤方伺書、御用番松平周防守様江、以御使者被差出左之通。

私儀城地揚普請仕候付、願之通當年滞府被　仰付候。依之滞府中勤方之儀、在府之通相心得可申哉奉伺候以上。

五月十三日　　稲葉丹後守

御附札

在府之通可被相心候　　」

もう１つ関連する史料がある。

『淀領引継文書集』 淀温故会　1991年　p.141（『稲葉家神社文書』「越後国領分村替之事」）

6） 淀藩は安永３年（1774）に大洪水に見舞われており 、このとき城内外の建物が大きな被害を受けている。藩主稲葉正諶は、幕府から修理費として金五千両を貸与されている。こうした洪水などが、天明５年（1785）の申請につながると考える。

7） 内藤昌「遺構に於ける「タタミ割」の発生過程について」『日本建築学会論文報告集』第60号　1958年　pp.609-612

内藤昌「畳割」『世界建築全集』３　日本Ⅲ　近世　平凡社　1959年　pp.77-83

8） 宮上茂隆「畳割について」『大会学術講演梗概集　計画系（47)』日本建築学会　1972年

9） 『建築大辞典　第２版』〈普及版〉 彰国社　1993年 「蝋燭石」「蝋燭地業」項
建築分野では「蠟燭地業」と呼ばれることが多いが、今回検出した遺構は地業を伴わないため、「蠟燭基礎」という用語に統一した。

10） 角柱状石材を蠟燭石に用いた蠟燭基礎（蠟燭地業）の事例は以下のとおり。
茨城県２地点（取手宿、土浦城外丸御殿跡)、千葉県１地点（富津陣屋跡)、埼玉県１地点（北２丁目陣屋跡)、東京都19地点（小石川四丁目東遺跡、湯島四丁目遺跡、本郷台遺跡群、尾張藩上屋敷跡遺跡、市谷本村町遺跡、市谷加賀町一丁目遺跡、市谷加賀町二丁目遺跡、山吹町遺跡、信濃町南遺跡、四谷一丁目遺跡、四谷一丁目南遺跡、四谷二丁目遺跡、納戸町遺跡、日本橋蛎殻町二丁目遺跡、岩本二丁目遺跡、港区白金台町五丁目町屋跡遺跡、上野忍岡遺跡群、昇覚寺、西新井大師総持寺)、神奈川県１地点（藤沢市No.78遺跡)、京都府１地点（本調査)。

11） 朝倉治彦・柏川修一編『守貞漫稿』第一巻　東京堂出版　1992年　p.72
「江戸ニモ此京坂ト同ク、石ヲ突入ルモアレドモ、専ラ杉材ヲ栽ニ埋ム也。先地四五尺ヲ掘リ、此以下ニ長二間許ノ杉材ヲ突キ入ル也。其上ニ切石ヲ並ベ、其上ニ切石ヲ立ルヲ、蝋燭ト云。其立石ノ上ニ、又切石ヲ横ヘ、土蔵ヲ建ル也。」

12） 常松隆嗣　シリーズ藩物語『淀藩』 株式会社現代書館　2018年　pp.117-118

13） この復元図は、既往の発掘調査で検出した各遺構を手がかりに、『淀惣絵図』(17世紀半ば、正確な測量をもとに描かれていると考えられる）や、「御城内外坪数櫓堀門并侍屋鋪小屋数改帳」・「淀御城内外塀・石垣并本丸二丸廻堀深サ間数改帳」(1724年、城内の測量に関する史料）を基礎史料として用い、復元を試みた図である。なお発掘調査については、すべて淀城期の遺構面を図示しているが、時期は一定していない。各施設の規模が江戸時代を通して基本的に変化しないという前提のもとに復元を行っている。

14） 平井聖『日本の近世住宅』鹿島出版会　1978年

15） 『日本庶民生活史料集成』第８巻　見聞記　三一書房　1969年　p.817
「(前略）扨是より北の方一丁半斗の間半分餘家老屋敷、門三鐵冠木門と向合也。(後略)」『淀古今真佐子』「太田橋より京口邊迄の趣」項

付表１　土器観察表

No.	器種	器形	法量(cm)			色調	胎土	出土地点・遺構	備考(推定産地ほか)
			口径	底径	器高				
1	磁器	椀蓋	9.0	3.8	3.1	N8/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付
2	磁器	椀蓋	9.2	3.3	2.7	釉:5GY8/1 胎:N9/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付 天井部内面「大化元成」
3	磁器	椀	10.4	4.3	5.8	N8/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付
4	磁器	椀	10.3	3.8	5.4	釉:5GY8/1 胎:N9/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付 底部内面「大化元成」
5	磁器	椀	10.5	6.2	6.7	釉:7.5GY8/1 胎:N9/0		土坑510	肥前、染付 底部外面漆書「さ」
6	磁器	椀	7.9	3.3	4.4	N8/0		土坑510	赤・緑彩
7	磁器	椀	8.0	3.2	4.5	釉:N8/0 胎:N8/0		土坑510	白磁
8	磁器	椀	8.9	4.2	6.1	N8/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付
9	磁器	椀	12.4	4.8	6.8	釉:7.5GY8/1 胎:N9/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付
10	磁器	皿	8.1	4.0	2.5	N8/0		土坑510	瀬戸・美濃、青白磁 内面底部にザクロ、四方に松竹梅
11	磁器	皿	8.9	5.2	1.7	釉:N9/0 胎:N9/0		土坑510	瀬戸・美濃、白磁 寿文皿
12	磁器	皿	9.8	5.4	2.5	N9/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付
13	磁器	皿	12.9	6.7	3.2	N7/0		土坑510	染付
14	磁器	合子	9.9	4.9	5.9	N8/0		土坑510	染付 底部外面漆書「八太□/□」
15	磁器	段重蓋	10.8	9.9	2.7	N8/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付
16	磁器	段重	9.9		4.3			土坑510	瀬戸・美濃、染付
17	磁器	段重	16.8	10.4	5.1	N8/0		土坑510	染付 歳寒三友図
18	磁器	段重	17.0	11.2	6.6	N8/0		土坑510	染付 歳寒三友図
19	磁器	徳利	2.3		(10.2)	N8/0		土坑510	染付
20	磁器	香炉		6.8	(2.6)	N8/0		土坑510	肥前、染付
21	磁器	植木鉢	5.8	3.3	4.9	N8/0		土坑510	瀬戸・美濃、染付
22	磁器	植木鉢	13.1		(8.2)	N8/0		土坑510	肥前、無釉 雲文鳥文等を陽刻
23	磁器	植木鉢	9.2	4.8	6.3	釉:10GY7/1 胎:N9/0		土坑510	肥前、青磁
24	磁器	植木鉢	15.2	12.7	15.8	N8/0		土坑510	肥前、青磁染付
25	磁器	植木鉢	16.6	8.0	15.0	N8/0		土坑510	肥前、染付、金赤緑彩
26	磁器	鉢			(8.8)	釉:7.5GY8/1 胎:N9/0		土坑510	肥前、染付 焼成後に側面下部を穿孔
27	施釉陶器	鍋蓋	11.1	2.2	2.7	釉:7.5Y7/2 胎:10YR8/2	φ0.5㎜以下の長石・石英を含む。	土坑510	京・信楽
28	施釉陶器	火入	6.2	6.6	7.3	釉:5Y7/2 胎:2.5YR7/1		土坑510	粟田口
29	施釉陶器	火入	9.9	10.8	9.0	釉:5Y7/2 胎:5YR5/1	φ1.0㎜以下の黒色粒子を含む。	土坑510	粟田口 底部外面刻印「帯山」
30	施釉陶器	壷		10.2	(21.0)	釉:5Y6/3 胎:10YR7/1		土坑510	信楽か丹波
31	施釉陶器	茶釜			(10.2)	釉:7.5Y3/2 胎:10YR8/1	φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む。	土坑510	
32	施釉陶器	植木鉢	10.4	5.2	7.1	釉:2.5Y4/3 胎:10YR7/4	φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む。	土坑510	
33	施釉陶器	植木鉢	12.2	7.8	9.7	釉:7.5Y2/1 胎:10YR7/3	φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む。	土坑510	信楽か

No.	器種	器形	法量(cm)			色調	胎土	出土地点・遺構	備考(推定産地ほか)
			口径	底径	器高				
34	施釉陶器	植木鉢	12.0	7.3	8.5	釉:7.5Y3/3 胎:10YR6/3	φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む。	土坑510	底部糸切り、ロクロは時計回り 焼成後に底部穿孔
35	施釉陶器	土瓶	8.7	8.2	12.7	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/2	φ0.5㎜以下の長石・石英を含む。	土坑510	
36	施釉陶器	鉢		14.0	(16.0)		φ1.0㎜以下の長石を含む。	土坑510	瀬戸・美濃
37	焼締陶器	植木鉢	41.1	18.6	29.7	7.5YR4/3	φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む。	土坑510	丹波
38	土師器	皿	8.0		1.8	7.5Y8/4	φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む。	整地層Ⅴ	底部外面墨書
39	土師器	皿	10.2		2.1	10YR8/2	φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む。	整地層Ⅴ	
40	土師器	椀		4.0	(3.0)	胎:N8/0	φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む。	整地層Ⅴ	内外面に施釉
41	土師器	涼炉		12.2	(4.7)	2.5YR6/8	φ1.0㎜以下の長石・チャート・雲母を含む	整地層Ⅴ	底部外面墨書
42	土師器	焜炉	12.8	11.2	12.0	5YR6/6	φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層Ⅴ	
43	土師器	焙烙	30.0		(6.5)	7.5YR7/4	φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・金雲母を含む	整地層Ⅴ	
44	磁器	椀						整地層Ⅴ	染付
45	施釉陶器	椀	9.3	3.3	5.7	釉:10YR7/3 胎:5Y7/1	φ0.5㎜以下の長石を含む	整地層Ⅴ	京・信楽
46	施釉陶器	椀	9.2	3.7	5.5	釉:N8/0、5Y4/2 胎:2.5Y7/3	φ0.5㎜以下のチャート・黒色粒子を含む	整地層Ⅴ	
47	施釉陶器	椀			(4.7)	釉:10GB6/1 胎:2.5Y7/3	φ0.5㎜以下の黒色粒子を含む	整地層Ⅴ	京焼 体部外面に稲葉家家紋「折敷に三」
48	施釉陶器	蓋	8.1		1.9	釉:N8/0、2.5Y4/1 胎:2.5Y8/2	φ0.5㎜以下の長石・黒色粒子を含む	整地層Ⅴ	
49	施釉陶器	椀	9.6	5.7	6.5	釉:5Y3/2 胎:2.5Y8/2	φ0.5㎜以下のチャート・黒色粒子を含む	整地層Ⅴ	
50	施釉陶器	椀	10.3	3.6	6.3	釉:2.5Y4/1 胎:2.5Y8/2	φ0.5㎜以下の長石を含む	整地層Ⅴ	小杉椀
51	施釉陶器	椀	11.6	4.2	6.1	釉:5Y7/2 胎:5Y8/1	φ0.3㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む	整地層Ⅴ	信楽石塔窯か
52	焼締陶器	擂鉢			(10.2)	2.5Y5/4	φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層Ⅴ	体部外面墨書「□右衛門」
53	土師器	皿	9.4		1.7	7.5YR7/3	φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層Ⅲ	
54	施釉陶器	椀		4.6	(5.3)	釉:2.5Y6/4 胎:2.5Y8/2	φ0.5㎜以下の長石黒色粒子を含む	整地層Ⅲ	小杉椀
55	施釉陶器	火入	10.2	7.0	8.9	釉:10Y5/2、7.5YR 3/3　胎:10YR7/3	φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層Ⅲ	
56	施釉陶器	鍋蓋	18.1	5.0	3.9	釉:2.5GY6/1 胎:7.5YR6/6	φ0.5㎜以下の長石を含む	整地層Ⅲ	
57	磁器	紅皿	4.6	1.3	1.4	釉:N8/0 胎:N8/0		整地層Ⅲ	白磁
58	磁器	椀	5.3	1.5	2.8	N8/0		整地層Ⅲ	染付
59	磁器	椀	7.0	2.1	3.8	N8/0		整地層Ⅲ	染付
60	磁器	椀	9.2	3.3	4.7	N8/0		整地層Ⅲ	染付
61	磁器	段重蓋	13.1		5.1	N8/0		整地層Ⅲ	染付
62	磁器	皿	14.2	8.9	3.6	N8/0		整地層Ⅲ	染付、輪花
63	施釉陶器	椀		4.0	(1.7)	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/2	φ0.5㎜以下の長石・チャートを含む	調査区西半 第1面清掃	底部外面墨書「いよ」
64	施釉陶器	滑車	27.0	26.8	5.9	釉:10Y4/2、5Y8/2 胎:2.5Y8/2	φ4.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む	調査区西半 第1面検出	瀬戸・美濃 織部

※ 法量の（ ）は残存値

付表２　瓦観察表

No.	種類	文様	成形･調整技法	出土地点	備考
瓦1	軒丸瓦	連珠右巻き巴文。 尾は離れる。珠文13。	丸瓦部凹面布目圧痕。瓦当部接合後、接合部・丸瓦部凸面～側面ナデ。瓦当部裏面外縁・側面ナデ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	瓦当径14.4cm
瓦2	滴水桟瓦	(軒丸部)蛇の目文。 (軒平部)外行唐草文。中央部にしずく形の珠点、下部に蕚。唐草は巻き込まない。	凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。瓦当面端部に軒丸部貼付後、丸瓦部側面・裏面ナデ。桟瓦部凹凸面ミガキ後、軒丸部の周縁・文様区外縁、軒平部の外縁を面取り。軒平瓦部右外縁を角切り。桟瓦部凹凸面・瓦当内外面にキラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦3	滴水桟瓦	(軒丸部)蛇の目文。 (軒平部)外行唐草文。中心飾りは内向き蕨手様で、下部は周縁に接する。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	瓦4と同文 他に同笵が1点
瓦4	滴水桟瓦	(軒丸部)蛇の目文。 (軒平部)唐草文。	桟瓦部凸面をケズリ後、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。瓦当面端部にカキヤブリによる軒丸部貼付後、丸瓦部側面・裏面ナデ。桟瓦部凹面ミガキ後、軒丸部の周縁・文様区外縁、軒平部の上端・文様区上端を面取り。桟瓦部凹凸面にキラコが顕著に付着。	土坑510	軒丸部径7.2cm 瓦3と同文
瓦5	軒桟瓦	立浪文。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦6	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは内側に巻き込む二葉、2転する唐草は独立し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をケズリ後、凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキか。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦7	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部に蕚。2転する唐草は独立し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部に顎部貼付か、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦8	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部に蕚。2転する唐草は独立。	桟瓦部凸面未調整で、凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹面・文様区にキラコがわずかに付着。	土坑510	
瓦9	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘か。下部に蕚。2転する唐草は独立し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	瓦11と同文
瓦10	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部の蕚から唐草が2転する。外側はY字状。	桟瓦部凸面を未調整、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦11	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部に蕚。2転する唐草は独立し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	瓦9と同文
瓦12	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは○に十字、下部に蕚。2転する唐草は独立し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦13	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部に蕚。2転する唐草で、外側はY字状。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面にキラコがわずかに付着。	土坑510	
瓦14	袖角瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部に蕚。2転する唐草は接し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をケズリ後、凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端をナデ。凸面側縁にカキヤブリによる切隅部貼付後、接合部ナデ。桟瓦部凹面、袖部外側面・下端、瓦当面にミガキ、文様区上下端に面取り。袖垂れの先端に切り込み。桟瓦部凸面・文様区にキラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦15	袖瓦		桟瓦部凸面未調整、袖部貼付後、接合部ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面にキラコがわずかに付着。	土坑510	
瓦16	袖瓦		同上	土坑510	
瓦17	谷瓦		桟瓦部凸面未調整、袖部貼付後、接合部ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面・袖部外面にキラコ付着。	土坑510	
瓦18	谷瓦		同上	土坑510	
瓦19	谷瓦		同上	土坑510	
瓦20	飾り瓦		裏面ナデ。表面・側面ミガキ、キラコが顕著に付着。	土坑510	
瓦21	飾り瓦		側面・裏面ナデ。表面刺突痕、キラコ付着。	土坑510	
瓦22	飾り瓦		同上	土坑510	

No.	種類	文様	成形・調整技法	出土地点	備考
瓦23	軒桟瓦	(軒丸部)右巻巴文。尾は接しない。	桟瓦部凸面・軒平部裏面～下端ナデ。文様区にキラコが顕著に付着。	整地層Ⅴ	
瓦24	軒桟瓦	(軒丸部)右巻三巴文。尾は接する。	瓦当接合後、接合部ナデ。瓦当裏面外縁・側面ナデ。文様区にキラコが顕著に付着。	整地層Ⅴ	軒丸部径10.0cm
瓦25	軒桟瓦	(軒丸部)右巻巴文。尾は接しない。	カキヤブリにより軒丸部接合。軒丸部裏面外縁・側面ナデ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑120	軒丸部径8.6cm
瓦26	軒桟瓦	(軒丸部)連珠右巻三巴文。尾は接しない。珠文12。 (軒平部)外行唐草文。	軒丸部裏面外縁・側面ナデ、軒平部裏面・下端ナデ。	南壁断割時	軒丸部径9.5cm
瓦27	軒桟瓦	(軒丸部)連珠右巻三巴文。尾は接しない。	丸瓦広端部に瓦当貼付後、接合部ナデ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑97	瓦当径15.0cm
瓦28	菊丸瓦	凹弁八弁二重菊文。	瓦当裏面外縁・側面ナデ。	攪乱	瓦当径10.4cm
瓦29	菊丸瓦	凸弁十二弁一重菊文。	瓦当裏面外縁・側面ナデ。文様区にキラコが付着。	重機掘削時	瓦当径8.5cm
瓦30	菊丸瓦	凹弁八弁一重菊文。中房は粒状。	瓦当接合後、接合部ナデ。瓦当裏面外縁・側面ナデ。文様区にキラコが顕著に付着。	土坑33 (第1面)	瓦当径7.6cm
瓦31	軒平瓦	外行唐草文。中心飾りは三葉。2転する唐草は独立。	凸面広端部にカキヤブリのより顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが付着。	整地層Ⅲ	
瓦32	軒平瓦	外行唐草文。中心飾りは三葉。2転する唐草は独立。	凸面広端部にカキヤブリにより顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキか。桟瓦部凹凸面にキラコが顕著に付着。	整地層Ⅲ	
瓦33	軒平瓦	外行唐草文。中心飾りは三葉。1転する唐草以外は緩やかに外行する。	凸面広端部にカキヤブリにより顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが顕著に付着。	整地層Ⅲ	
瓦34	軒平瓦	外行唐草文。中心飾りは三葉で、上部にY字状子葉、下部に萼。2転する唐草は独立。	桟瓦部凹面未調整、凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが付着。	整地層Ⅴ	
瓦35	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは3点の橘が珠点に接して配される。唐草は2転し、外側はY字状。	凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが付着。	整地層Ⅴ	瓦36と同文
瓦36	軒桟瓦	同上	同上	土坑96	瓦35と同文
瓦37	軒桟瓦	外行唐草文。2転する唐草は独立。	瓦当全面ナデ。文様区にキラコが顕著に付着。	整地層Ⅴ	
瓦38	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘。唐草は独立するが、外側の唐草は文様が非対称。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキか。桟瓦部凸面にキラコが顕著に付着。	土坑96	
瓦39	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部に萼。2転する唐草は独立し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキか。桟瓦部凹面にキラコが顕著に付着。	土坑306 (第1面)	
瓦40	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは橘で、下部に萼。2転する唐草は独立し、外側はY字状。	桟瓦部凸面をナデ後、凸面広端部にカキヤブリによる顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。瓦当表面～裏面もミガキか。瓦当表面～裏面にキラコが顕著に付着。	壁整形時	
瓦41	軒桟瓦	外行唐草文。中心飾りは○に十字、下部に萼。2転する唐草は接する。	凸面広端部に顎部貼付、接合部～顎部下端ナデ。桟瓦部凹面ミガキ。桟瓦部凹凸面・文様区にキラコが顕著に付着。	整地層Ⅴ	
瓦42	鳥衾	(軒丸部)連珠右巻三巴文。尾は接しない。珠文16。	胴部は粘土板巻付により製作、内面に布目圧痕。裏面にカキヤブリを施した軒丸部、内面にカキヤブリを施した基部を胴部に接合。接合部ナデのあと、外面全体ミガキ。軒丸部側面上部に３箇所、基部に２箇所の穿孔。文様区にキラコが付着。	整地層Ⅲ	
瓦43	鬼瓦		外面ナデ、線刻。側面ナデ。内面ナデ・カキメ。	整地層Ⅴ	
瓦44	塀瓦か	文様不明。	内面ナデ、外面ミガキか。袖部外面に線刻。全体にキラコがわずかに付着。	攪乱	
瓦45	鰹面戸		裏面周縁・側面ナデ、外面ミガキ、外面端部面取り。裏面中央カキヤブリ後、環状にした粘土紐をナデにより接合。	攪乱	

付表３　土製品観察表

No.	種類	形態	法量(cm)			出土地点	備考
			縦	横	厚さ		
土1	箱庭道具	建物	(2.6)	2.2	1.9	整地層Ⅲ	
土2	箱庭道具	橋	(3.6)	3.6	1.4	整地層Ⅴ	
土3	箱庭道具	灯籠	5.5	3.4	2.5	整地層Ⅴ	
土4	土人形	馬	(3.3)	1.4	3.5	整地層Ⅲ	
土5	土人形	鳥	2.3	2.1	2.4	整地層Ⅴ	
土6	土人形	狐か	(3.6)	1.7	2.3	整地層Ⅲ	
土7	土人形	犬か	5.0	4.7	4.7	整地層Ⅲ	
土8	土人形	獅子舞か	(3.1)	3.0	2.6	整地層Ⅴ	
土9	土人形	芥子面	3.6	3.6	1.6	整地層Ⅴ	
土10	土人形	天神	4.0	3.5	1.7	整地層Ⅴ	
土11	土人形	僧	(4.2)	2.6	1.8	整地層Ⅴ	
土12	土人形	戎	3.9	2.4	1.6	整地層Ⅴ	
土13	土人形	力士か	(6.8)	6.7	3.6	整地層Ⅴ	

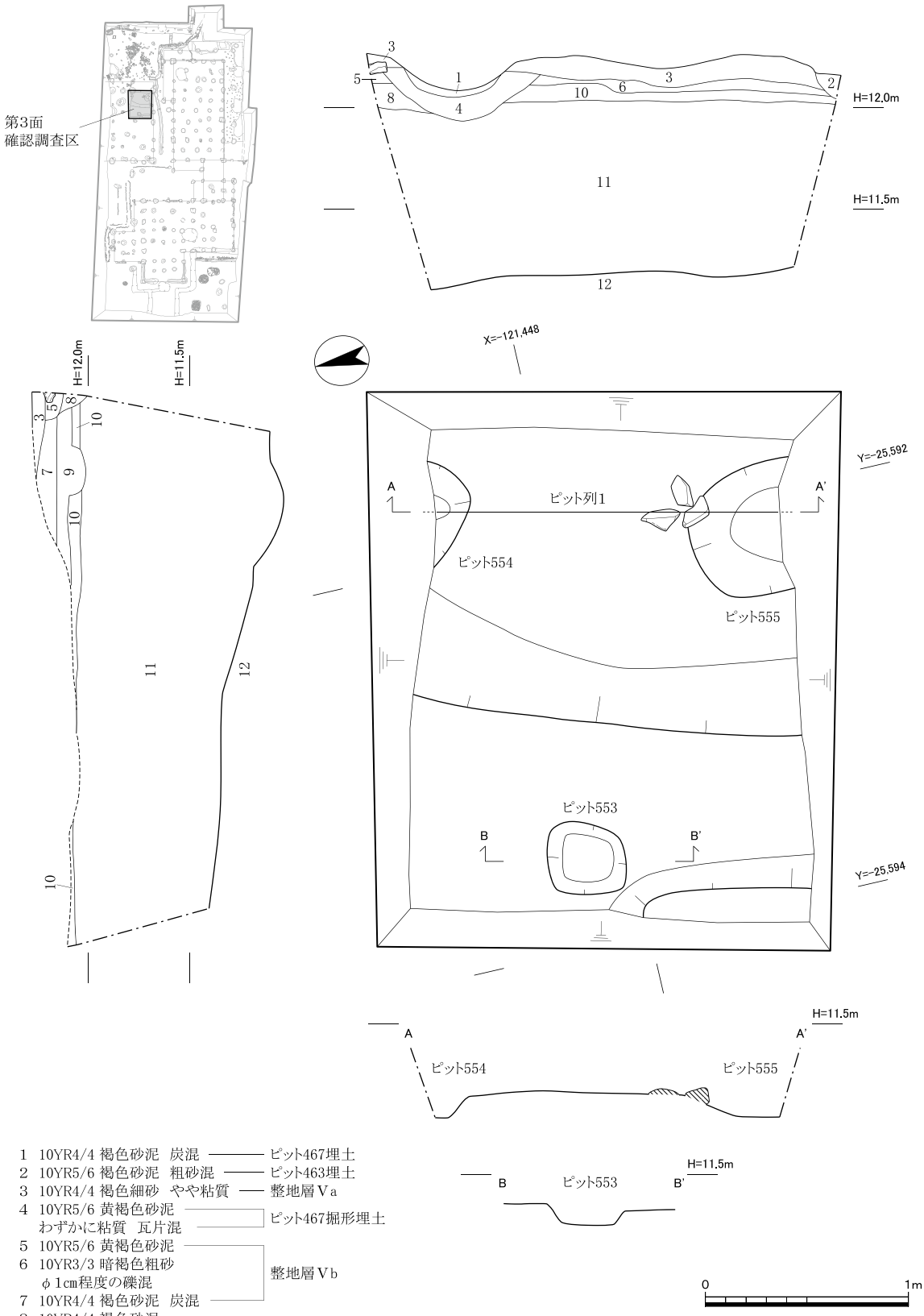
付表４　金属製品観察表

No.	種類	法量(cm)	出土地点	備考
金1	鉛玉	直径0.7cm	整地層Ⅴ	
金2	釘隠し	縦幅1.6cm、横幅2.0cm、厚さ0.2cm	整地層Ⅲ	
金3	火箸	残存長8.1cm、直径0.3cm	整地層Ⅳ	
金4	引手金具	縦幅3.2cm、横幅7.5cm、厚さ0.4～0.6cm	整地層Ⅴ	
金5	小刀柄	長さ9.8cm、高さ1.6cm、厚さ0.6cm	整地層Ⅳ	
金6	平折釘	長さ8.1cm、幅5.6cm、厚さ0.7～1.5cm	整地層Ⅳ	
金7	煙管	長さ5.7cm、高さ1.8cm、幅1.7cm	整地層Ⅳ	
金8	煙管	長さ6.9cm、幅0.8cm	整地層Ⅳ	
金9	銭貨	直径2.4cm、厚さ0.1cm、重さ1.9g	壁面整形	紹聖元寶
金10	銭貨	直径2.6cm、厚さ0.1cm、重さ2.2g	整地層Ⅴ	寛永通寶

付表５　石製品観察表

No.	種類	法量(cm)	出土地点	備考
石1	碁石	直径2.2cm、厚さ0.5cm	整地層Ⅴ	
石2	碁石	直径2.2cm、厚さ0.5cm	整地層Ⅴ	
石3	ミニチュア硯	残存長5.4cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm	整地層Ⅴ	
石4	炉壇	口縁外法45.8cm、全高38.7cm、側面及び底面の厚さ5.4cm	土坑510	

図　　版

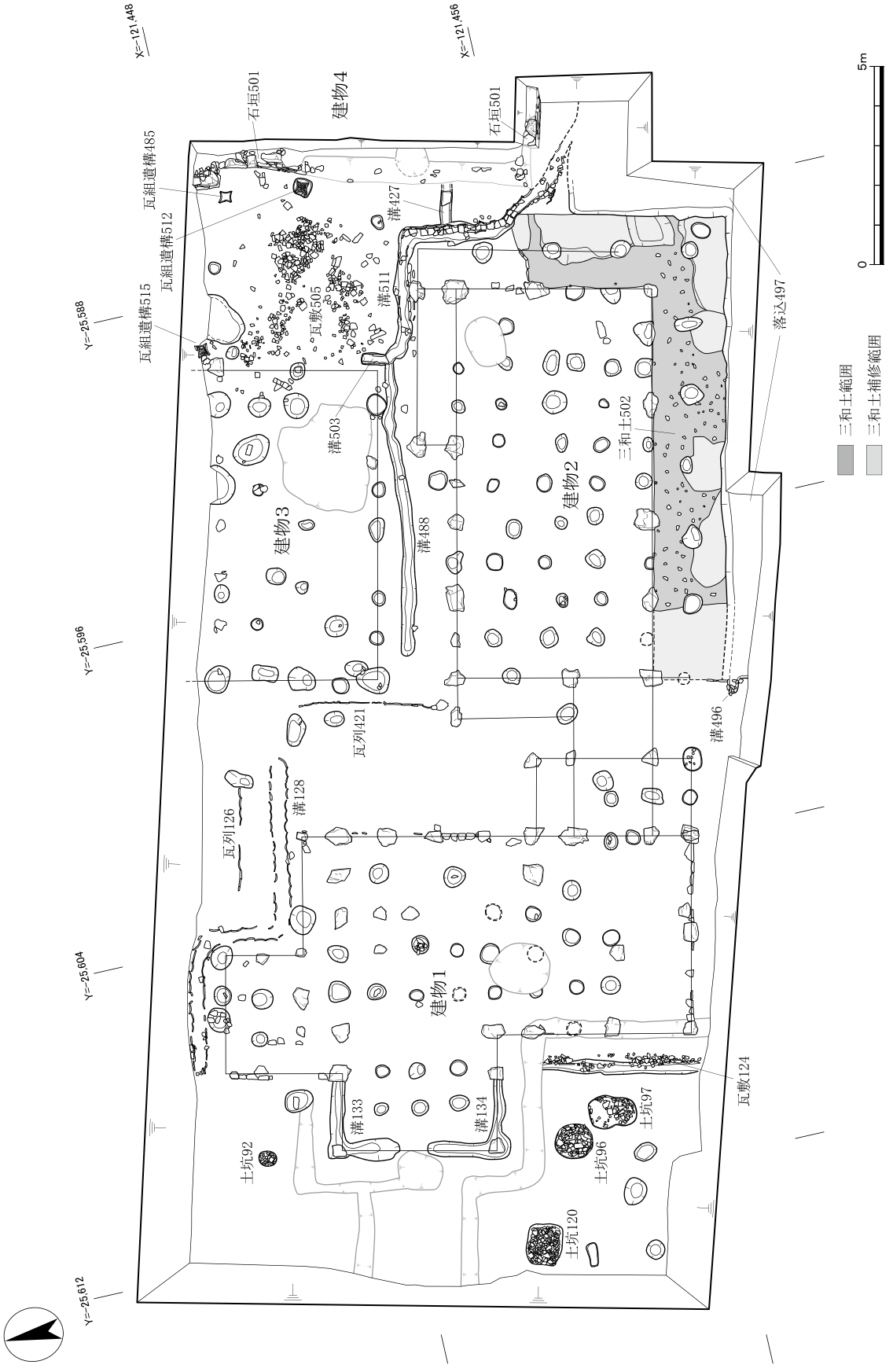


1　10YR4/4 褐色砂泥　炭混 ——— ピット467埋土
2　10YR5/6 褐色砂泥　粗砂混 ——— ピット463埋土
3　10YR4/4 褐色細砂　やや粘質 —— 整地層Ⅴa
4　10YR5/6 黄褐色砂泥
　わずかに粘質　瓦片混 ——— ピット467掘形埋土
5　10YR5/6 黄褐色砂泥
6　10YR3/3 暗褐色粗砂
　φ1cm程度の礫混
7　10YR4/4 褐色砂泥　炭混 ——— 整地層Ⅴb
8　10YR4/4 褐色砂泥
9　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
　粗砂混じり　φ1～2cm礫混 ——— 整地層Ⅴc
10　10YR4/3 褐色細砂　粗砂混
11　10YR4/3 灰黄褐色細砂 ——— 整地層Ⅵ
12　10YR6/2 灰黄褐色微砂 ——— 整地層Ⅶ

0　1m

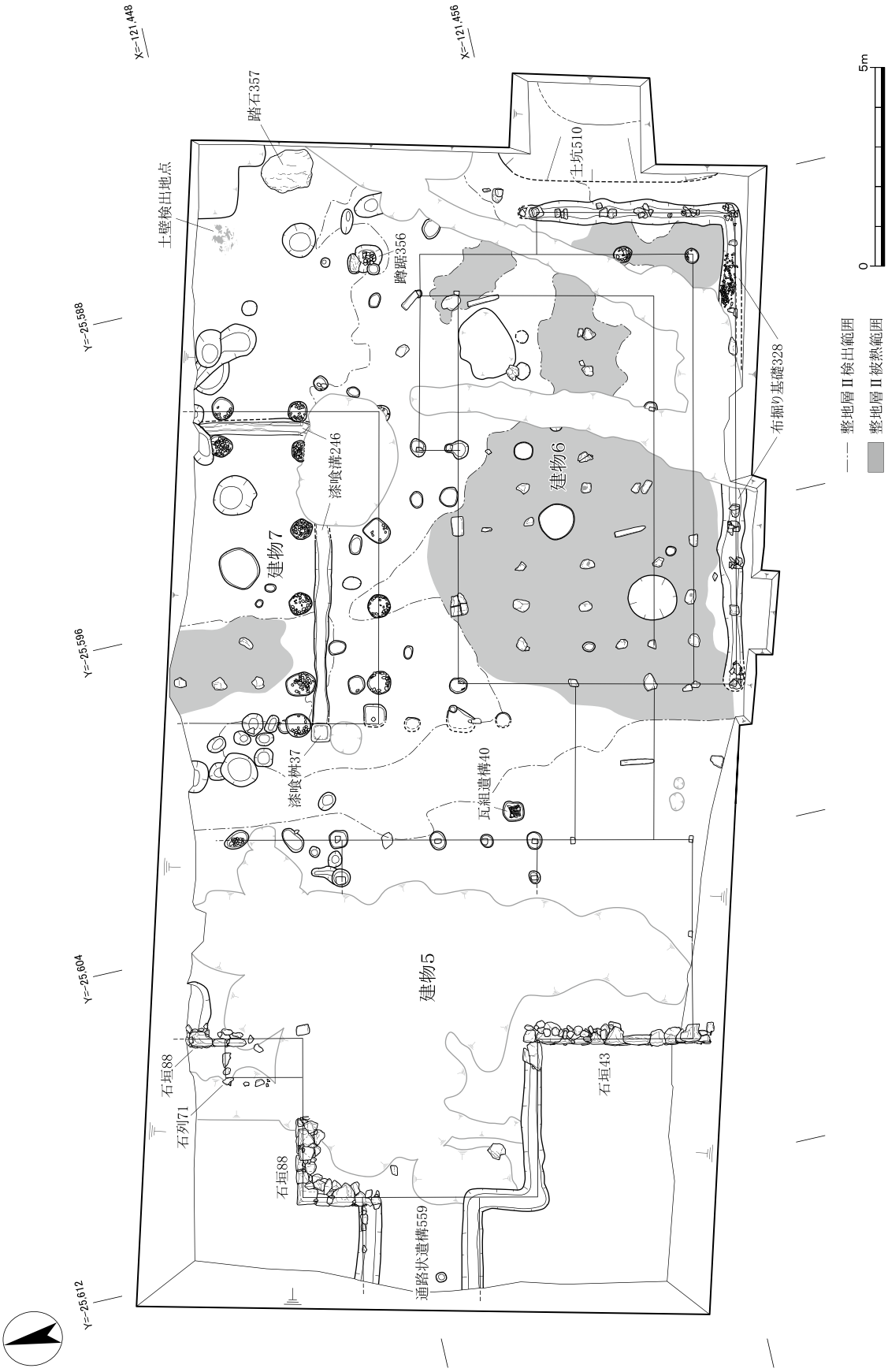
第３面平面図、確認調査区断面図（１：30）

図版２　遺構



第２面平面図（１：150）

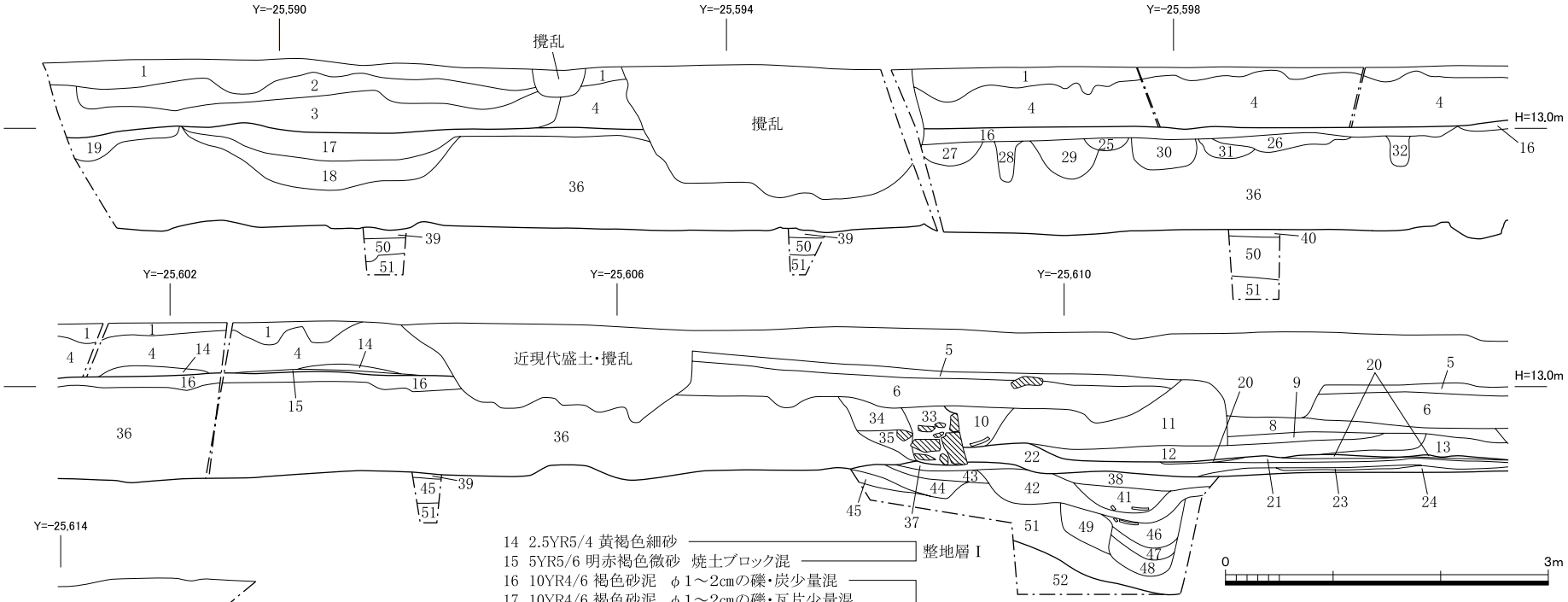
図版３　遺構



第１面平面図（１：150）

図版4 遺構

調査区南壁断面図（1：60）



1 2.5YR3/1 黒灰色細砂 粘質
2 10YR5/6 黄褐色粗砂 φ1～4cmの礫・瓦片少量混
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 φ1～3cmの礫多量混
4 2.5YR5/3 黄褐色細砂 φ0.5cmの礫混
5 10YR4/1 灰褐色細砂 わずかに粘質 φ1cmの礫混
6 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ1cmの礫混
7 10YR4/2 灰黄褐色細砂 やや粘質
8 10YR4/2 灰黄褐色細砂
9 2.5YR6/4 にぶい黄色粗砂 φ0.5cmの礫混
10 10YR3/4 暗褐色粗砂
11 2.5YR6/4 にぶい黄色粗砂 φ0.5cmの礫混
12 10YR2/1 黒色細砂 粗砂混 花崗岩砕片多量混
13 2.5YR6/4 にぶい黄色粗砂 φ0.5cmの礫混
→ 近代盛土

14 2.5YR5/4 黄褐色細砂
15 5YR5/6 明赤褐色微砂 焼土ブロック混
→ 整地層Ⅰ

16 10YR4/6 褐色砂泥 φ1～2cmの礫・炭少量混
17 10YR4/6 褐色砂泥 φ1～2cmの礫・瓦片少量混
18 10YR4/4 褐色砂泥 粘質 10YR5/6 黄褐色粘土ブロック・φ1～2cmの礫・炭・瓦片少量混
19 10YR4/6 褐色砂泥 φ1～3cmの礫少量・瓦片多量混
→ 整地層Ⅱ

20 10YR7/2 にぶい黄橙色細砂
21 10YR4/2 灰黄褐色細砂 わずかに粘質
22 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 わずかに粘質
23 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 やや粘質
24 10YR6/2 灰黄褐色細砂
→ 前庭部整地層

25 10YR5/6 黄褐色砂泥 粗砂多量混
26 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質 φ2～4cmの礫少量混
27 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂・瓦片多量混
28 10YR5/6 黄褐色砂泥 粗砂多量混
29 10YR4/6 褐色砂泥 粗砂・瓦片多量混
30 10YR4/6 褐色砂泥 炭少量混
31 10YR6/6 明黄褐色砂泥 粗砂多量混
32 10YR5/6 黄褐色砂泥 粗砂混
→ 土坑群

33 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 → 石垣43構築土
34 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 φ0.5～1cmの礫少量混
35 10YR4/2 にぶい灰黄褐色粗砂 φ1～2cmの礫混
→ 石垣43掘形埋土

36 2.5YR6/4 にぶい黄色粗砂 φ0.5cmの礫混 → 整地層Ⅲ

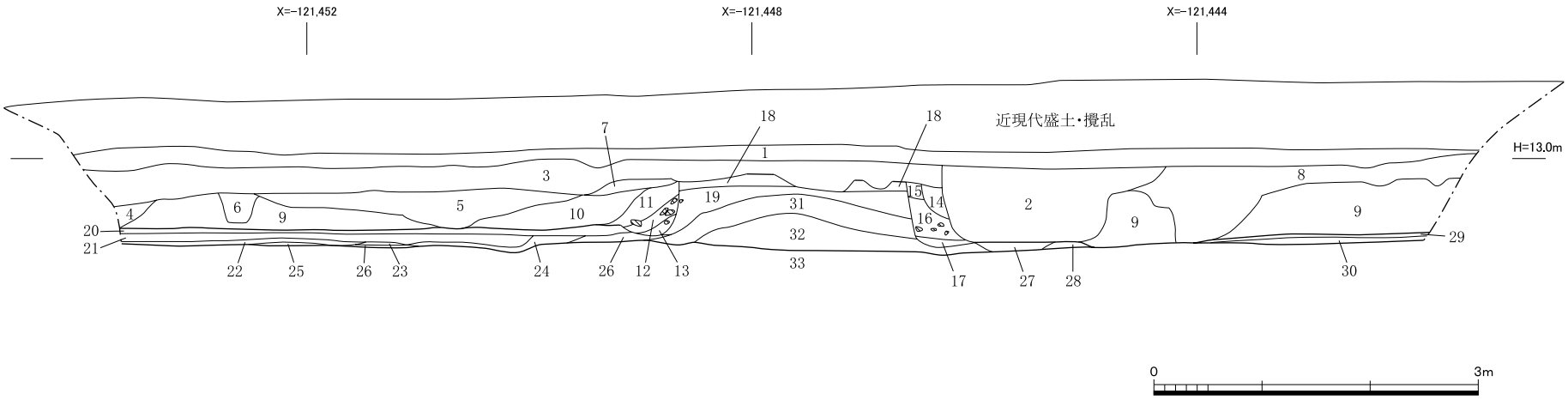
37 10YR4/4 褐色シルト 細砂混
38 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
39 10YR3/4 暗褐色砂泥
40 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 粗砂・10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック混
→ 整地層Ⅴa

41 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 やや粘質 瓦片・φ1～2cmの礫少量混
42 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂 粘質 瓦片・φ1～5cmの礫少量混
43 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 シルト混
44 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 粗砂混
45 10YR4/4 褐色粗砂
46 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 粘質 10YR7/1 灰白色粘土ブロック多量混
47 10YR5/1 褐灰色微砂 細砂混 粘質
48 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂 粘質
49 10YR6/3 にぶい黄橙色細砂 わずかに粘質
→ 地業560

50 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粘土混 → 地業561
51 10YR5/1 褐灰色粗砂 φ1～2cmの礫多量混 → 整地層Ⅵ
52 10YR5/2 灰黄褐色細砂 やや粘質 → 整地層Ⅶ

遺構図版5

調査区西壁断面図（1：60）



1 10YR4/1 灰褐色細砂 わずかに粘質 φ1cmの礫混
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 わずかに粘質 φ1cmの礫・炭少量混
3 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ1cmの礫混
4 10YR4/2 灰黄褐色細砂 やや粘質
5 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 やや粘質 φ1cmの礫混
6 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
7 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 φ1cmの円礫多量混
8 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂 やや粘質
9 10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂
10 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 粘質
φ10cmの10YR6/6 明黄褐色微砂・10YR7/1 灰白色微砂ブロック多量混
11 10YR6/3 にぶい黄橙色粗砂 φ2cmの円礫混
12 10YR4/2 灰黄褐色細砂 わずかに粘質 φ6cmの礫・漆喰片混
13 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
14 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
15 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 やや粘質
10YR6/6 明黄褐色微砂ブロック混
16 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 わずかに粘質 φ2～5cmの礫混
17 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂

近代盛土

通路状遺構559 南面石垣
石材抜取後の流入土

通路状遺構559 北面石垣
石材抜取後の流入土

18 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂
10YR6/6 明黄褐色微砂ブロック多量混
19 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂
10YR7/1 灰白色微砂ブロック・鉄分混
20 10YR4/2 灰黄褐色細砂 わずかに粘質
21 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 わずかに粘質
22 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 粘質
23 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土
24 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
25 10YR5/2 灰黄褐色粘土
26 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 φ1cmの円礫多量混
37 10YR6/2 灰黄褐色細砂 やや粘質
28 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
29 10YR6/2 灰黄褐色細砂
30 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
31 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～粗砂
32 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
33 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 粘質

通路状遺構559整地層

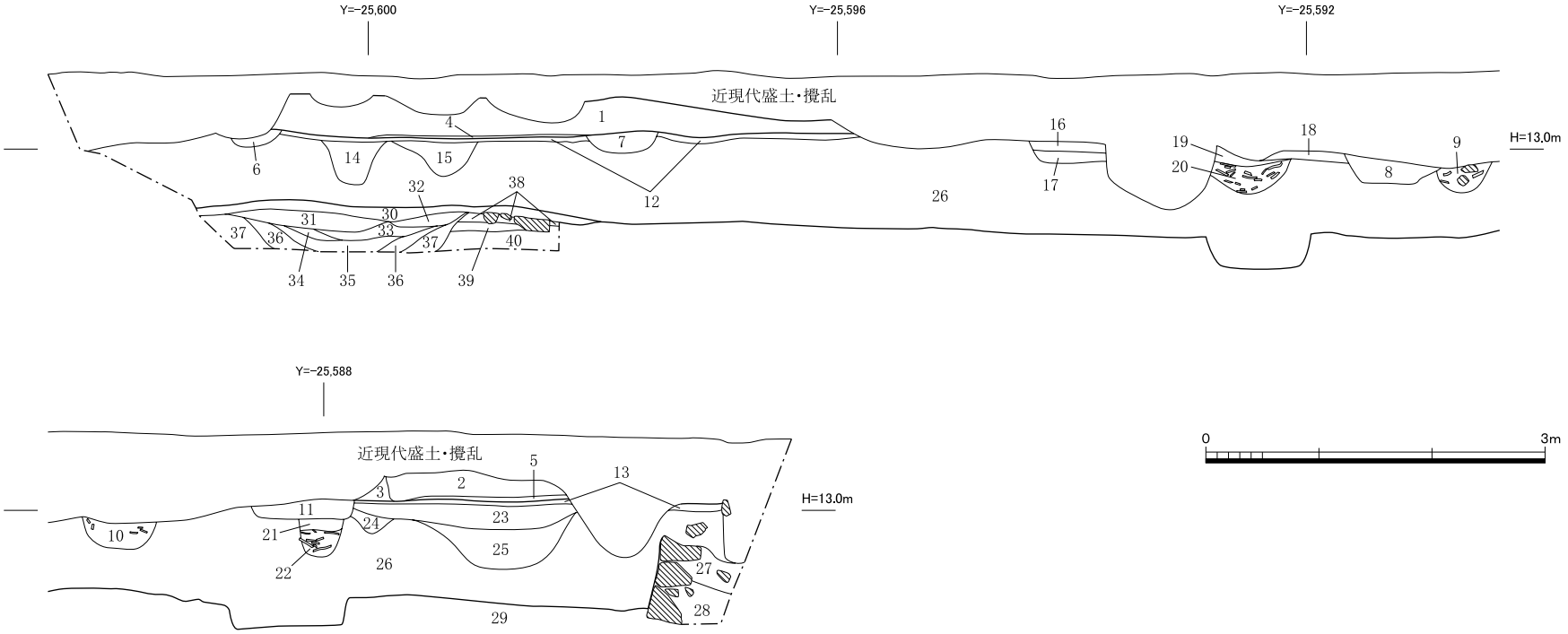
前庭部整地層

整地層Ⅲ

整地層Ⅴa

遺構の断図

調査区北壁断面図（1：60）



1 7.5YR4/4 褐色砂泥 焼土・φ3～6cmの礫・瓦多量混
2 5YR3/4 暗赤褐色焼土 炭・瓦混
3 10YR7/4 にぶい黄橙色泥砂 細粒 φ2cmの礫少量・焼土・瓦微量
4 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混
5 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭多量 瓦混
→ 整地層Ⅰ

6 10YR5/6 黄褐色砂泥 φ3～6cmの礫混
7 10YR6/8 明黄褐色砂泥
→ ピット埋土

8 10YR6/4 にぶい黄橙色泥砂 細粒 φ1cmの礫・炭少量混
→ 土坑310埋土

9 10YR6/4 にぶい黄橙色泥砂 中粒 瓦多量混
→ 土坑315埋土

10 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂 細粒 φ1cmの礫・炭少量混
→ 土坑309埋土

11 10YR6/6 明黄褐色砂 細粒
→ 土坑埋土

12 7.5YR4/6 褐色砂泥 シルト混 被熱
13 10YR4/4 褐色砂
→ 整地層Ⅱ

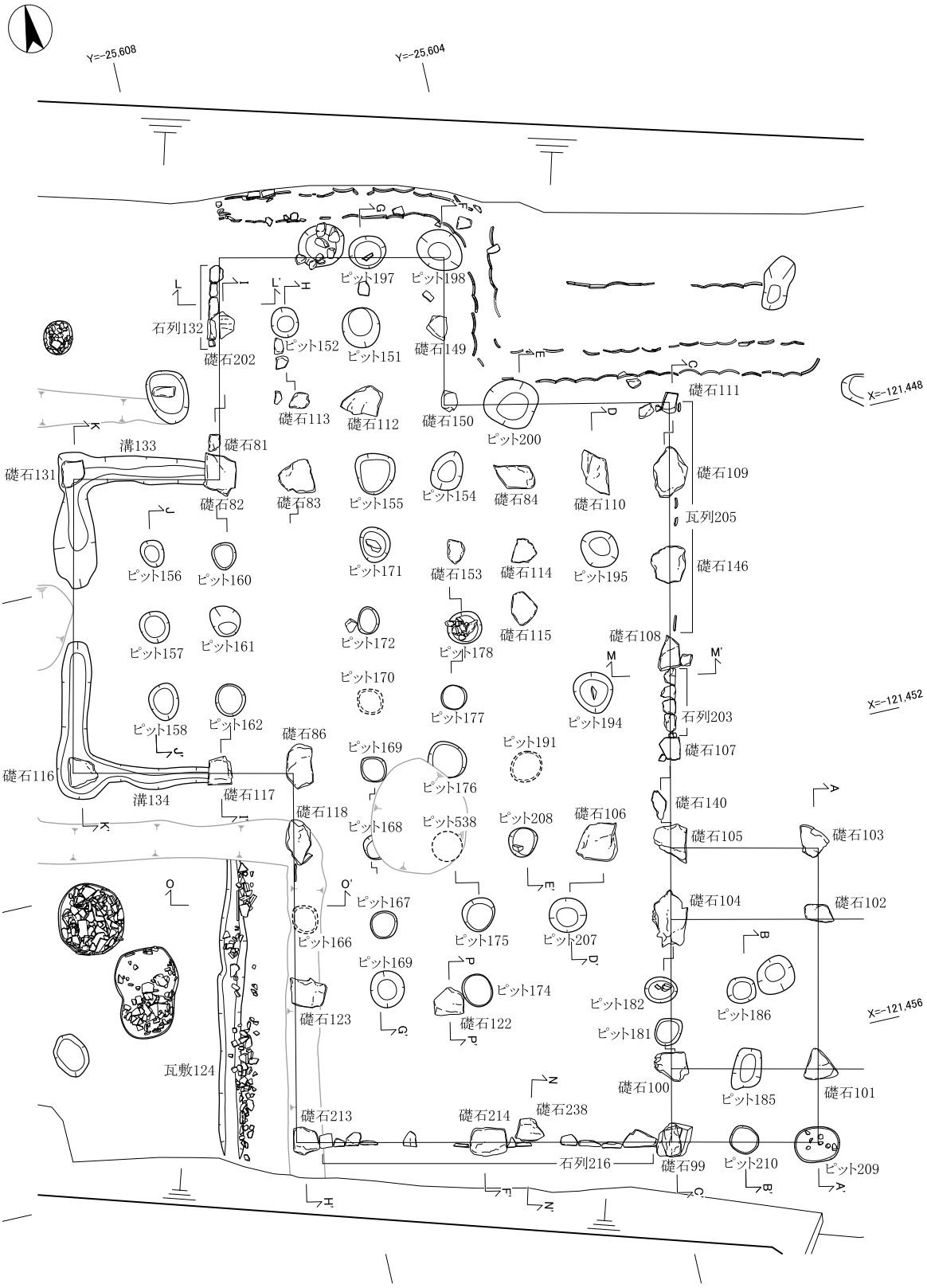
14 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混
15 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 φ1～3cmの礫・瓦混
16 10YR7/6 明黄褐色シルト 細粒 φ～0.5cmの礫微量・焼土少量混
17 10YR7/6 明黄褐色シルト φ1cmの礫混
18 10YR7/6 明黄褐色泥砂 細粒 φ0.5cmの礫・炭多量混
19 10YR8/4 浅黄橙色シルト 細粒 φ～0.5cmの礫・炭・焼土少量混
20 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥 細粒 φ0.5～2cmの礫・瓦多量混
21 10YR7/6 明黄褐色微砂 細粒 φ～0.5cmの礫混
22 10YR6/6 明黄褐色粗砂泥 φ1～2cmの礫・瓦多量混
23 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混
24 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 細砂混
25 10YR4/4 褐色砂泥 瓦混
→ 土坑群

26 10YR8/4 浅黄橙色粗砂
→ 整地層Ⅲ

27 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂 φ0.5～20cmの礫多量混
28 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混
→ 石垣510構築土

29 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 φ2～3cmの礫混
30 10YR5/6 黄褐色シルト 瓦混
→ 整地層Va

31 10YR6/6 明黄褐色細砂
32 10YR4/6 褐色細砂
33 10YR5/6 黄褐色砂泥
34 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
35 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 わずかに粘質
36 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 瓦混
37 10YR5/6 黄褐色砂泥
38 10YR5/6 黄褐色シルト φ1～2cmの礫混
39 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 炭少量混
40 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 炭多量混
→ 整地層Vc

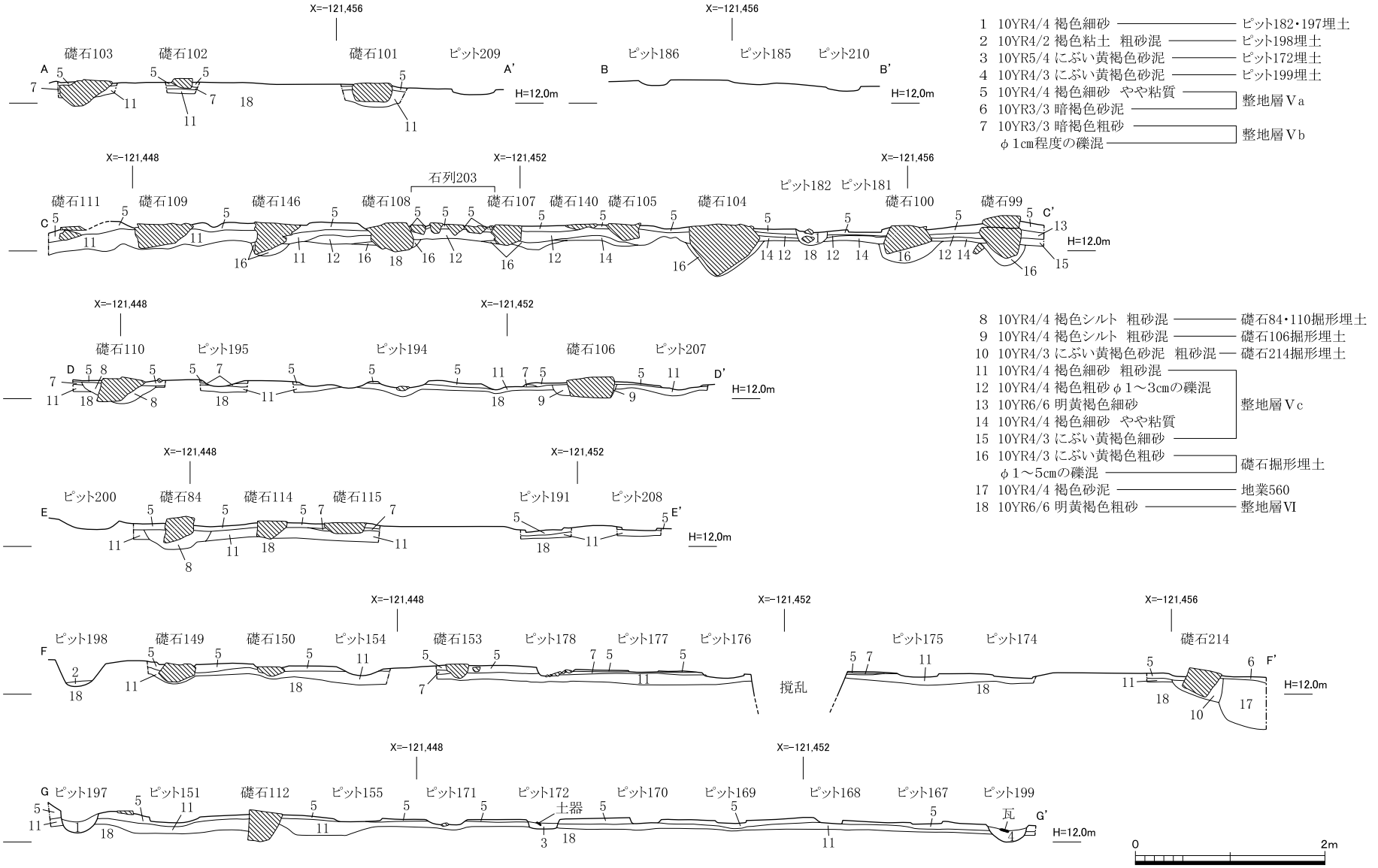


※ピット538は、隣接する撹乱上端の崩壊により記録できなかった

建物１平面図（１：80）

図版3　遺構

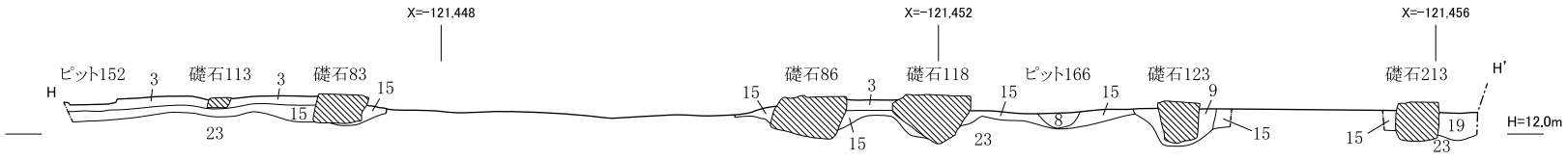
建物1断面図1（1：60）

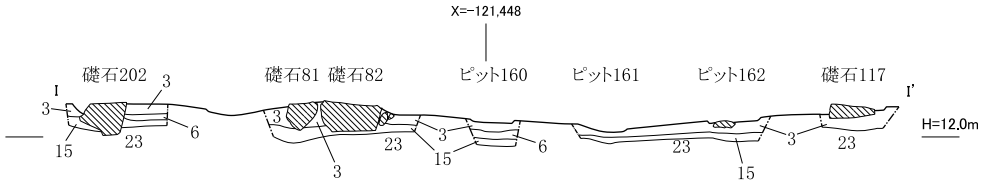


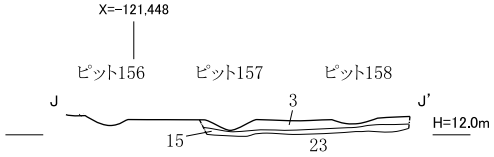
1　10YR4/4 褐色細砂 ——— ピット182・197埋土
2　10YR4/2 褐色粘土　粗砂混 ——— ピット198埋土
3　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 ——— ピット172埋土
4　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 ——— ピット199埋土
5　10YR4/4 褐色細砂　やや粘質 ——— 整地層Ⅴa
6　10YR3/3 暗褐色砂泥 ———
7　10YR3/3 暗褐色粗砂 ——— 整地層Ⅴb
φ1cm程度の礫混 ———

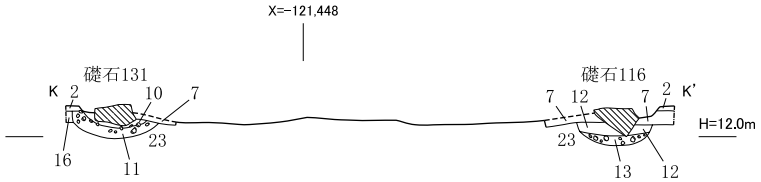
8　10YR4/4 褐色シルト　粗砂混 ——— 礎石84・110掘形埋土
9　10YR4/4 褐色シルト　粗砂混 ——— 礎石106掘形埋土
10　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　粗砂混 ——— 礎石214掘形埋土
11　10YR4/4 褐色細砂　粗砂混 ———
12　10YR4/4 褐色粗砂 φ1～3cmの礫混 ———
13　10YR6/6 明黄褐色細砂 ——— 整地層Ⅴc
14　10YR4/4 褐色細砂　やや粘質 ———
15　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 ———
16　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 ——— 礎石掘形埋土
φ1～5cmの礫混 ———
17　10YR4/4 褐色砂泥 ——— 地業560
18　10YR6/6 明黄褐色粗砂 ——— 整地層Ⅵ

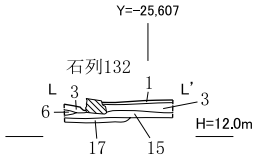
建物1断面図2（1：60）

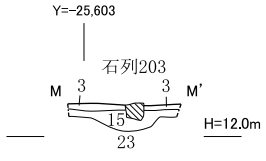


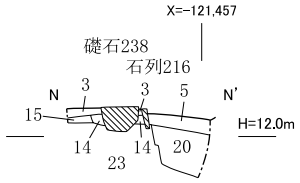


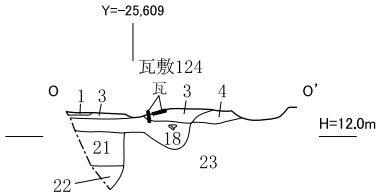


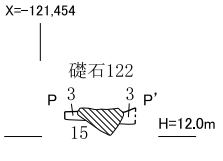












1 10YR4/4 褐色細砂 炭混
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
3 10YR4/4 褐色細砂 やや粘質
4 10YR4/4 褐色細砂 粗砂混
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混
→ 整地層Ⅴa

6 10YR3/3 暗褐色粗砂 φ1㎝程度の礫混
7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
2.5Y7/6 明黄褐色漆喰 φ2～3㎝の礫混
→ 整地層Ⅴb

8 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 やや粘質 → ピット166掘形埋土
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 → 礎石123掘形埋土

10 10YR4/4 褐色泥砂 砂質強 漆喰少量混
11 10YR4/4 褐色砂泥 φ2～3㎝の礫多量混
→ 礎石131掘形埋土

12 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 砂質強 漆喰少量混
13 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 砂質強
φ2～5㎝の礫多量混
→ 礎石116掘形埋土

14 10YR3/3 暗褐色砂泥 → 礎石238掘形埋土

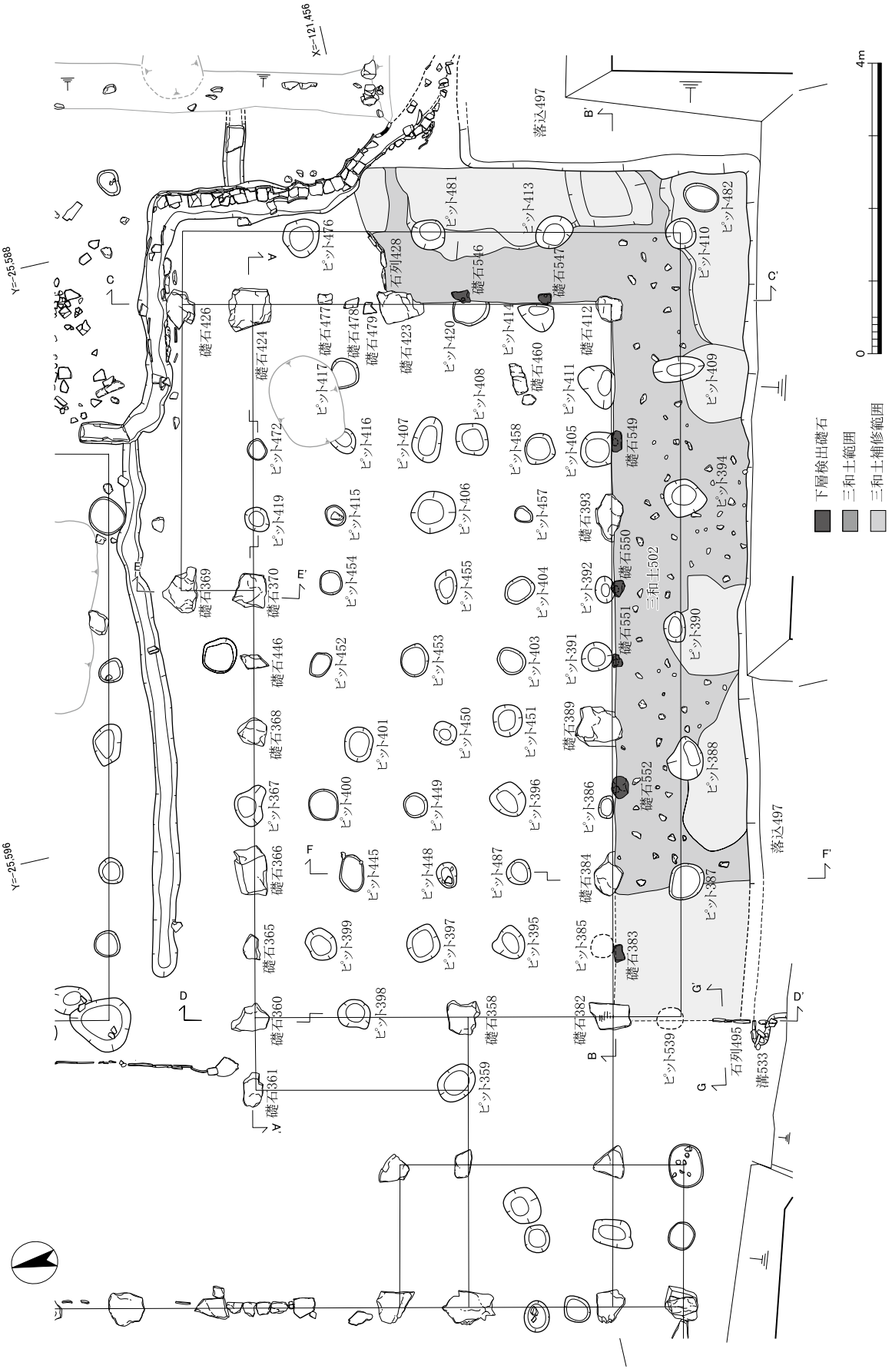
15 10YR4/4 褐色細砂 粗砂混
16 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
17 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
18 10YR4/4 褐色細砂 粗砂混
→ 整地層Ⅴc

19 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 細砂多め
20 10YR4/4 褐色砂泥
21 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 粗砂混
22 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 やや粘質
→ 地業560

23 10YR6/6 明黄褐色粗砂 → 整地層Ⅵ

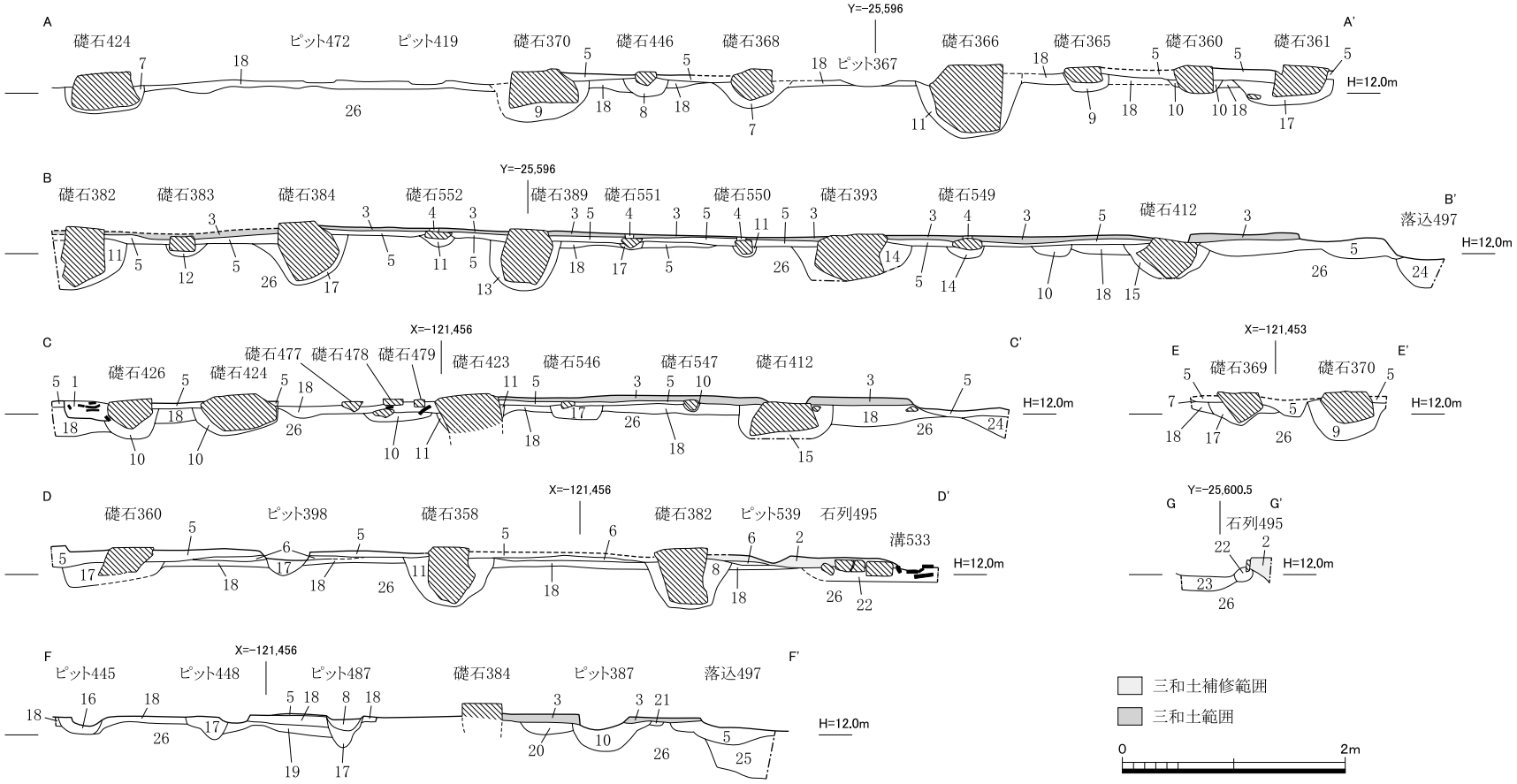
0 2m

図版6 遺構


X=-121,456
Y=-25,588
Y=-25,596
落込497
石列428
石列495
三和土502
溝533
下層検出礎石
三和土範囲
三和土補修範囲
0
4m

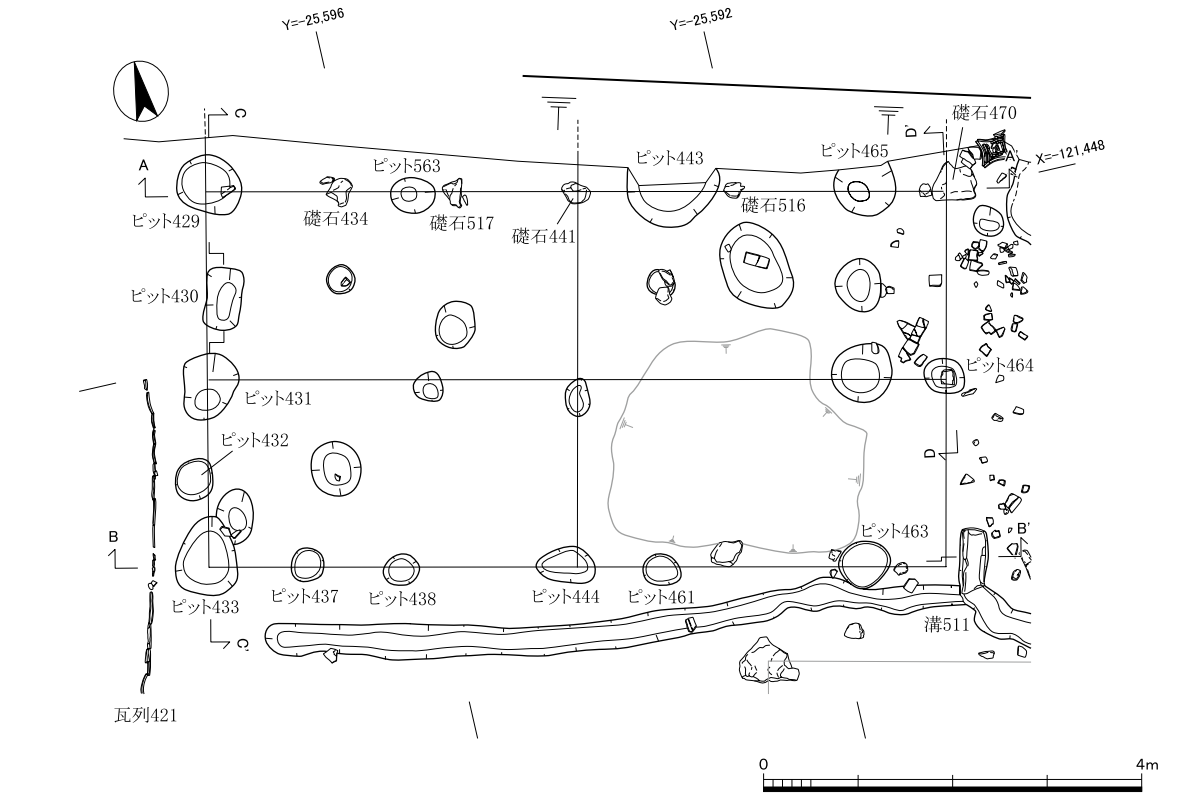
建物２平面図（１：80）

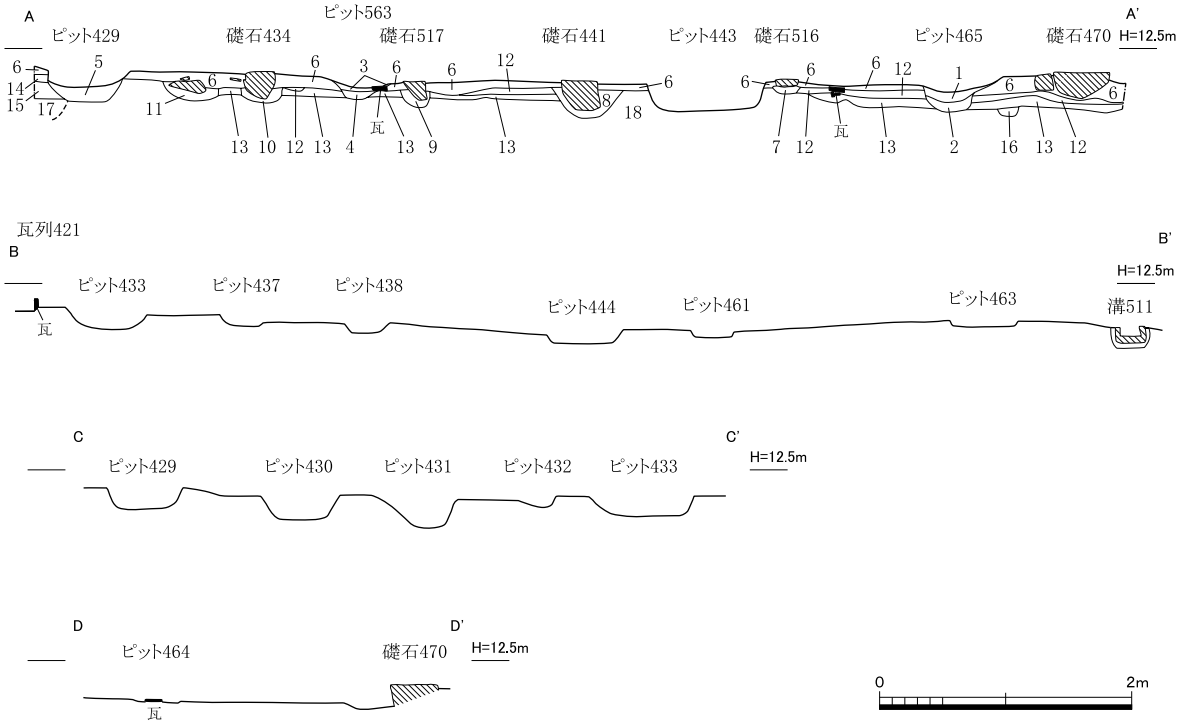
建物２断面図（１：60）



1 10YR4/4 褐色砂泥 瓦混 ― 溝511埋土
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭混 ― 三和土502補修土
3 2.5Y5/4 黄褐色細砂～粗砂 ― 三和土502
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 ― 柱痕
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 ― 整地層Ｖa
6 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 粗砂混 ― 整地層Ｖb
φ0.5～1㎝の礫混
7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 粗砂少量混
8 2.5Y5/3 黄褐色粘土 ― 礎石掘形埋土
粗砂・φ2～4㎝の礫・瓦片少量混
9 10YR4/4 褐色砂泥 シルト混 やや粘質
10 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混
11 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 細砂混
12 10YR5/6 黄褐色細砂
13 10YR6/3 にぶい黄橙色細砂 砂泥ブロック混
14 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 細砂・粗砂混
15 10YR6/4にぶい黄橙色細砂 砂泥ブロック混
16 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
粗砂・10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック混
17 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 やや粘質 ― 礎石掘形埋土
18 10YR3/4 暗褐色砂泥 粗砂・φ1～2㎝の礫混
19 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂質強
20 10YR4/4 褐色砂泥
21 10YR4/6 褐色細砂～粗砂 ― 整地層Ｖc
22 2.5Y5/4 黄褐色細砂～粗砂
23 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
24 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 ― 地業561
25 10YR4/4 褐色粗砂
26 10YR6/6 明黄褐色粗砂 ― 整地層Ⅵ

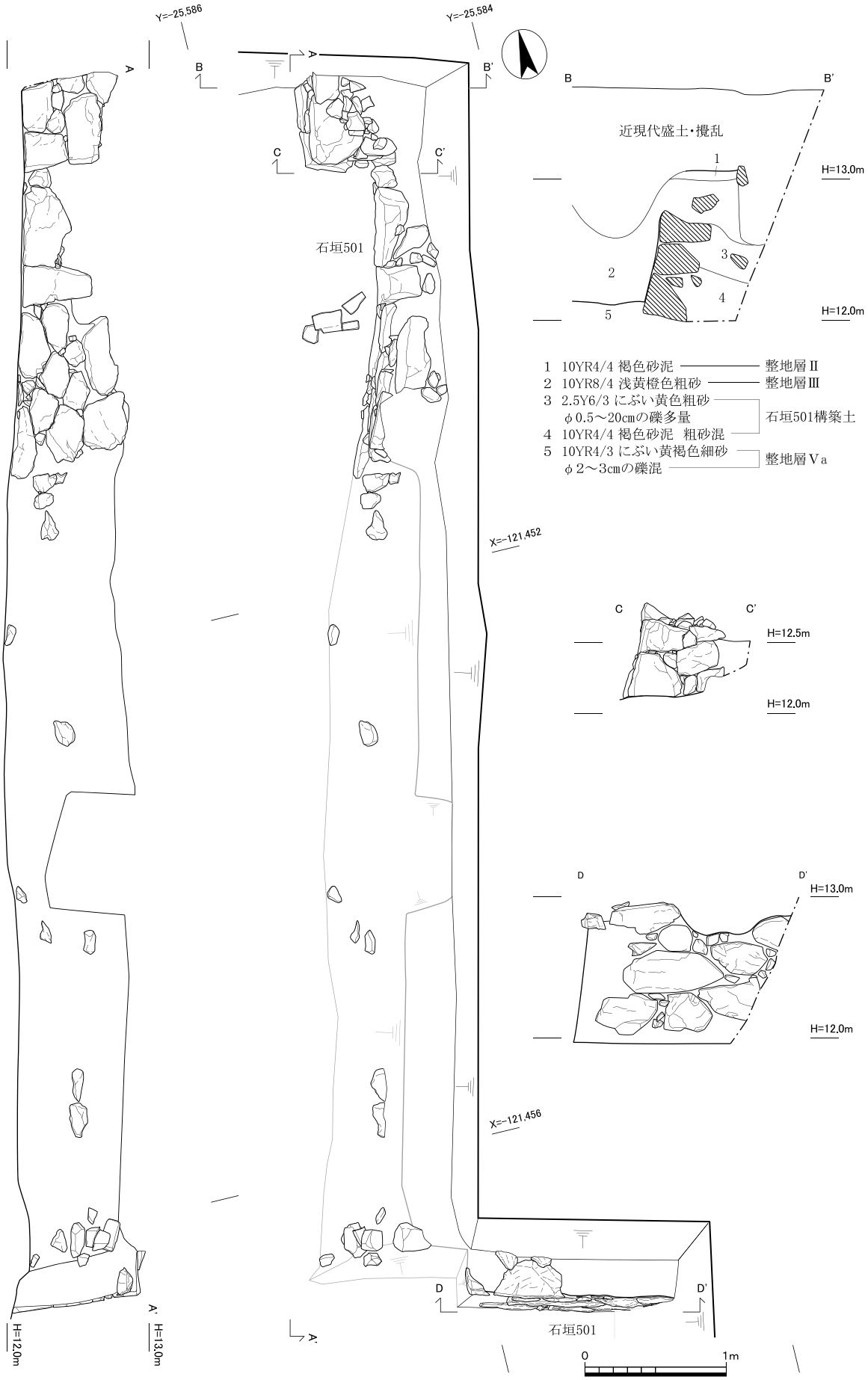
図版11 遺構





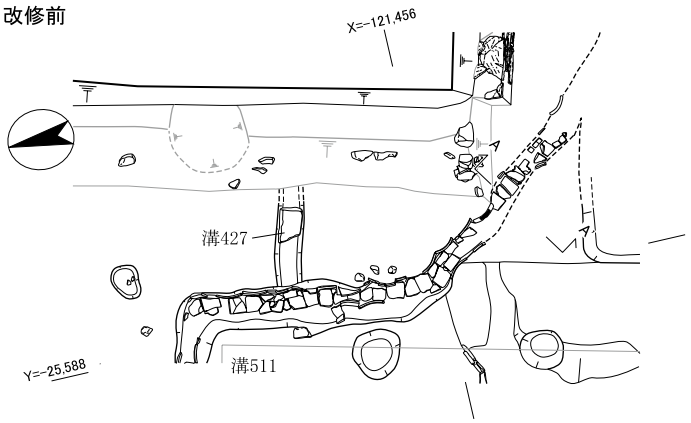
1　7.5YR4/4 褐色砂泥 ┐
2　7.5YR4/2 灰褐色細砂　粗砂混 ┘ ピット465埋土
3　7.5YR4/1 褐灰色砂泥 ┐
4　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 ┘ ピット563埋土
5　7.5YR4/3 褐色泥砂 ── ピット429埋土
6　10YR4/4 褐色細砂　やや粘質 ── 整地層Ⅴa
7　10YR4/2 灰黄褐色砂泥　粗砂混 ── 礎石516掘形埋土
8　10YR3/3 暗褐色砂泥　細砂混 ── 礎石441掘形埋土
9　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 ┐
　粗砂・粘質土ブロック混 ┘ 礎石517掘形埋土
10　10YR3/3 暗褐色泥砂 ── 礎石434掘形埋土
11　7.5YR3/3 暗褐色泥砂
12　10YR3/3 暗褐色粗砂　φ1cm程度の礫混 ── 整地層Ⅴb
13　10YR4/3 褐色細砂　粗砂混 ┐
14　10YR3/3 暗褐色砂泥　細砂混 ┘ 整地層Ⅴc
15　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　細砂・炭混 ┘
16　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂　粗砂混
17　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　粘質 ── 地業562
18　10YR6/4 にぶい黄橙色細砂 ── 整地層Ⅵ

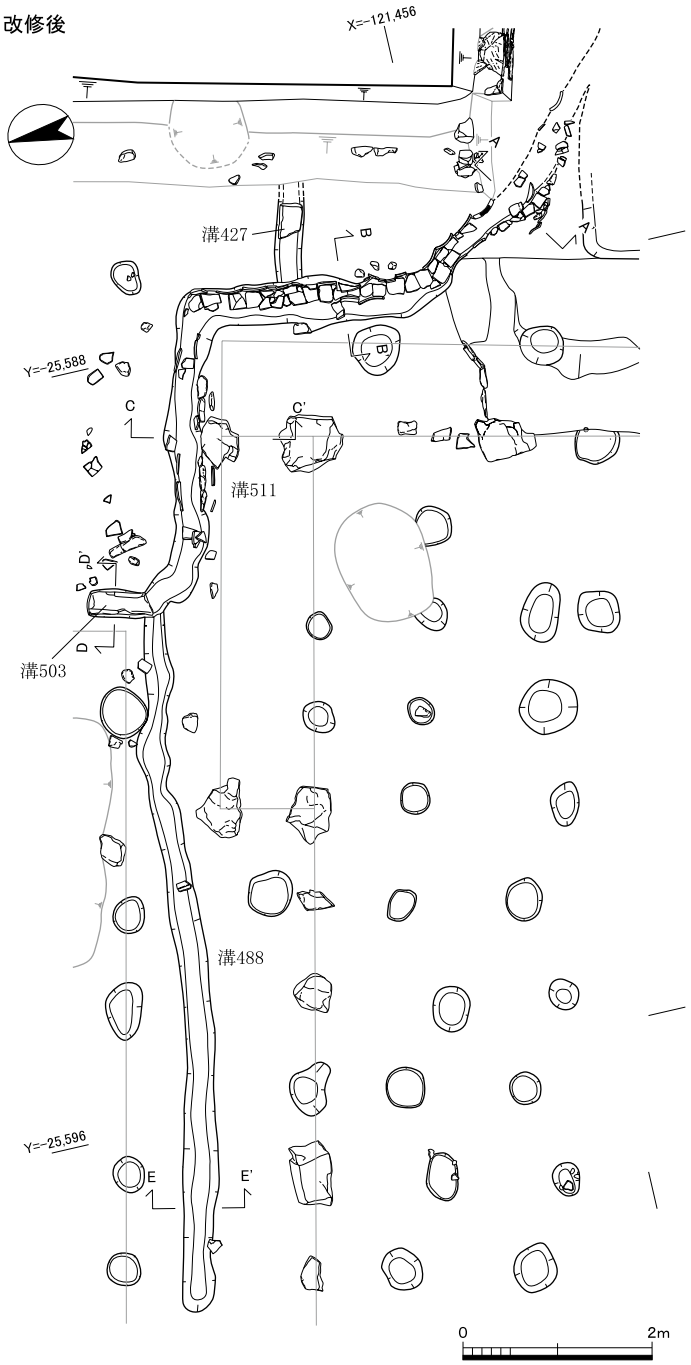
建物３平面図（１：80）・断面図（１：60）


Y=-25,586
Y=-25,584
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
石垣501
近現代盛土・攪乱
1
2
3
4
5
H=13.0m
H=12.0m
H=12.5m
X=-121,452
X=-121,456
1　10YR4/4 褐色砂泥　整地層Ⅱ
2　10YR8/4 浅黄橙色粗砂　整地層Ⅲ
3　2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂
φ0.5～20cmの礫多量　石垣501構築土
4　10YR4/4 褐色砂泥　粗砂混
5　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
φ2～3cmの礫混　整地層Va
0
1m

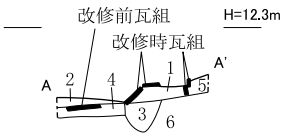
建物４実測図（１：40）

図版14 遺構

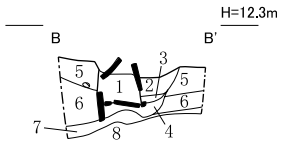




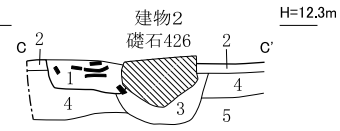
溝511



1 10YR5/6 黄褐色砂泥
φ3～4㎝の礫混 瓦混 ― 改修時構築土
2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
3 10YR4/6 褐色砂泥 ― 改修前瓦組の抜取穴
4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
瓦混 ― 改修前構築土
5 10YR4/4 褐色砂泥 粘質弱 ― 整地層Va
6 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂
φ1～3㎝の礫多量混 ― 整地層Ⅵ

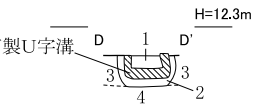


1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土
5Y5/1 灰色粘土混 ― 溝511埋土
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
粘質 粗砂混
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 細砂多量混 ― 溝511掘形埋土
4 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混
5 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質
φ1～3㎝の礫少量混 ― 整地層Va
6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂多量混
7 10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂
8 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂
φ1～3㎝の礫多量混 ― 整地層Ⅵ



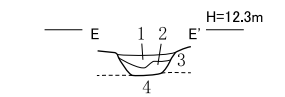
1 10YR4/4 褐色砂泥 瓦混 ― 溝511埋土
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 ― 整地層Va
3 10YR4/4 褐色砂泥 ― 礎石426掘形埋土
4 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
粗砂・炭混 ― 整地層Vc
5 10YR6/6 明黄褐色粗砂 ― 整地層Ⅵ

溝503



1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土
粗砂少量・5Y5/1灰色粘土ブロック混 ― 溝503埋土
2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 ― 溝503掘形埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 ― 整地層Va
4 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
粗砂・炭混 ― 整地層Vc

溝488

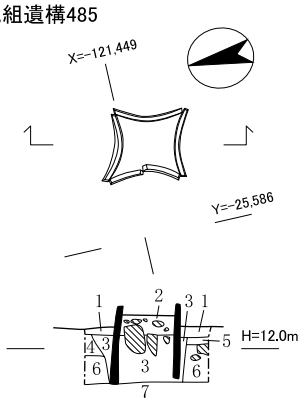


1 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 ― 整地層Ⅲ
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
やや粘質 瓦混 ― 溝488埋土
3 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
粗砂・炭混 ― 整地層Vc
4 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 ― 整地層Ⅵ

0 1m

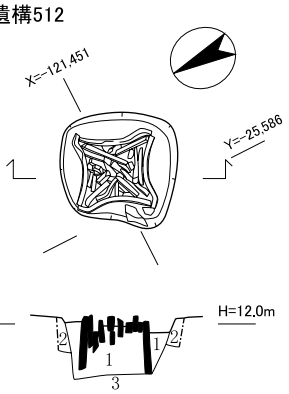
溝427・488・503・511平面図（1：80）・断面図（1：40）

瓦組遺構485



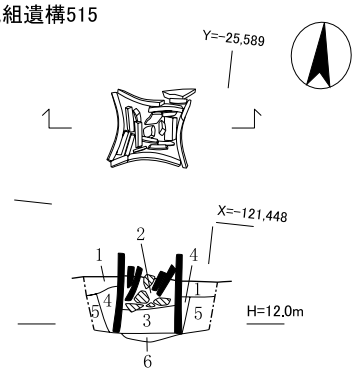
1 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 φ2～3cmの礫混 ― 整地層Va
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 ― 瓦組遺構
3 10YR4/4 褐色砂泥 粘質弱 ― 485構築土
4 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 ― 整地層Vc
6 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂
7 10YR4/4 褐色粗砂 ― 整地層VI

瓦組遺構512



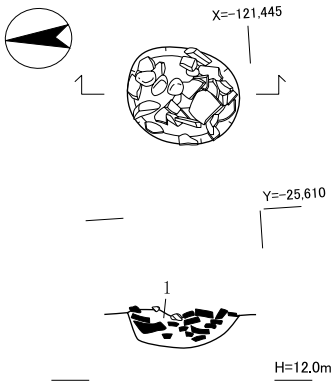
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粘質弱 ― 瓦組遺構512構築土
2 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 ― 整地層Vc
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 ― 整地層VI

瓦組遺構515



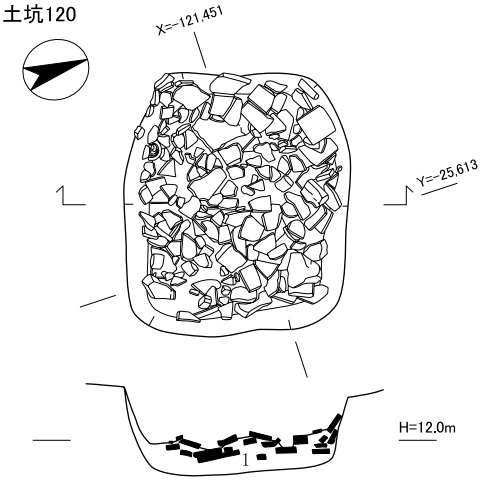
1 10YR4/4 褐色砂泥 細砂混 ― 整地層Va
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ5～10cmの礫・瓦多量・炭少量混
3 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂・炭少量混
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 砂礫・炭微量混 ― 瓦組遺構515構築土
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 細砂混 ― 整地層Vc
6 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂質強 ― 整地層VI

土坑92



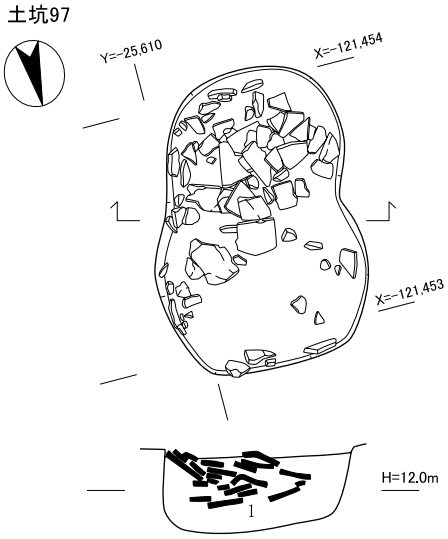
1 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 粗砂混

土坑120



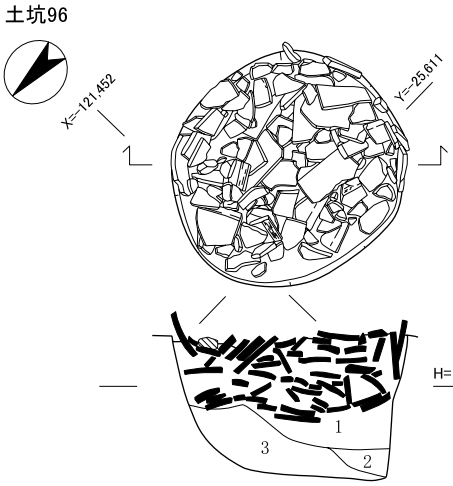
1 10YR4/4 褐色粗砂 やや粘質 鉄釘混

土坑97



1 10YR4/4 褐色粗砂 粘質

土坑96

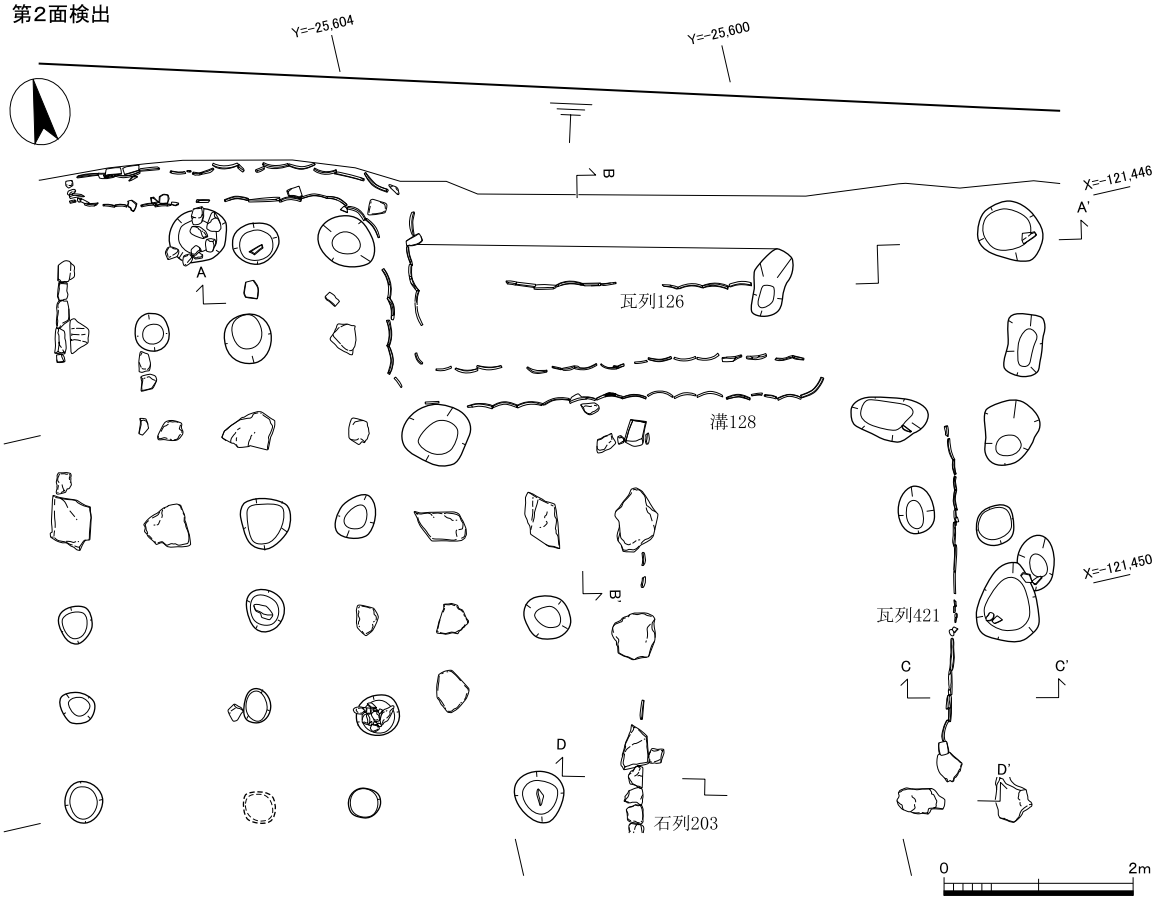


1 10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂
2 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂粗砂 やや粘質 炭・鉄釘混
3 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂

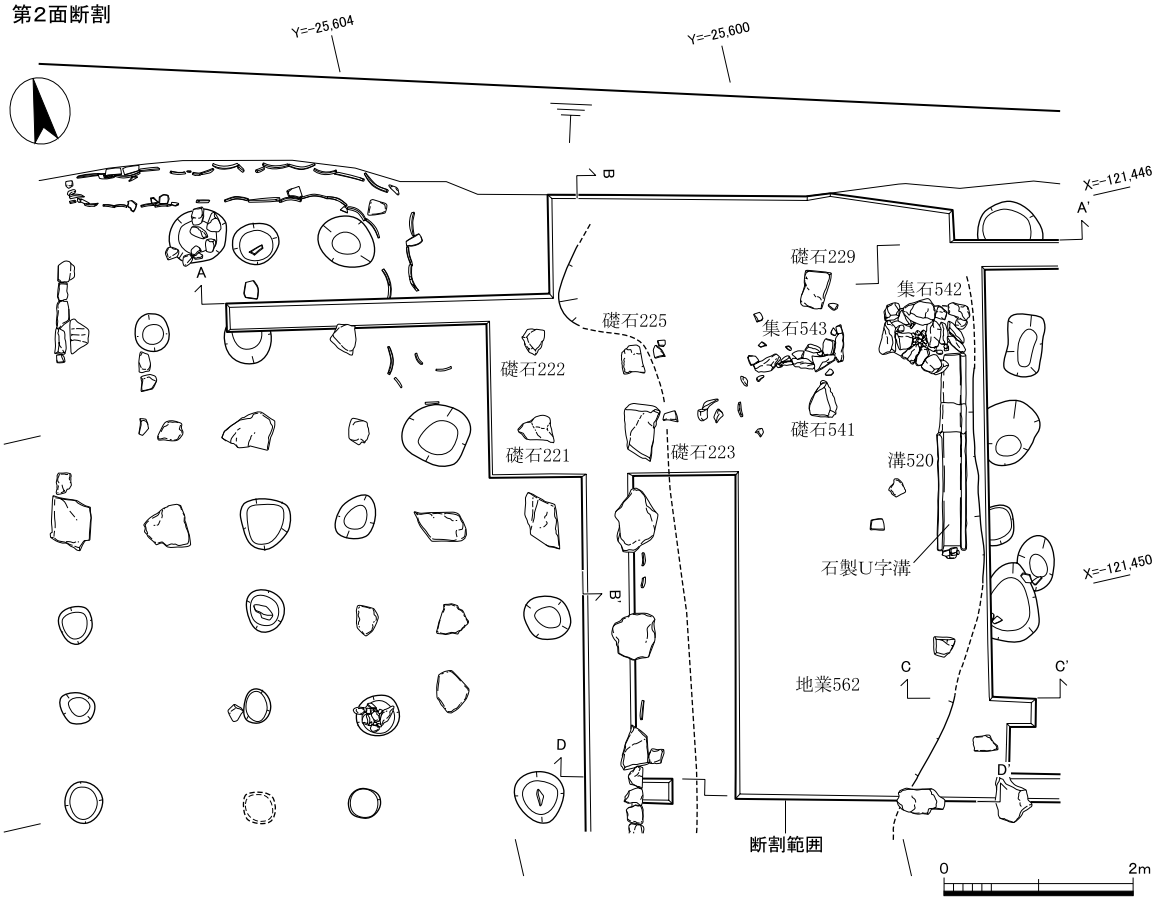
0 1m

瓦組遺構485・512・515、土坑92・96・97・120実測図（1：30）

第2面検出



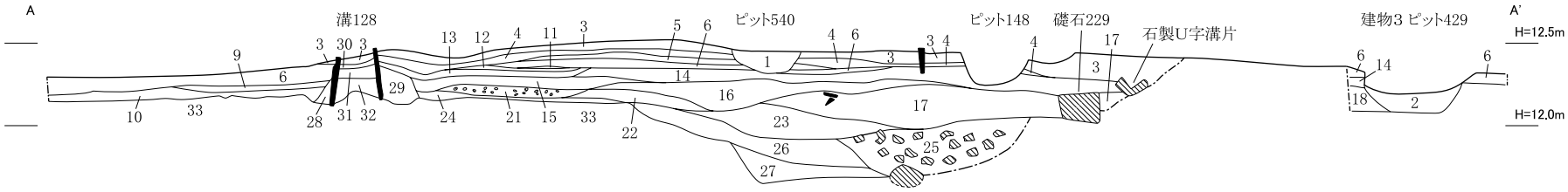
第2面断割

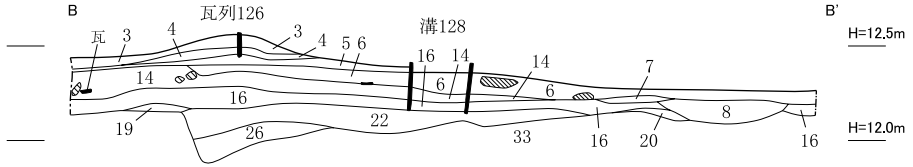


瓦列126・421、溝128、地業562平面図（1：80）

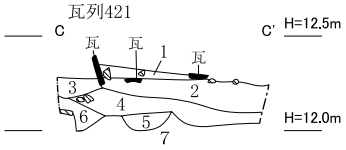
遺構図版17

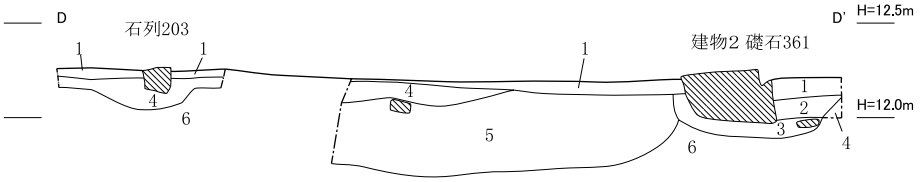
瓦列126・421、溝128、地業562断面図（1：40）





1 10YR6/4にぶい橙色細砂 ― ピット540埋土
2 7.5YR4/3褐色泥砂 ― ピット429埋土
3 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 炭少量
4 10YR4/4褐色細砂
5 10YR4/2灰黄褐色細砂
6 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
7 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 ― 整地層Va
8 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 やや粘質 ― 礎石110掘形埋土
9 10YR3/4暗褐色細砂
φ3～5cmの礫多量 ― 整地層Vb
10 10YR4/4褐色シルト
11 10YR4/2灰黄褐色細砂
12 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 やや粘質 ― 整地層Vc
13 10YR4/2灰黄褐色粗砂
φ0.5～2cmの礫、炭少量
14 10YR5/4にぶい黄褐色細砂
φ2～5cmの礫、炭少量、瓦混
15 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 炭・土器片混
16 10YR7/2にぶい黄橙色細砂
φ5mm程度の粘土ブロックがやや多く混
17 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
φ1～2cmの礫、炭・瓦少量
18 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
細砂混 炭混
19 10YR4/4褐色細砂
20 10YR4/4褐色シルト ― 整地層Vc
21 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
φ1～2cmの礫多量
22 10YR4/2灰黄褐色粗砂 やや粘質
23 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 粘質
24 10YR4/4褐色粗砂
φ2～10cmの礫少量
25 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 粘質
瓦・φ2～10cmの礫混
26 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 粘質
瓦・φ2～5cmの礫混
27 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 やや粘質 ― 地業562
28 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 やや粘質
29 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
30 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
31 10YR4/4褐色細砂
32 10YR4/4褐色細砂 粗砂混 ― 溝128構築土
33 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂 ― 整地層VI

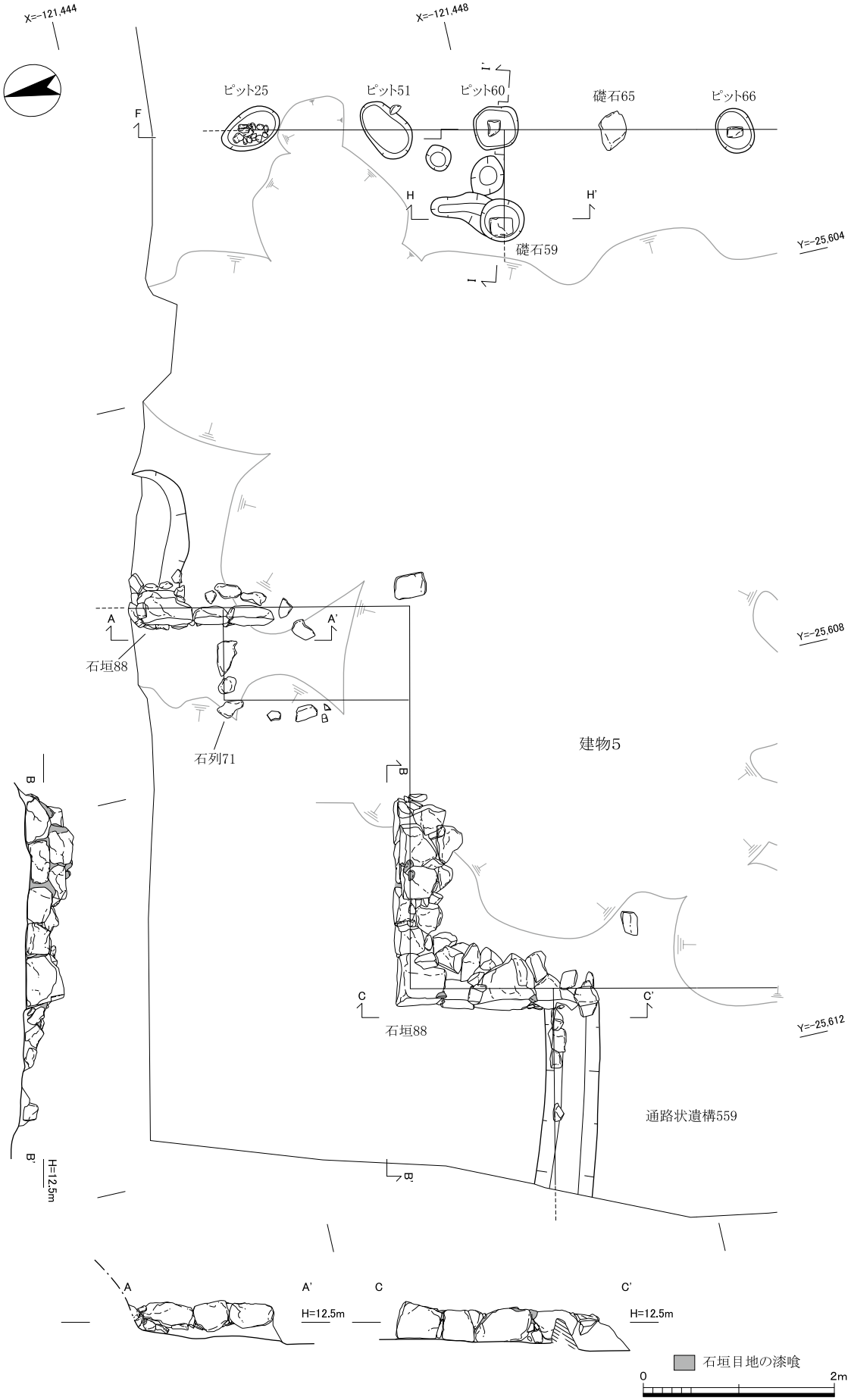




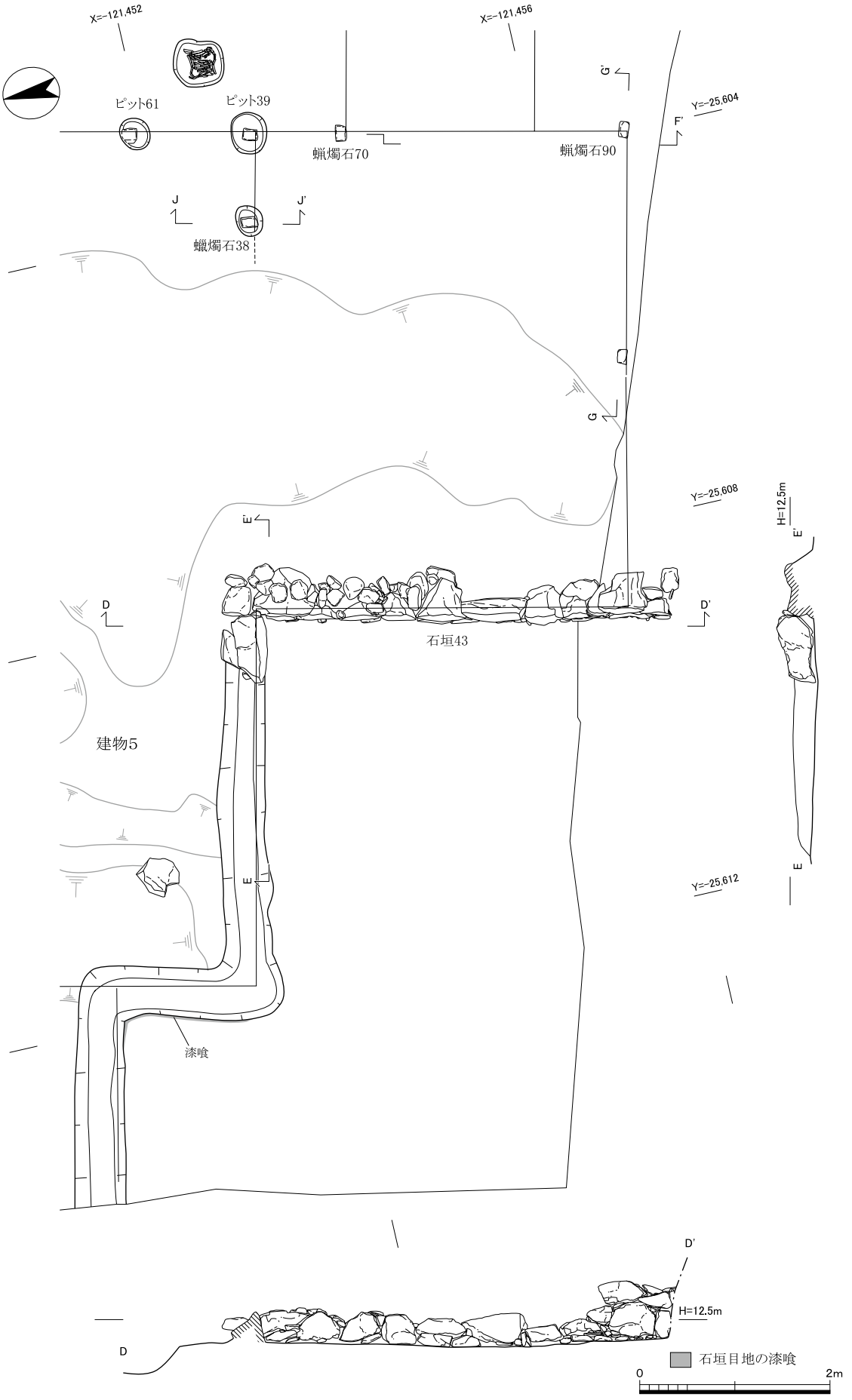
1 10YR4/4褐色砂泥 φ2～6cmの礫多く混 瓦混
2 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 φ3～6cmの礫少量
3 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 炭微量 ― 整地層Va
4 10YR4/4褐色砂泥 細砂混 炭微量 φ4～10cmの礫混
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭微量 ― 整地層Vc
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 ― 地業562
7 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂 ― 整地層VI

1 10YR4/4褐色細砂 やや粘質 ― 整地層Va
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 やや粘質
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 ― 礎石361掘形埋土
4 10YR4/4褐色粗砂 φ1～3cmの礫混 ― 整地層Vc
5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粗砂多量 ― 地業562
6 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂 ― 整地層VI

0 2m

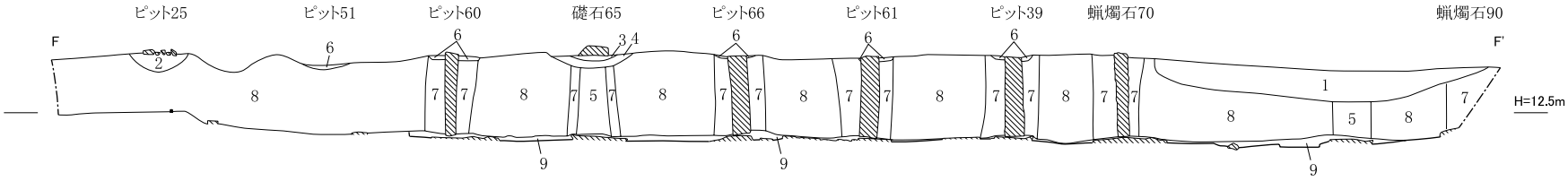


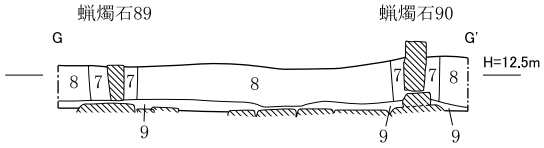
建物５平面図・立面図１（１：60）



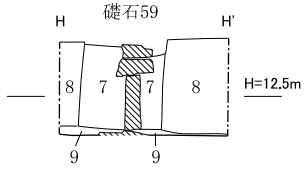
建物５平面図・立面図２（１：60）

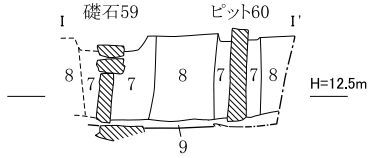
建物5断面図（1：60）

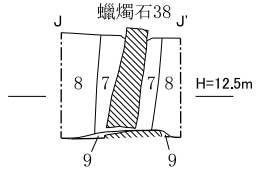


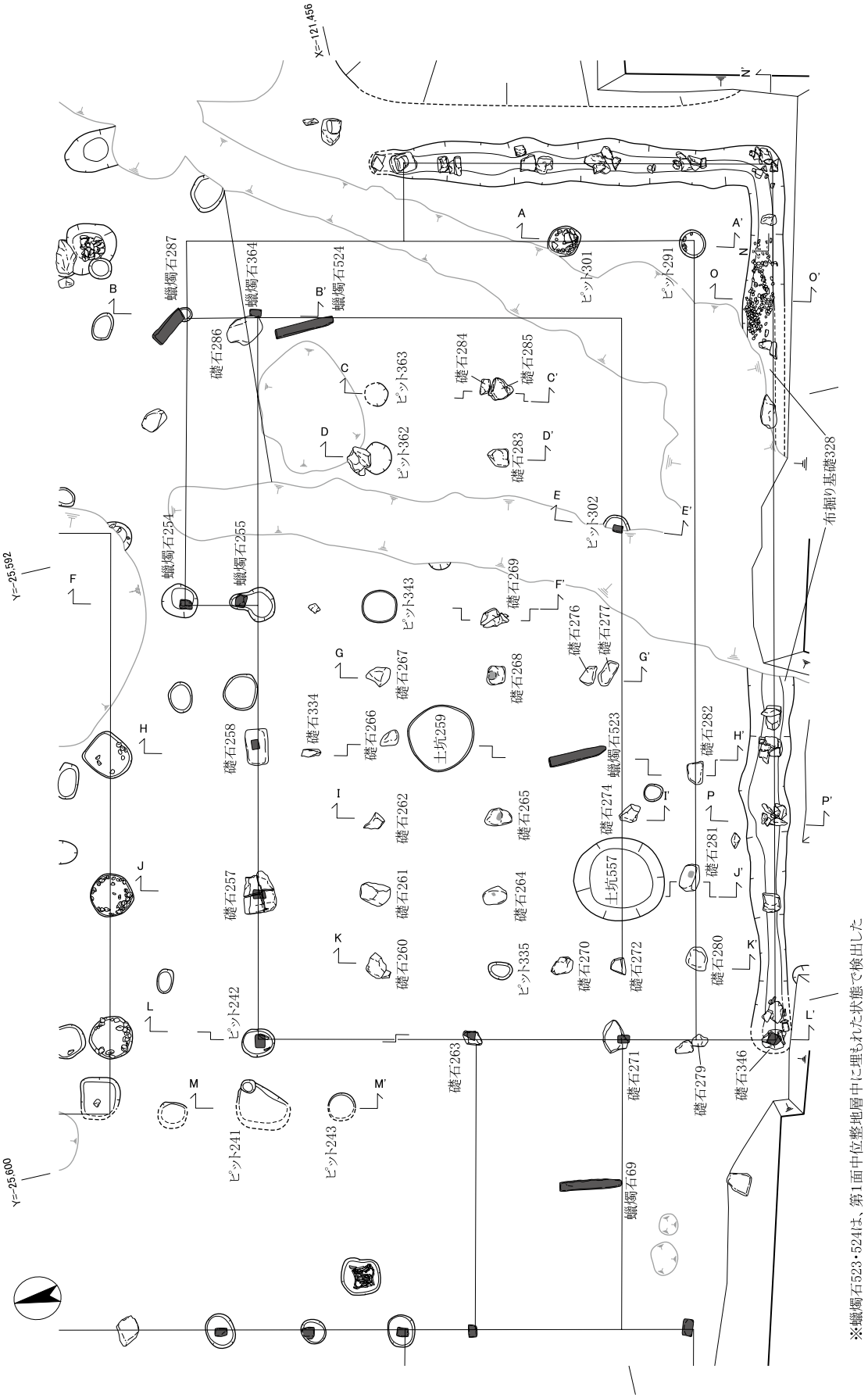


1 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂 わずかに泥砂混（砂粒はほぼ水平に堆積） ― 攪乱
2 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂（砂粒はほぼ水平に堆積） ― ピット25掘形埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 ― 礎石掘形埋土
4 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂（砂粒はほぼ水平に堆積）
5 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂 わずかに泥砂混（砂粒はほぼ垂直に堆積） ― 蠟燭石抜取穴埋土
6 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 やや粘質 ― 礎石掘形埋土
7 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂（砂粒はほぼ垂直に堆積） ― 蠟燭石掘形埋土
8 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂（砂粒はほぼ水平に堆積） ― 整地層Ⅲ
9 10YR4/4 褐色細砂 やや粘質 ― 整地層Ⅳ





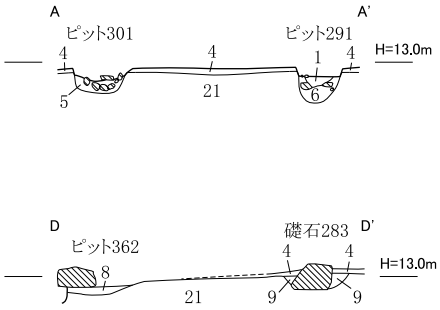


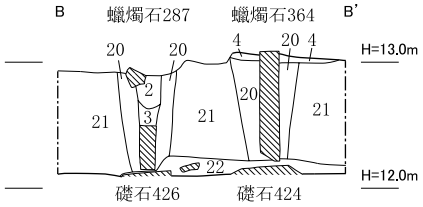


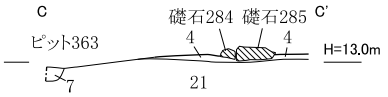
※蠟燭石523・524は、第1面中位整地層中に埋もれた状態で検出した

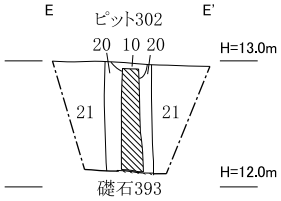
建物６平面図（１：80）

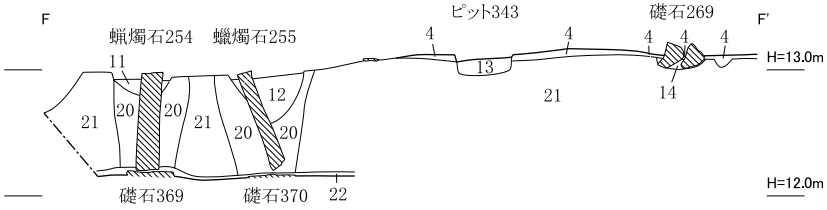
建物6断面図1（1：60）

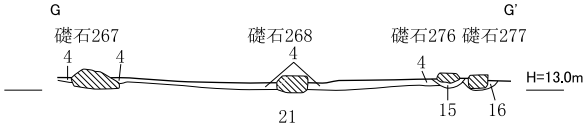


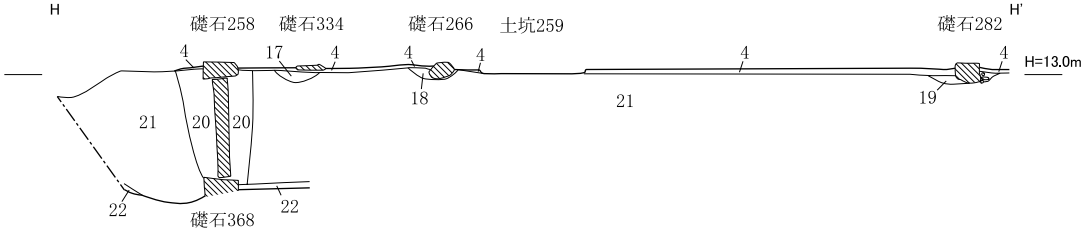






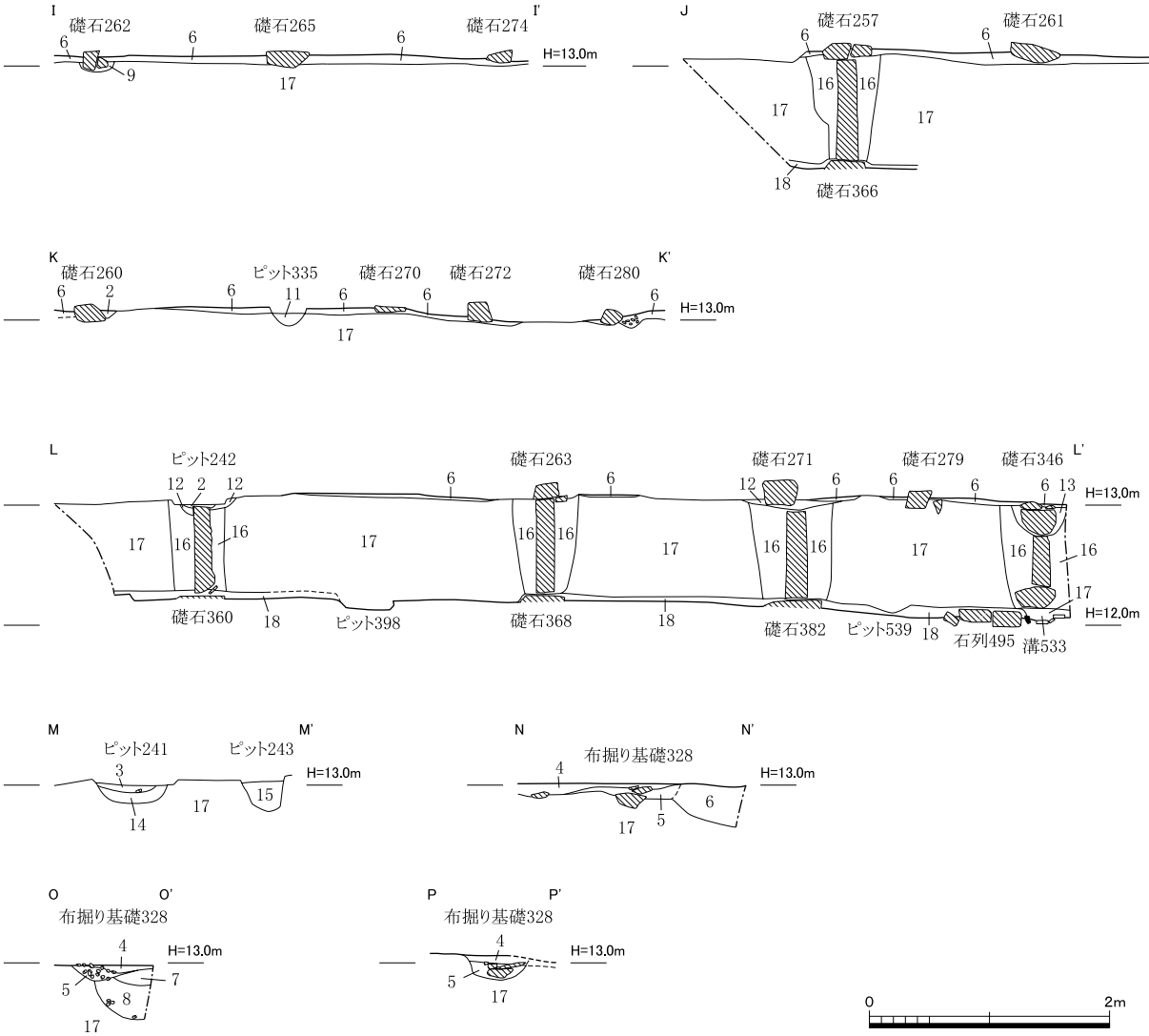




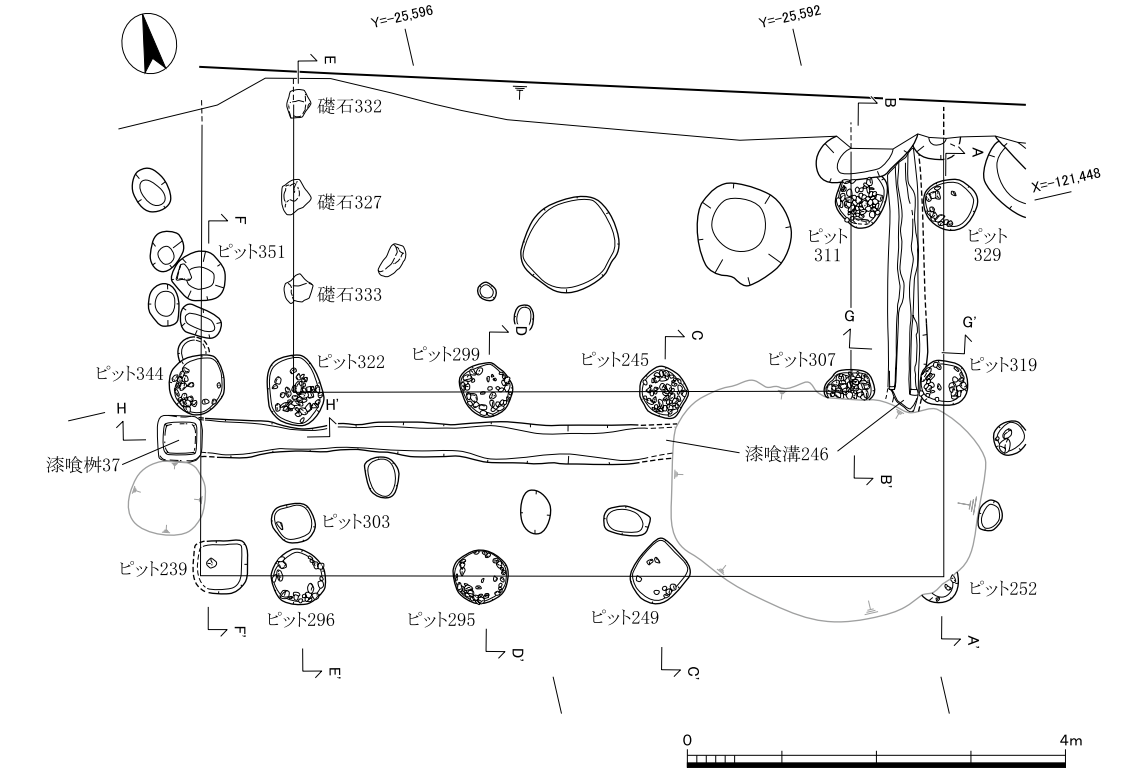


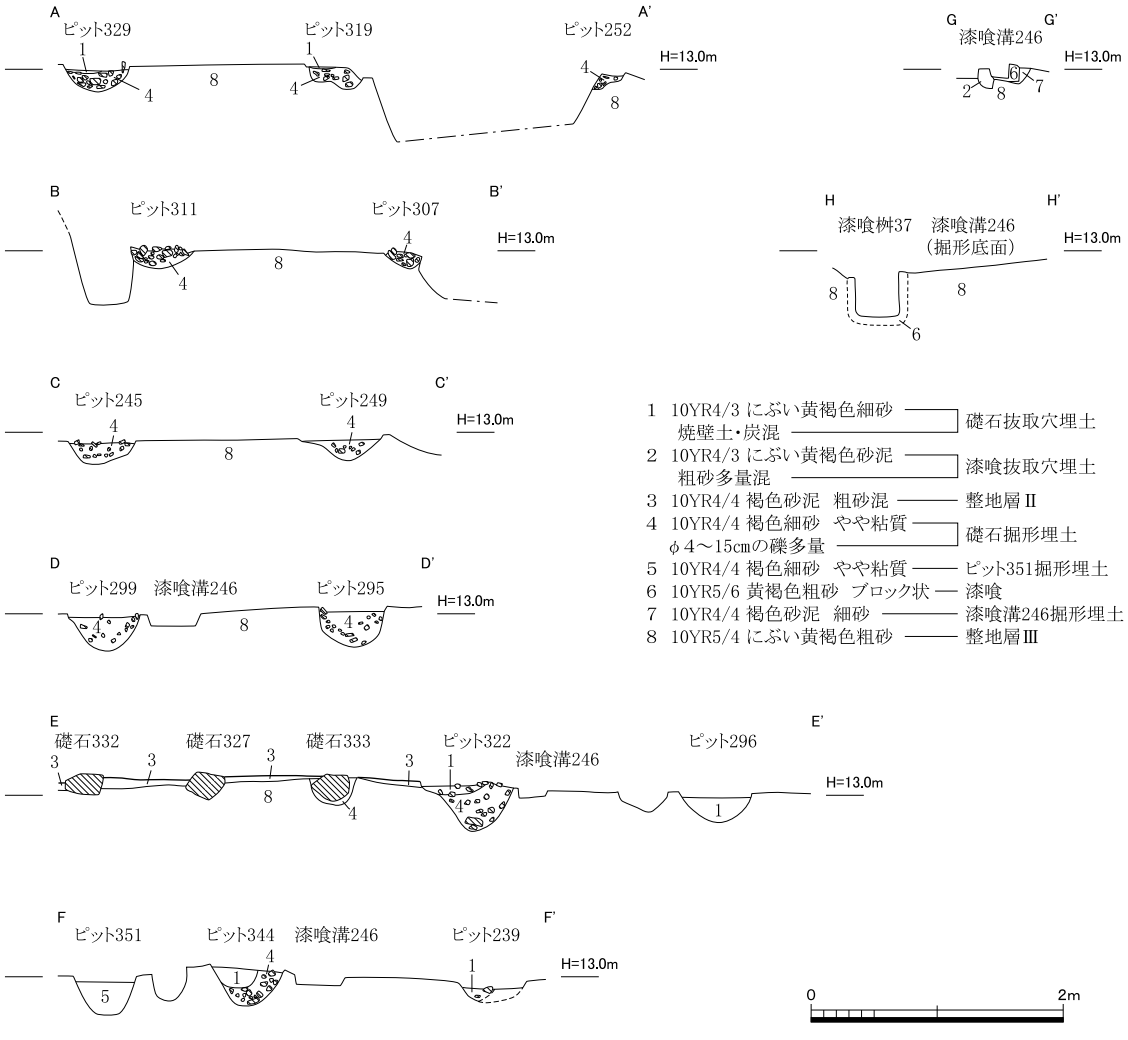
1　10YR3/3 暗褐色砂泥　粗砂混
　φ4～9cmの礫少量混　―― 礎石抜取穴埋土
2　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
　コンクリート片含む
3　10YR6/6 明黄褐色細砂　粗砂混　―― 蠟燭石抜取穴埋土
4　7.5YR4/6 褐色シルト(被熱)　―― 整地層Ⅱ
5　7.5YR4/4 褐色～10YR4/4 褐色砂泥
　粗砂質強　φ4～15cmの礫多量混
6　10YR5/6 黄褐色粗砂
7　10YR3/4 暗褐色細砂　粗砂混
8　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂
9　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
10　10YR3/3 暗褐色細砂　やや粘質
11　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂
　φ0.5～3cmの礫混
12　10YR3/4 暗褐色細砂
　粗砂混　焼土・炭混
13　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
14　10YR6/2 灰黄褐色粗砂　やや粘質
15　7.5YR3/3 暗褐色細砂
16　10YR3/4 暗褐色粗砂
　礫混　炭微量
17　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
　φ0.5cmの礫混
18　10YR4/4 褐色細砂　粗砂混
19　10YR4/4 褐色砂泥　―― 礎石掘形埋土
20　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
　(砂粒はほぼ垂直に堆積)　―― 蠟燭石掘形埋土
21　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
　(砂粒はほぼ水平に堆積)　―― 整地層Ⅲ
22　10YR4/6 褐色シルト　―― 整地層Ⅳ

建物6断面図2（1：60）



1　10YR4/4 褐色砂泥　炭混 —— 土坑557埋土
2　10YR3/4 暗褐色細砂
やや粘質　焼土・炭混
3　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
焼壁土・炭混 —— 礎石抜取穴埋土
4　10YR3/2 黒褐色細砂
φ1～2㎝の礫混
5　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
粗砂少量混 —— 布掘り基礎328構築土
6　10YR4/4 褐色砂泥
粗砂混(被熱)
7　10YR4/4 褐色砂泥　やや粘質
8　2.5Y5/4 黄褐色粘土
φ3～5㎝の礫わずかに混 —— 整地層Ⅱ
9　7.5YR4/4 褐色細砂
10　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
やや粘質
11　7.5YR3/4 暗褐色砂泥　粗砂質強
12　10YR3/3 暗褐色砂泥
粗砂混　焼土・炭混
13　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
粗砂混
14　10YR4/4 褐色細砂
φ0.1～0.3㎝の礫混
15　10YR3/4 暗褐色細砂
やや粘質　φ0.5㎝の礫混 —— 礎石掘形埋土
16　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
(砂粒はほぼ垂直に堆積) —— 蠟燭石掘形埋土
17　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
(砂粒はほぼ水平に堆積) —— 整地層Ⅲ
18　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト —— 整地層Ⅳ

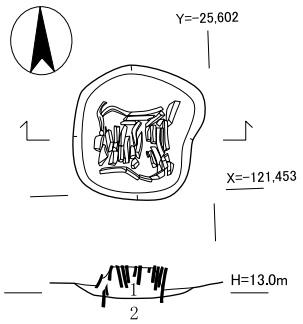




1 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 焼壁土・炭混 ― 礎石抜取穴埋土
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂多量混 ― 漆喰抜取穴埋土
3 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混 ― 整地層Ⅱ
4 10YR4/4 褐色細砂 やや粘質 φ4～15㎝の礫多量 ― 礎石掘形埋土
5 10YR4/4 褐色細砂 やや粘質 ― ピット351掘形埋土
6 10YR5/6 黄褐色粗砂 ブロック状 ― 漆喰
7 10YR4/4 褐色砂泥 細砂 ― 漆喰溝246掘形埋土
8 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 ― 整地層Ⅲ

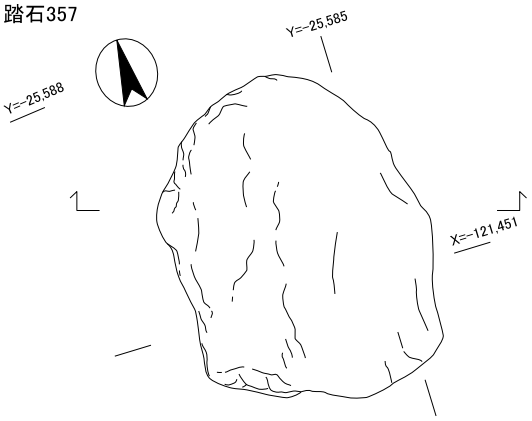
建物７平面図（１：80）・断面図（１：60）

瓦組遺構40

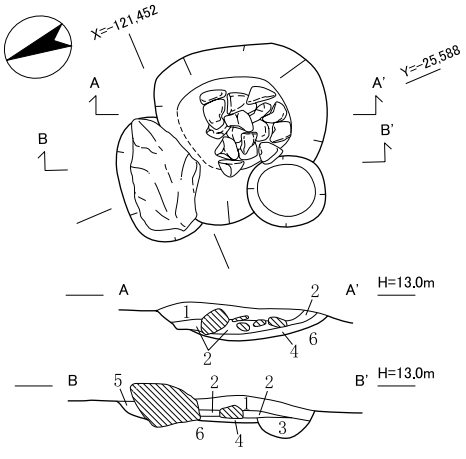


1 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 やや粘質 ── 瓦組遺構40掘形埋土
2 10YR4/4 褐色細砂 粗砂混 ──── 整地層Ⅲ

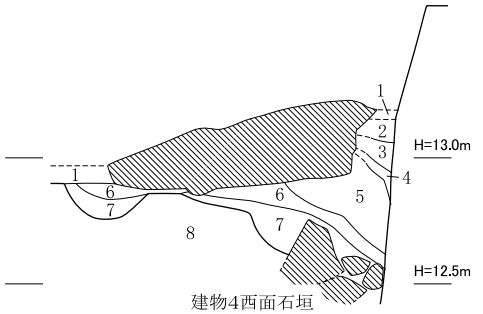
踏石357



蹲踞356



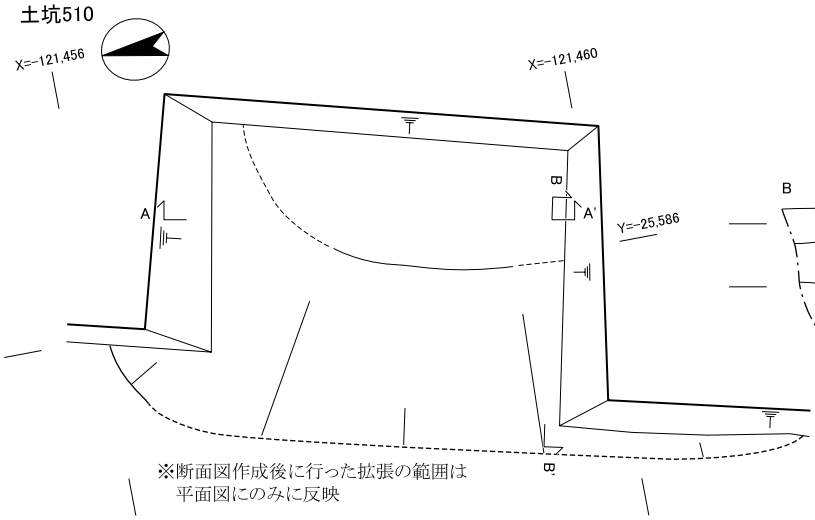
1 10YR3/4 暗褐色砂泥 粗砂・焼土混 ┐
2 10YR2/1 黒色シルト 炭多量 ┘ 整地層Ⅰ
3 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 ┐
10YR4/4 褐色細砂混 ┘ ピット(石材抜取穴か)
4 10YR6/4 にぶい黄褐色 ──── 漆喰(土坑構築土)
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 ── 石材掘形埋土
6 10YR4/4 褐色細砂 粗砂混 ──── 整地層Ⅱ



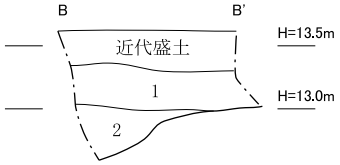
建物4西面石垣

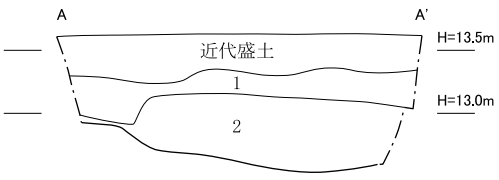
1 10YR3/4 暗褐色細砂 やや粘質 ──── 整地層Ⅱ
2 10YR4/4 褐色砂泥 砂礫混 ┐
3 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混 やや粘質 │
4 10YR5/6 黄褐色粗砂 │
5 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂・φ0.5～2㎝の礫混 │ 整地層
6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 │
7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 ┘
8 10YR4/4 褐色細砂 粗砂混 ──── 整地層Ⅲ

土坑510



※断面図作成後に行った拡張の範囲は
平面図にのみに反映

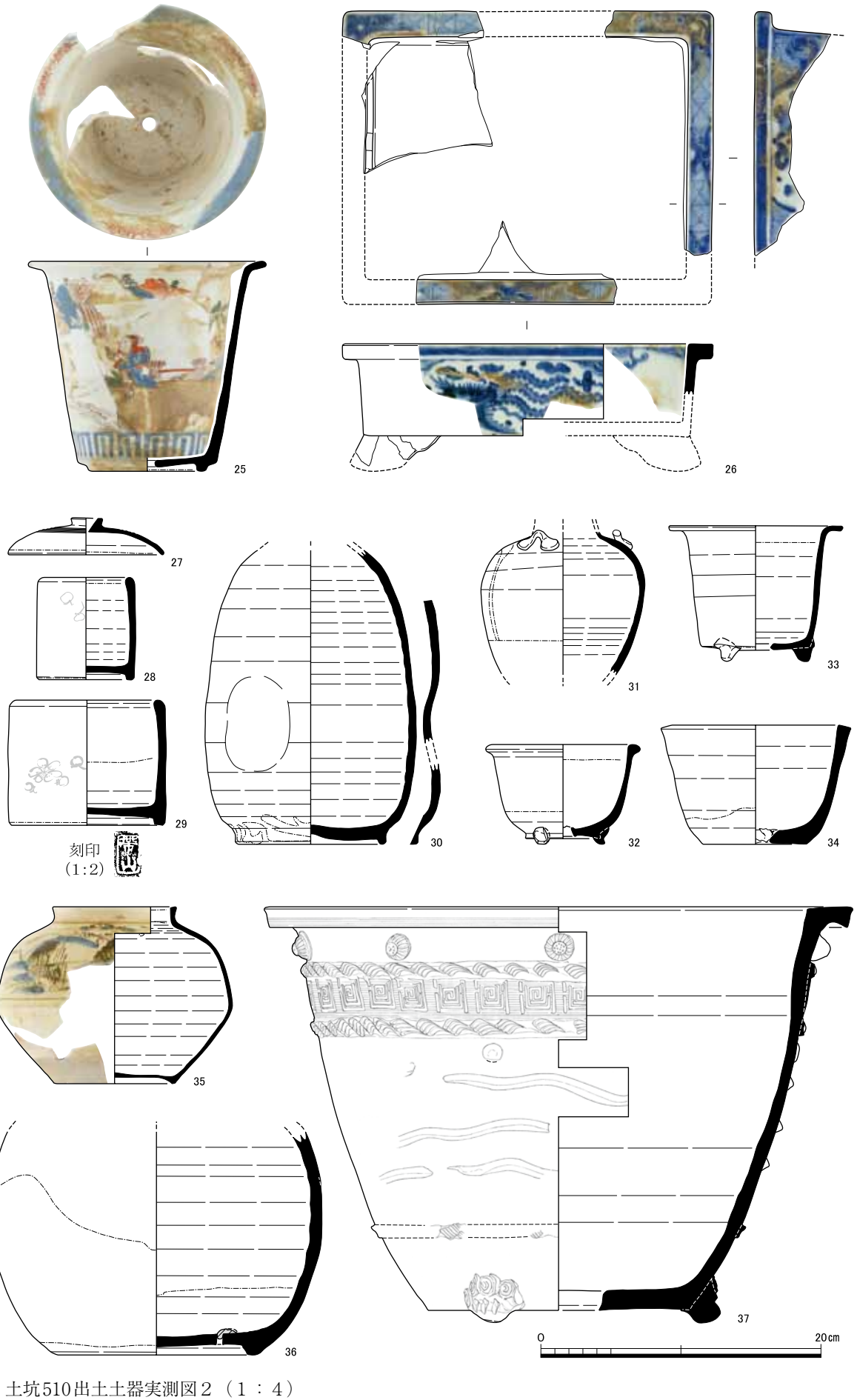




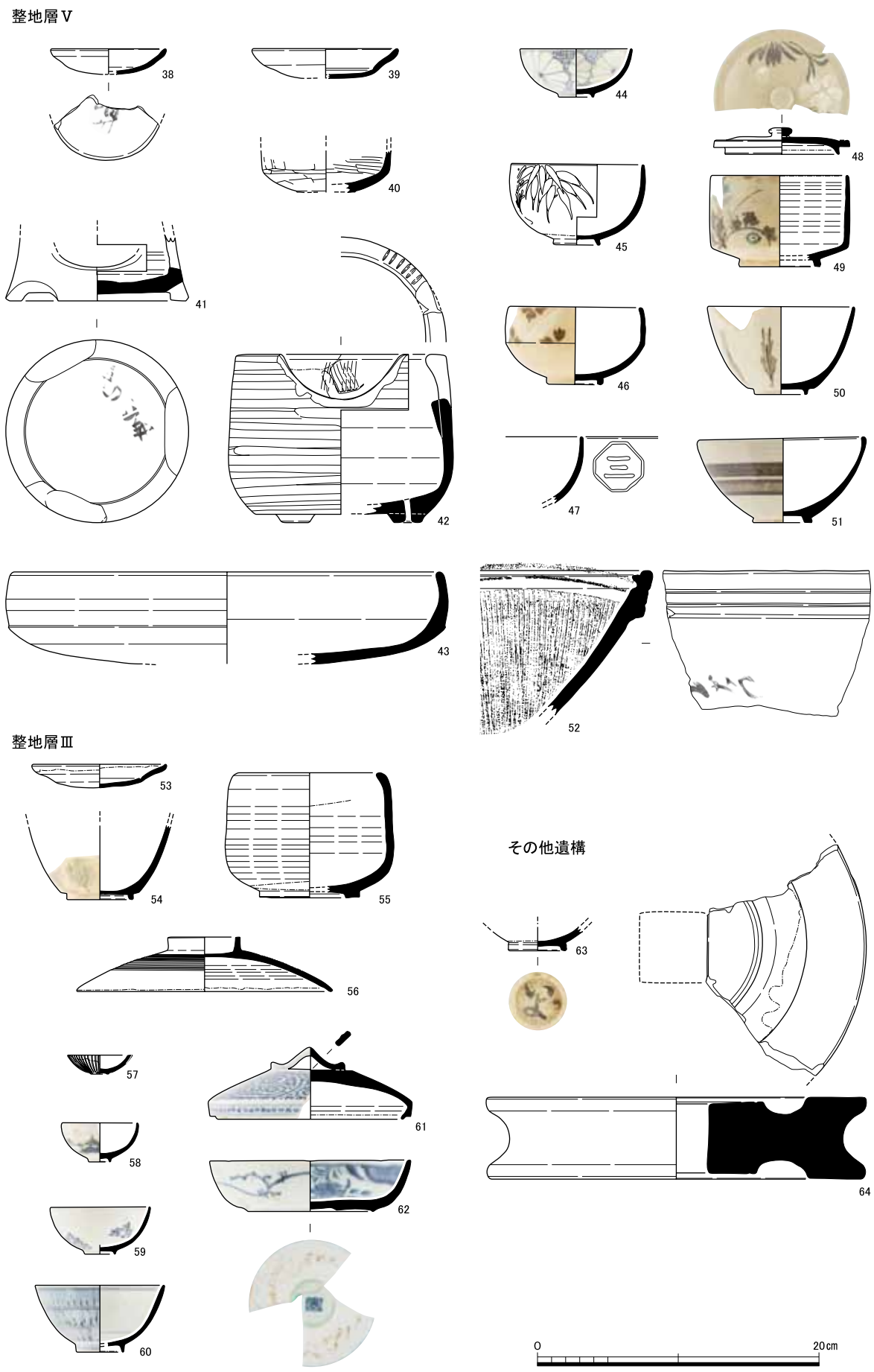
1 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 ┐
φ1㎝の礫多量 ┘ 整地層Ⅰ
2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 ┐
φ0.5㎝の礫少量・焼けた陶磁器・ │
瓦・ガラス・石製品・壁土多量混 ┘ 土坑510埋土

瓦組遺構40・蹲踞356・踏石357実測図（1：30）、土坑510実測図（1：60）

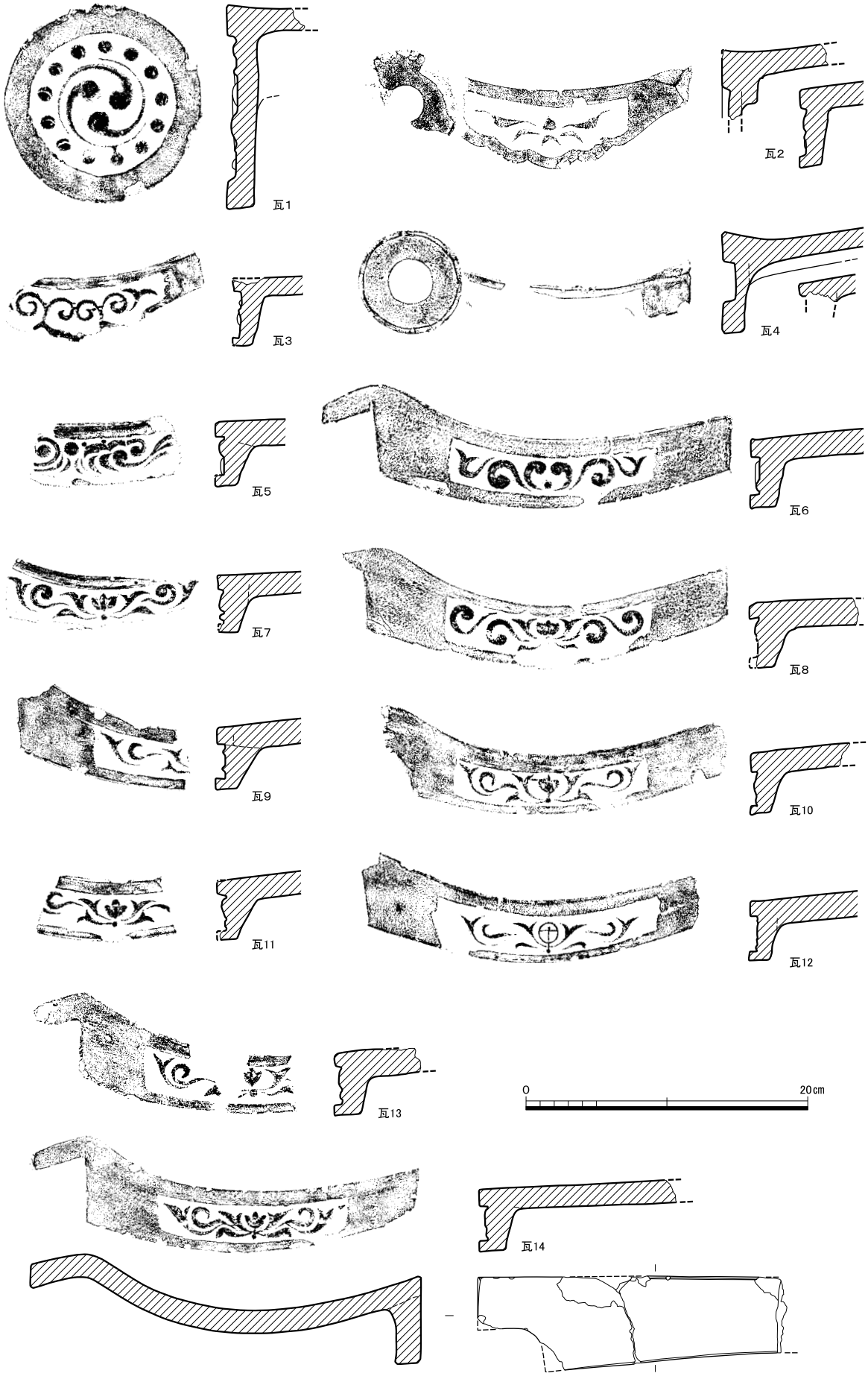
土坑510出土土器実測図１（１：４）



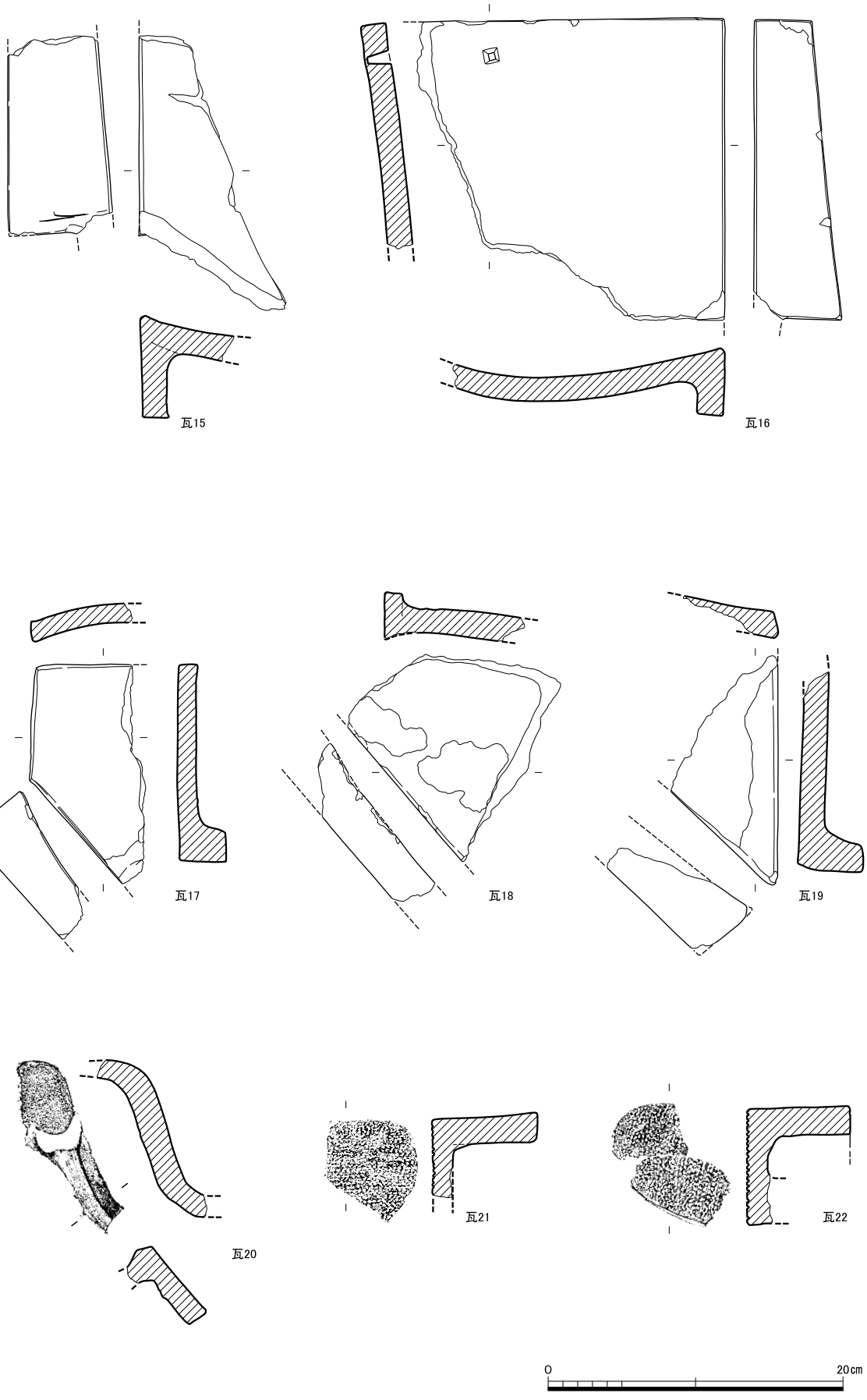
土坑510出土土器実測図２（１：４）



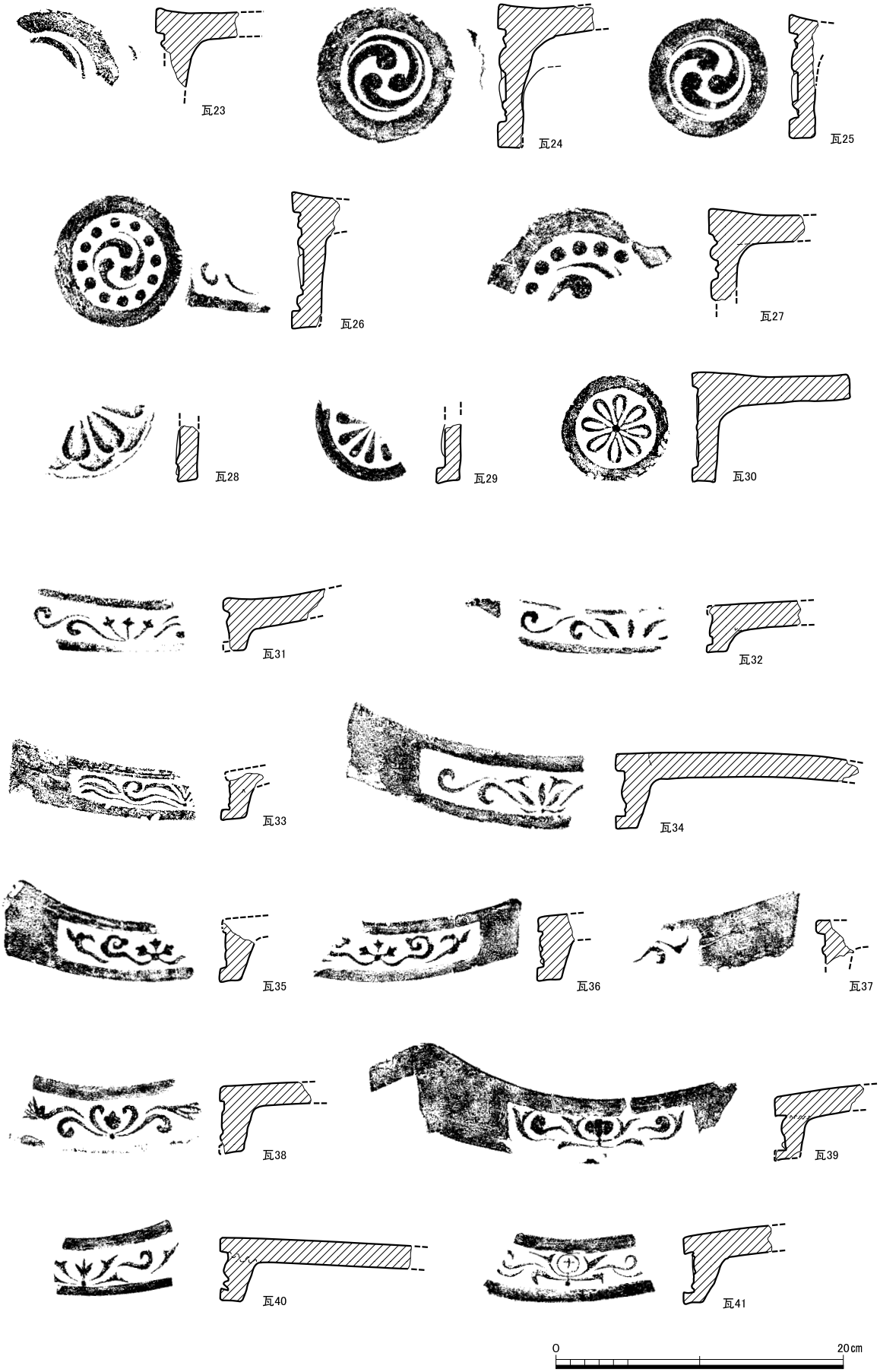
整地層Ⅴ・整地層Ⅲ・その他遺構出土土器実測図（１：４）



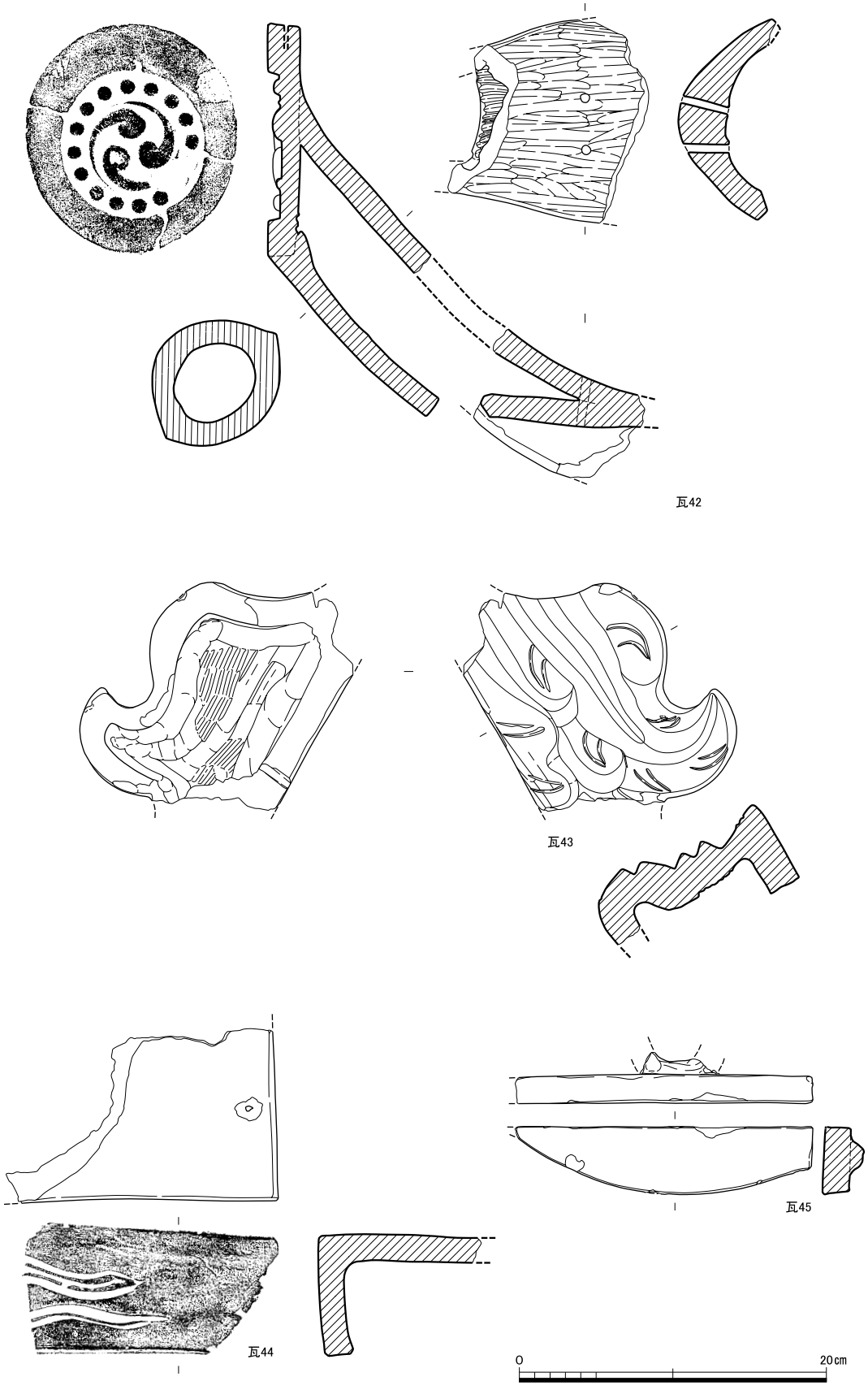
土坑510出土瓦拓影及び実測図１（１：４）



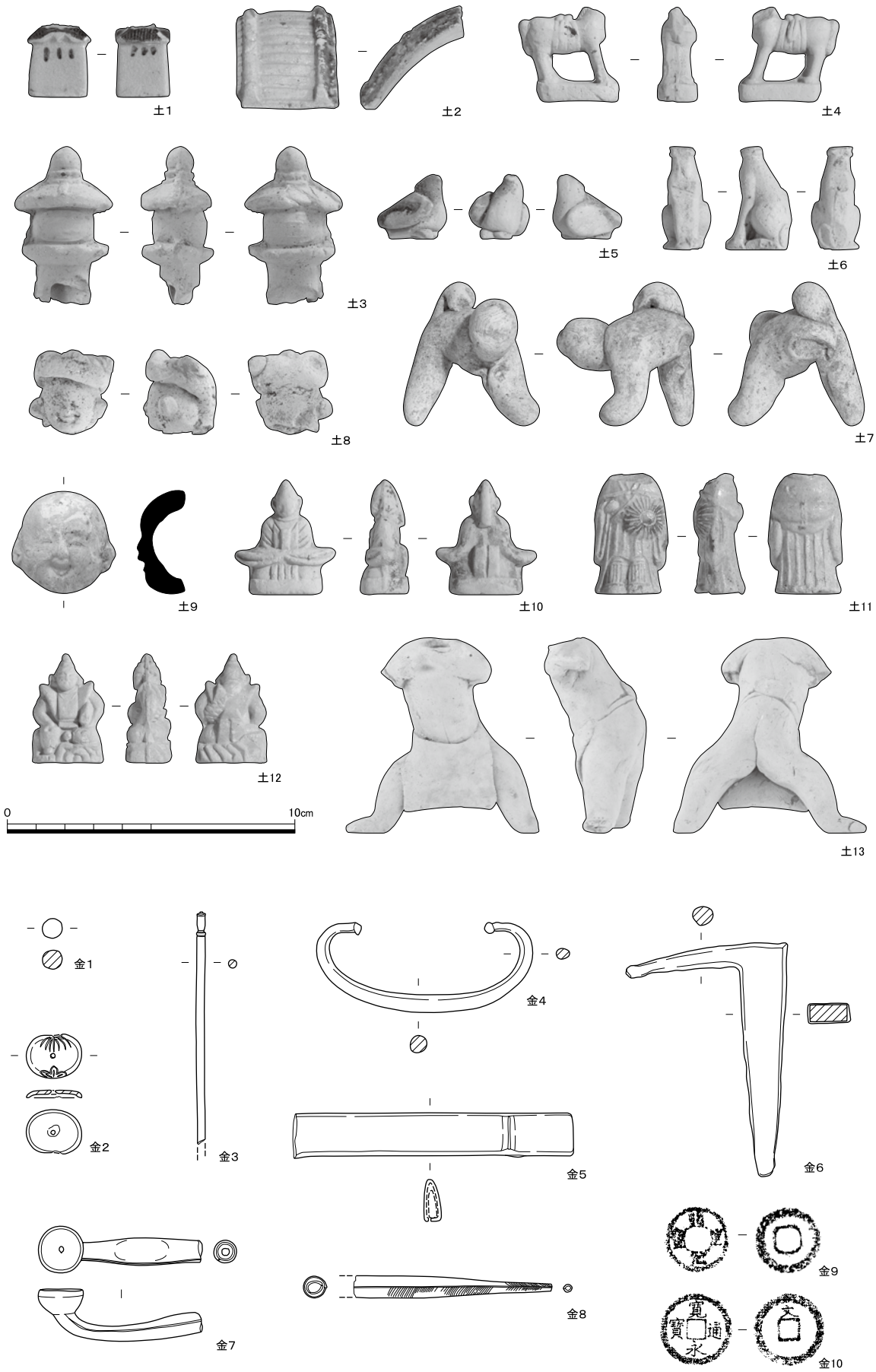
土坑510出土瓦拓影及び実測図２（１：４）



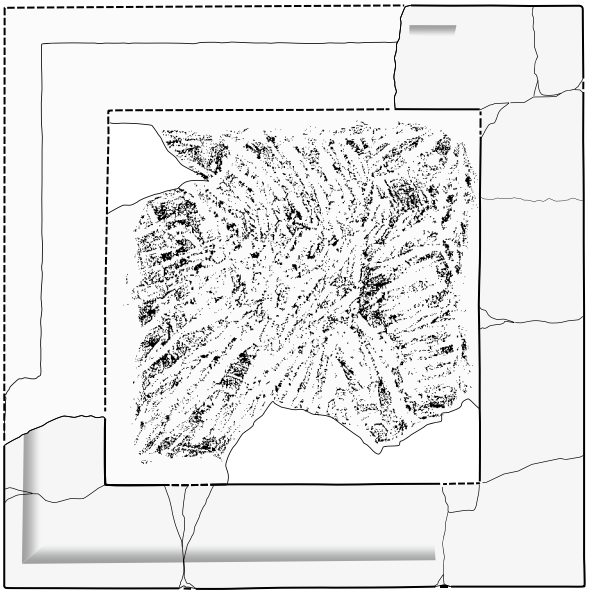
その他遺構出土瓦拓影及び実測図１（１：４）

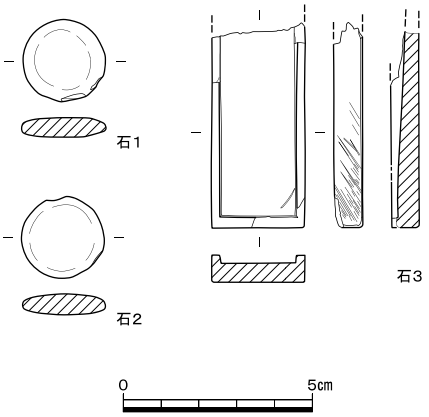


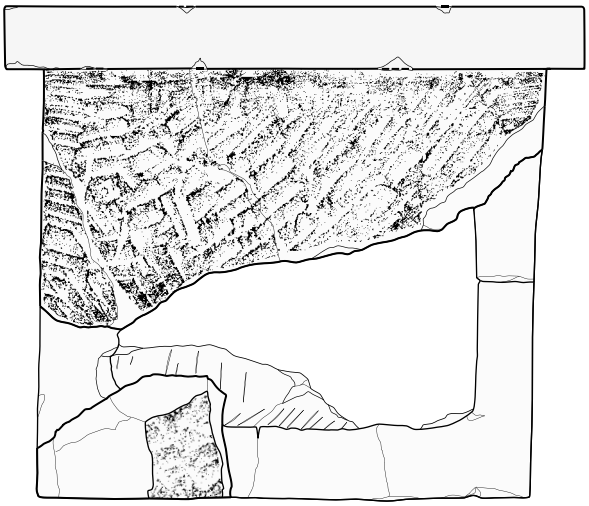
その他遺構出土瓦拓影及び実測図２（１：４）

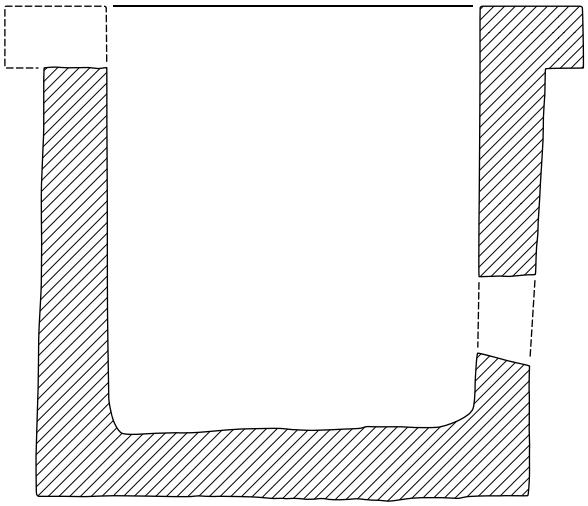


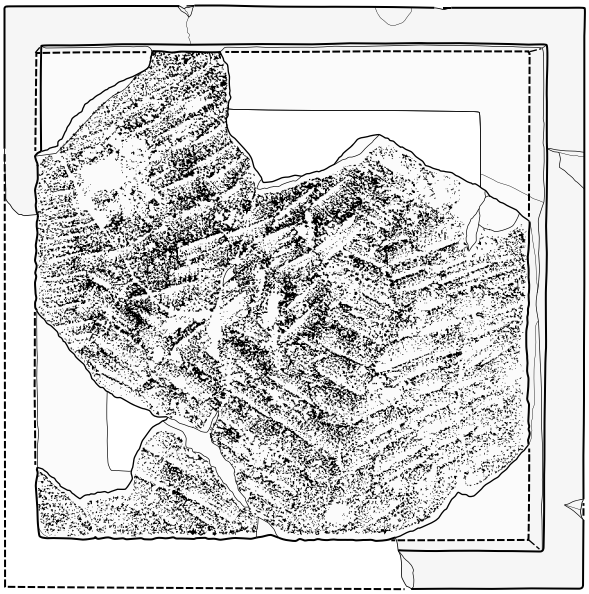
土製品・金属製品実測図及び拓影（１：２）

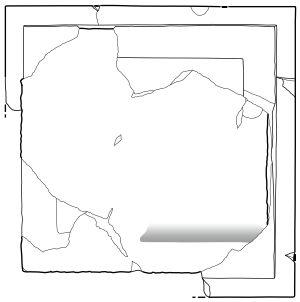












底部外面の煤痕模式図(1:12)

煤痕

石4

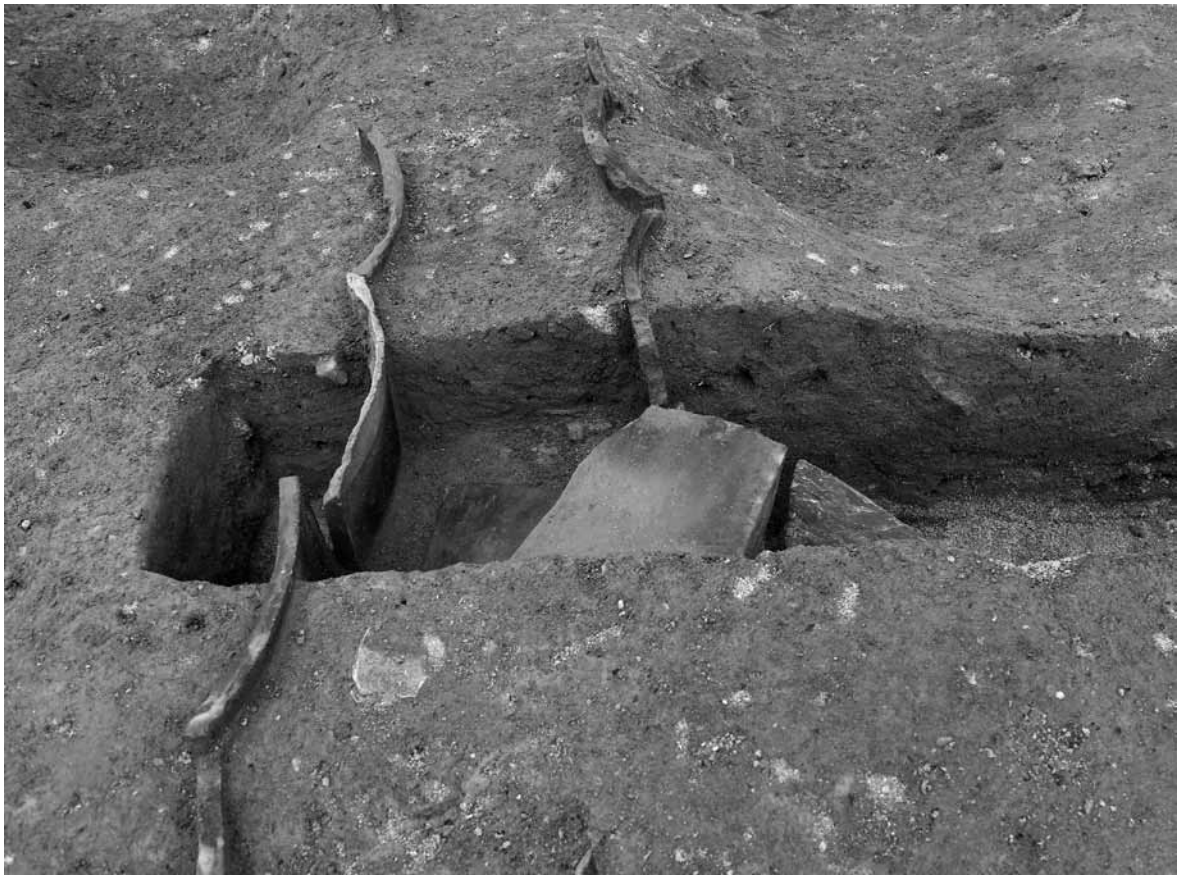
0
30cm

石製品実測図及び拓影（１：２、石４のみ１：６）

1　第２面東半全景（西から）

2　第２面西半全景（西から）

1　建物１北部　溝128・瓦列126・石列132（南西から）



2　溝128断割（南から）

1　建物１東部　石列203（南東から）

2　建物１南部　瓦敷124・石列216（北西から）

3　建物１南西部　瓦敷124（北から）

1　建物２（東から）

2　建物２南部　南辺礎石列断割（北西から）

3　建物２南部　礎石382断割（西から）

4　礎石382上面加工痕（西から）

1　建物２南部　三和土502及び補修痕跡（北西から）

2　三和土502上面　柱痕の列（北東から）

3　三和土502上面　礎石549直上の柱痕（北東から）

4　三和土502　柱痕と下層の礎石551（北から）

1　建物３（西から）

2　建物３東部　断割（南東から）

1　建物３西部　瓦列421（北西から）

2　瓦列421下層　地業562（北西から）

1　建物４（西から）

2　建物４南部　石垣501南面（南西から）

3　石垣501南面細部（南から）

1　建物４西部　石垣501西面（西から）

2　石垣501西面　検出時（西から）

3　石垣501西面　断割（南から）

1　溝503・511（北西から）

2　溝511東部（北から）

3　溝511南東部　改修後（西から）

1　溝427・488・503・511（東から）

2　溝503（南から）

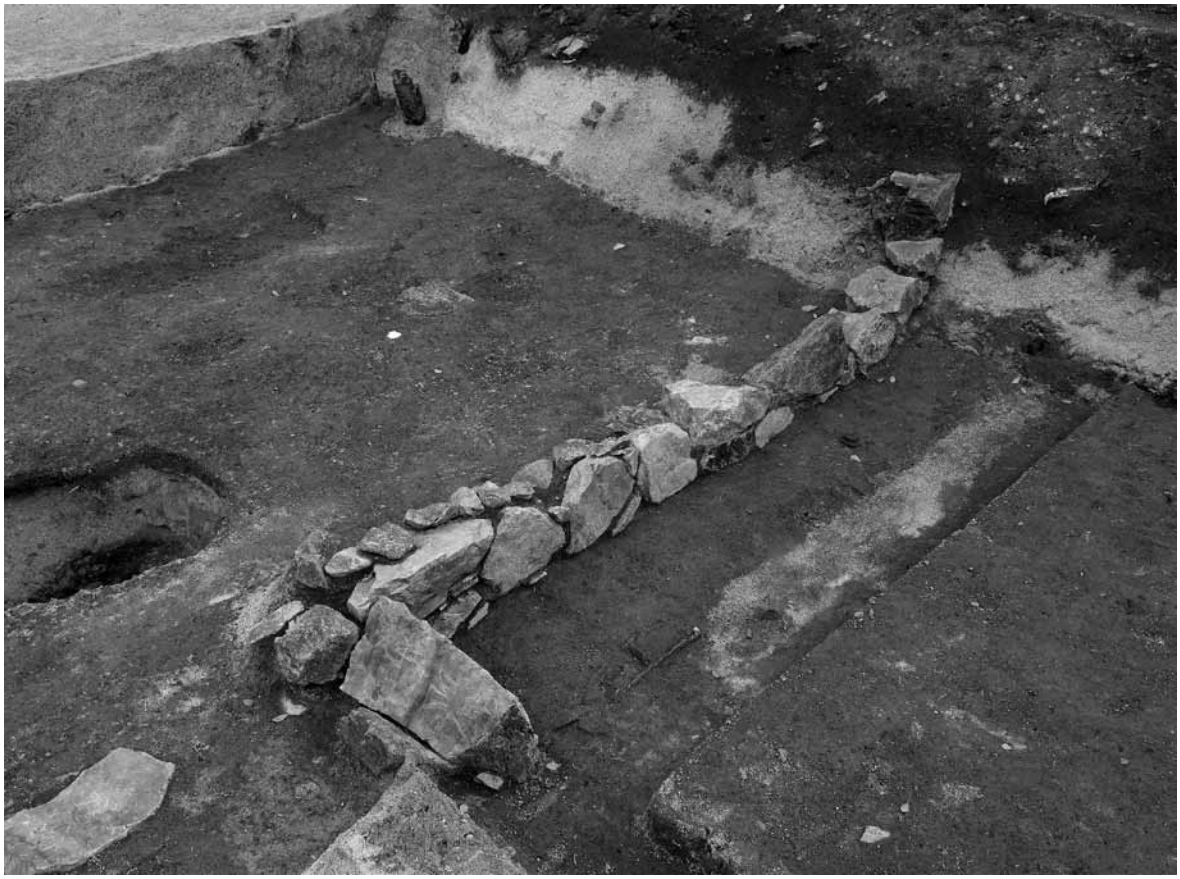
3　瓦組遺構515（南から）

4　土坑96半裁（北西から）

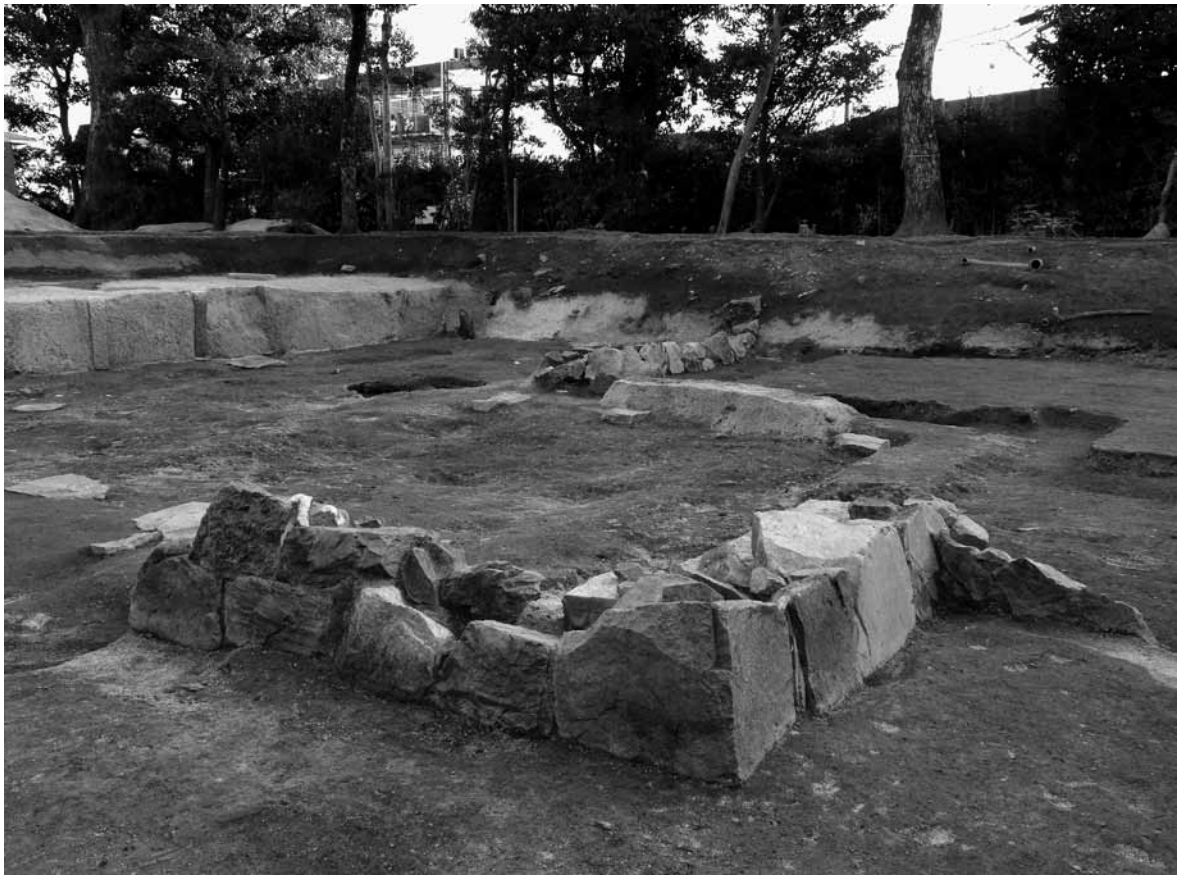
1　第１面東半全景（西から）

2　第１面西半全景（西から）

1　建物５西部　石垣43・88（北西から）



2　建物５南西部　石垣43（北西から）

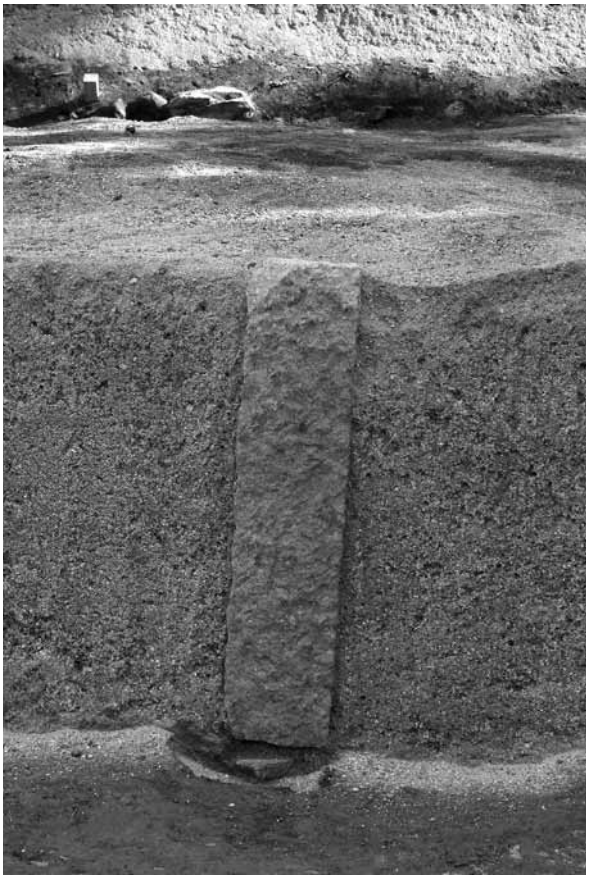


1　建物５北西部　石垣88（北西から）

2　石垣88細部（北から）

1　建物５南部　蠟燭基礎列（西から）

2　蠟燭基礎列（北から）



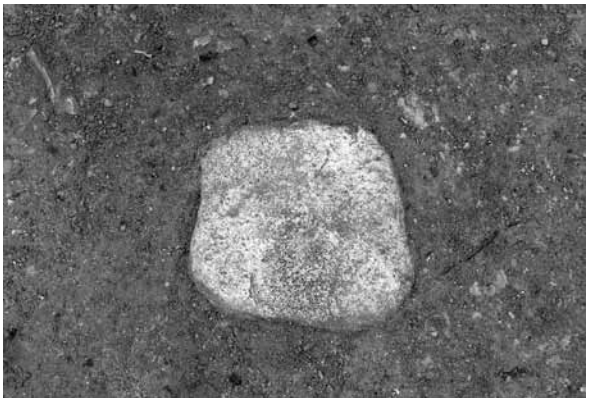
3　蠟燭石61（西から）

1　建物６（西から）

2　建物６南東部　布掘り基礎328（南から）

1　建物６西部　蠟燭基礎列（北西から）

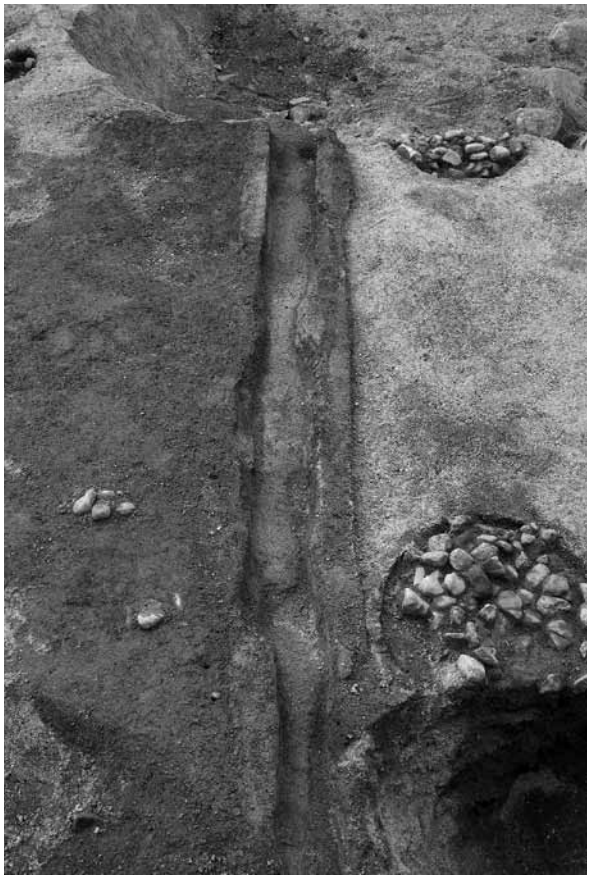
2　建物６　礎石263（西から）



3　建物６　礎石268被熱痕（北から）

4　礎石268断割（西から）

1　建物７（東から）



2　建物７　漆喰溝246（北から）

3　漆喰溝246半裁（南から）

4　建物７　ピット295半裁（西から）

1　土坑510半裁（北西から）

2　蹲踞356（南から）

4　瓦組遺構40（東から）

3　蹲踞356細部（南西から）

5　踏石357（南西から）

1　土壁検出時（西から）

2　土壁剝ぎ取り直後細部（西から）

3　第３面全景（北から）

39

40

47

51

14

21

33

25

出土土器

瓦2

瓦6

瓦12

瓦28

瓦41

瓦21

瓦43

出土瓦

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ながおかきょうあと・よどじょうあと
書　　名	長岡京跡・淀城跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２１－１４
編 著 者 名	中谷俊哉
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市伏見区淀池上町128
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2022年11月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長岡京跡（ながおかきょうあと） 淀城跡（よどじょうあと）	京都市伏見区（きょうとしふしみく） 淀池上町128（よどいけがみちょう）	26100	3 1191	34度54分18秒	135度43分11秒	2021年11月22日～2022年２月28日	433.5㎡	建物増築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 淀城跡	都城跡 平城跡	江戸時代中期以前	ピット列、ピット		江戸時代中期～末期の家老屋敷を検出した。 江戸時代後期に洪水対策として屋敷地の嵩上げが行われた。 蠟燭基礎を採用した礎石建物を検出した。 鳥羽・伏見の戦いに伴う火災痕跡を確認した。
		江戸時代中期～後期	建物、三和土、瓦列、瓦敷、溝、瓦組遺構、土坑、落込、地業	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、土製品、金属製品、石製品	
		江戸時代後期～末期	建物、漆喰溝、漆喰桝、石垣、通路状遺構、蹲踞、踏石、瓦組遺構、土坑、土壁	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、金属製品、石製品、ガラス製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-14

長岡京跡・淀城跡

発行日　2022年11月30日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961